

---

# 二人の少年 ～ ～ 十七小隊最強記！？

治田 神裕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人の少年〜十七小隊最強記！？

### 【Nコード】

N0660L

### 【作者名】

治田 神裕

### 【あらすじ】

二人の少年がいた、片方は天剣を取り 片方は地刀をとった。

二人の志しは同じしかし二人は挫折する。鋼殻のレギオスの二次創作です。たまに別作品のネタが入るかもしれませんが。オリ主とレイフオンの話しです。（現在原作から離れております原作に戻るのに少しかかります）原作に沿いますがシリアスはかなりカットします。

しかし学園生活や恋愛方面にシフトするかもしれませんというかし

ます。

四十万PVアクセス突破！ユニーク五万人突破です。ありがとうございます。

## この作品について（前書き）

鋼殻のレギオスの最新刊発売を記念して書きました。週一で更新します。

## この作品について

この小説はレギオスの最新刊発売&第二部開始を記念して、第一部を振り返るついでに書くこうという思いつきも甚だしい話です。

原作になるべく沿いますが、オリキャラのつじつま合わせで少し離れたり変わったりします。

シリアスはほぼカット、ただし少しは、入るがかなり抑えたものになります。

話としてはレイフォンとオリキャラの半々で話しを進めようと思えます

当然レイフォンはハーレム状態、オリキャラにはオリジナリまたは原作キャラを絡めようかと……

オリキャラ（オリ主）はレイフォン並に強いです

当然男です。

ラストは最強の十七小隊ができるかと（笑）

それでもよい人はお読みください。

最後にクラリーベルはレイフォンと同じ年についてくるという設定です。

リーリンの登場は原作通りとなります。

鋼殻のレギオス〜二人の少年の物語（前書き）

勢いで書いてます。

暇潰しにでもどうぞぞー！

## 鋼殻のレギオス〜二人の少年の物語

一人の少年は子供達を助けようと金を稼ぐ為剣をとり

もう一人の少年はただ護る為に剣をとった。

目的は同じ、しかし彼等は挫折する

一人は彼らから夢と英雄像を奪い

一人は彼らを護れなかった。

一人は天剣を失い

一人は仲間を失い

二人は都市を去る。

一人は追放され

一人は思い出を嫌い

二人は学園都市に向かう

そして物語は始まる。

「お別れだな……この都市とも……」

俺は海山都市ヤマトの街を眺めた、以前は和風の建物が並んでいた街も今では半分近くが焼けてしまっている。

一瞬、淋しさが胸を過ぎったがそれを無視すると少年は放浪バスに乗り込んだ。

「……………次はグレンダンか……………レイフォンは元気かな……………」

そう言って少年、カズマ・ミヤモトは目を閉じた。

鋼殻のレギオス〜二人の少年の物語（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

再開（前書き）

今日ラストです。どうぞ

## 再開

「グレンダンか……五年振りだな……」

放浪バスが補給と整備を行っている間、カズマは宿泊施設からグレンダンの町並みを眺めていた。

彼はかつてこの都市の孤児院にいたが十歳の時祖父が見つかり引き取られて海山都市ヤマトに戻ったという過去を持つ。

久しぶりに挨拶に行こうかと思っていると……

「つつ！」

幼なじみを見つけた。レイフォン・アルセイフである。

「おい！レイフォン」

「アル！？」

「久しぶりだなあ」

「五年振りだよ」

「そうか、ところで今はアルフォートじゃなくてカズマだ」

「あっ！そうかごめん、カズマ」

「別にいいさ、それよりどうして放浪バスなんか？」

「うっ、……まあいろいろあってね、学園都市に行くんだ」

レイフォンが顔を暗くしたのを見てカズマは何かあったことを悟った。

「へーっ！レイフォンもか？」

「まさかカズマも？」

「ああ、俺はツエルニに行くんだが……レイフォンは？」

「うそっ！僕もツエルニだよ！？」

「へー、偶然だな、まあ同じ都市に行くならよろしくな」

「いや、こっちこそよろしく頼むよカズマ」

「しかし……レイフォン、お前しばらく武芸してないだろうっ」

「うっ……」

黙り込んでしまったレイフォンを見てカズマは……

ふーむ、これもためか、どうやら武芸で何かあったな……

レイフォンの事情を察しつつあった。

「まあ、いいさそれよりデルク、親父さんは？」

「元気、だと思っ……」

「おいおい、思っって会ってないのか？」

ちっ！こいつは思った以上に厄介なようだな。

「まあ、いいさ。じゃあ明日また会おうぜ」

「うん、またね」

去っていったレイフォンを見ながらカズマはレイフォンの事情を探る決心をした。

街に出て旧友や知り合いに会いつつそれとなく事情を聞くと大体の事情は分かった。

「成る程……つまりレイフォンは賭け試合に出ていたのがばれて……以下略」

「全く、不器用な奴だなレイフォンは」

しかし幼なじみが変わっていないことに懐かしさを抱いた。

ほんじゃまあ、デルクの親父さんに会いに行くか……

その夜、デルクの親父さんと話した俺はサイハーデンの本来の意義

を話してレイフォンを励ますよう頼んだ。

「……………自主練するか」

話しを終えた俺は都市の外縁部で自主練を行った白金鋼ダイトに頸を通していく……………

「ふっ！」

カズマは頸を開放する長い夜が始まった。

翌朝

「よっ！来たなレイフォン」

「カズマ……養父さんに何かした？」

「ん？ああ、少しなだけであれが親父さんの本心だ嘘偽りのない本当のな……」

「うーん……そうかな？」

「そうよ！アルフォート、じゃなくてカズマの言う通りよ励まして貰ったんだから素直に受け取りなさい！！」

「わっ、分かったよりーリン」

「ははっ、相変わらずだなリーリン」

「ええ、レイフォンがすっかりしないから気を抜けないのよ」

「ははっ、違うない」

この後適当に話して時間を潰したがこの後意外な人物と出会った。

## 再開（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

クラリーベル登場！！（前書き）

続く限り投稿します。

## クラリーベル登場！！

あのあと適当に話して時間を潰した俺は何か言いたそうにしているリーリンと、別れ惜しそうにしているレイフォンを見て空気を讀んで先に行くことにした。

……いい加減にあの二人はくつつかねえのか？

ちなみに他人の恋愛に関しては鋭いカズマも自分のこととなるとレイフォンとタメを張るくらい鈍感である。

「先に行ってるぞ！」

二人に声を掛けるとカズマは放浪バスへと向かった。

「おっ？」

停留所に入ろうとしたカズマは同い年くらいの少女を見つけた。

「誰だっけ？」

その少女に見覚えがあったカズマが首を傾げていると少女の方からこちらに声をかけてきた。

「こんにちは」

「あっ、どうもこんにちは」

とりあえず返事をしておく

「もしかして貴方レイフオンのお知り合いですか？」

「ええ、そうですけど……失礼ですがお名前は？」

「あら、失礼しました私の名前はクラリーベル・ロンスマイアです」

「ロンスマイア！？三王家の？」

「ええそうです。貴方のお名前は？」

「失礼しました、俺の名前はカズマ・ミヤモトです」

「そうですか、ところでレイフオンの知り合いということは当然強いのでしょうか？」

「まあ、そこそこには……」

「では、手合わせして戴いてもよろしいですか？」

「えっ！？今からですか？」

「ええ……あっ！まさか貴方ツエルニに行かれるので？」

「そうですけど……」

「では手合わせは向こうに着いてからでいいです、同じ都市に向かうのですからよろしくお願いしますね」

「ええ！？クラリーベル様も学園都市に向かわれるので？」

「ええ、そうですね何か？」

「いえ、王族の方が都市を出られるのが意外で」

「ああ、」

そう言うとクラリーベルは、話しが終わったらしくこちらに歩いてきたレイフォンを見ながら言った。

「少し興味のある人がいるものですから」

その言葉を聞きながらカズマはレイフォンはまたフラグを立てたのかと半ば呆れていた。

クラリーベル登場！！（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

学園都市ツェルニ（前書き）

ツェルニ到着です。

## 学園都市ツエルニ

あの後レイフォンと合流した俺はクラリーベルを紹介して三人で向かうことになった。

レイフォンは驚いていたが……理由はわからないんだろうな……

相変わらずの鈍感ぶりに呆れてしまった。

ちなみに旅をしている間に敬語もとれて互いに名前で呼ぶようになった。

「ここが学園都市か……」

カズマ達は約一ヶ月かけて学園都市ツエルニに辿り着いていた。

「学生しかいないというのは本当のようですね」

「思ったより大きいね」

それぞれ思い思いの感想を口にする。

「まあ、じっとしてても仕方ないし寮に行こうぜ」

「そうですね、では私は向こうなので」

「ああ、じゃあまた後でな」

クラリーベルが去ったのを見て

「じゃあ、俺達も行こうぜレイフォン」

「そうだね」

二人は第一男子寮に向かった。

「思ったよりも広かったな」

「うん、それに同じ部屋でよかったよ」

「そうだな、知らない奴とだとやりづらいからな」

レイフォンと寮の感想を話しながら待っていると

「お待たせしました」

クラリーベルがやって来た。

「おう、来たかクララ、それじゃあこれからどうするっ。」

「少し早いけど夕飯の買い物でもしない？」

「おっ、それいいな」

レイフォンの提案を採用した三人は買い物をしたあと夕食を食べて別れた。

翌日

朝合流して入学式が行われる講堂に向かっている途中で騒ぎがあっ

た。

「どうやら、武芸者が喧嘩しているようですね」

いち早く内力系活頸で聴力を強化したクラリーベルが教えてくれた。

「ふーん、まあ実害はないみたいだし行こうぜ」

「そうですか、では私は見てきます」

「暴れたいみたいだな」

「放浪バスで一ヶ月もじっとしていましたがからね少し動きたいんですよ」

と、話しているうちに喧嘩の現場に着いてしまったようだ。

「あーあー、喧嘩なんかして」

「カズマ、まずくないかい？」

「ああ、そうだな」

レイフォンの言う通り喧嘩はだんだんエスカレートしている放っておいたらまずいだろう

仕方ない止めるか。

そう思ってカズマが一步踏み出した瞬間、

「つつ！もう我慢ならねえ！レストレーション」

「上等だ！レストレーション」

喧嘩していた二人が錬金鋼ダイトを復元する

それを見た野次馬がパニックになって押し寄せて来た

「くそっ！遅かったか……ん！」

見れば押し寄せる人の波一人の少女が巻きこまれかけていた。

「レイフォン！」

叫ぶと同時に俺達三人は移動していた。

内力系活頸が変化 旋頸

高速移動を行った三人はまずレイフォンが女の子を助け、クラリーベルとカズマが喧嘩していた二人を倒した。

「やれやれ、面倒な……行くぞレイフォン」

「あっ、うん」

俺達は面倒を避けるためその場を後にした後にしたのだが……

「そんなに畏まらなくてもいいよ」

「「はあっ」「」

なぜか俺達は生徒会長の前にいた。

「とりあえず座ったらどうだい？」

「いえ、それは「では遠慮なく」 カズマ!？」

「別にいいだろ、遠慮しないでレイフォンも座れよ」

「……分かったよ」

レイフォンが渋々ながら座る。

あつ、ちなみにクラリーベルはいない呼ばれたのは俺とレイフォンだけだ

「では、早速用件を聞きましょうか、あんなことまでしてなにが知りたいんですか？」

「ほっつ……」

生徒会長カリアン・ロスは素直に驚いていた。

「そこまで分かっているのなら話しは早い、レイフォン・ウォルフ シュティン・アルセイフ君、アルフォート、いやカズマ・ミヤモト君」

レイフォンとカズマは揃って眉をひそめた。

「……………なんのことでしょうか？」

「…誰の名前ですか？」

「存ぜぬを通すつもりなら、それでも構わないのだが……………提案だ。レイフォン・アルセイフ君、カズマ・ミヤモト君、武芸科に転科しないかい？」

「は？」

「幸いにも、武芸科の席が二人空いてしまった。喧嘩していた二人さ退学して貰ったのでね」

「いや、ちょっと待ってください」

抗議の声を上げたのはレイフォンだ。

しかしカリアンの追及を受けて撃沈した。

都市の死、ツエルニの抱える事情を突き付けられレイフォンは黙ってしまった。

仕方ない

「もちろん見返りはあるんだろう？」

「ああ、君達の奨学金のランクはAになる。学費は免除ということになる。君は自分の生活費を稼げばいい。機関掃除をせぜともいい

よ

それをカズマも後押しした。

「レイフォン、お前武芸が嫌いになった訳じゃないだろう？六年もあるんだ一年くらい困らないさ今のうちに金貯めといたらいいだろう？」

「え、……いやそれはそうだけど……」

「ちなみにデルクの親父さんはお前を許してるし認めてるぞ？」

「それに来年一般教養科に戻ることもできるよ」

カリアンと二人がかりで説得する。

思惑は違うが目的が重なった二人は強い。

5分後、レイフォンは武芸科の制服を片手に生徒会長室を出て行くことになった。

弱々しく扉が閉まった後苛立たしげなノックの音が響くとカリアンは嫌な笑みを浮かべやって来た少女に三枚の履歴書を手渡した。

Aランク奨学金の対価は高くつきそうだった。

学園都市ツェルニ（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

**入隊試験（前書き）**

次こそバトルに入ります

## 入隊試験

あの後カズマとレイフォンはカリアンから受け取った武芸科の制服に着替えていた。

「くそ、絶対たくらまれていた」

廊下を歩きながらレイフォンが毒づく。

「落ち着けよレイフォン、武芸が嫌いなわけじゃないだろう？それにここが無くなったら困るのは一緒だろ？一年やってどうしても嫌なら辞めればいい」

「確かにそうかもしれないけど……」

「それに学費免除だぞ？ラッキーじゃないか、まあ一番の理由はレイフォンと手合わせがしたいというのもあるけど」

「そつちが本音だったりしない？」

「まさか、そんなことなきにしも非ずだ」

「あるの？ないの？」

「気にしたら負けだぜレイフォン」

カズマは話しを打ち切ると教室に向かった。

「では、二人とも武芸科に？」

「ああ、そうだった」

「……僕は嫌だっけ言ったんだけどね……」

「それはよかったです。いずれ手合わせして貰いたかったのですから手間が省けました」

「ナニソレ!？」

「ああ、やっぱりクララもか？」

「カズマもですか？」

「ちょっと二人とも」

こうして三人で話していると……

「あの………すみません」

不意に声がかかった。

人形のようにきれいな少女だ。しかし武芸科の制服を着ているのに

カズマが気付いた。

「これは先輩。なにか御用でしょうか？」

カズマの言葉で、レイフォンとクラリーベルも剣帯にあるラインの色が自分と違うことに気付いた。剣帯には細い棒状のものが吊り下げられている。

「喧嘩をおさめたのはあなたがた三人ですね？」

「あ、はい」

「用があります。一緒に来ていただけますか？」

「……………はい」

逆らう気に三人ともなれず少女の後を追いかけた。

三人は少し古びた感のある会館に連れていかれ小隊について説明を受けていた。

「私はニーナ・アントーク。第十七小隊の隊長を務めている」

その一室に入るなり先程カリアンの元を訪れていた金髪の少女に三人は出迎えられていた。

状況がよくわからないレイフォン達を尻目にニーナは小隊の説明をしていた。

それを聞くともなく、聞く。



「ぎゃはは！ はひいひい……ああ、腹が痛い。ニーナ、おまえが悪い。もって回った言い方なんかするから、その新入生にとぼけられるような隙を作っちゃうんだ」

「ぐっ」

シャーニッドに言われてニーナは歯を噛み締めた。

「よっ、と」

シャーニッドが勢いをつけて起き上がる。軽薄そうな眦のたれた目が、レイフォン達を見下ろした。

「俺の名前はシャーニッド・エリプトン。四年だ。ここでは狙撃手を担当している」

「はあ、どうも」

いいつつレイフォンは後ろを見たが二人は口をだすつもりはないようだ。

「で、我らが体調殿に代わって、単刀直入に言わせてもらうとだな、レイフォン・アルセイフ、カズマ・ミヤモト、クラリーベル・ロンスマイア、おまえさん達をスカウトするために呼んだわけ」

「はっ？」

「おおっと、とぼけるのはなしだ。入学式の前の喧嘩での立ち回りはここにいる全員が見てるんだ。新入生だから実力が足りないなん

て言い分は通用しない。おまえさんの実力はもう証明されてるんだ。で、会長の推薦もあつて俺達は小隊にスカウトするに十分な実力を有していると評価した」

そこまで言つてシャーニッドはニーナを見た。

「聞いた通りだ。私は貴様達を第十七小隊員に任命する。拒否は許されん。さて、貴様は会長からかなりの実力者と聞いたが残りの二人もそうか？」

「ええ、まあ」

「はい」

「ちよつと二人共！いいの？」

さつきから全く話さず、あっさり小隊入りを決めた二人にレイフォンが問い掛けた。

「別にレイフォンが入るならどこでもいいぜ」

「私もそうです」

余りにあっさりと返す二人にレイフォンは返す言葉がなかった。

「話しは終わったか？では、今から貴様が我が隊においてどのポジションが相応しいか、試験を行う」

言つと、ニーナは剣帯に吊していた二つの棒を抜き放った。両手に構え、右手に掴んだ棒をレイフォンに突き付ける。

「さあ、好きな武器を取れ！」

そう言っつてレイフオンを急かしてくる。

「仕方ない、レイフオン本気でやれよ！まずは錆落とした」

カズマがそう言っつとレイフオンは嫌そうながらもっつなづいた。

レイフオンは剣をとると適当に構えた。

「いつでもどうぞー！」

体を温めることなくそんな事を言われたニーナは、最初何か言おうとしたがレイフオンの顔を見ると黙っつて襲い掛かっつた。

しかし……

「なっ！」

次の瞬間には床に叩きつけられていた。

やられた本人は信じられないらしく呆然としていたが我にかえるともう一本仕掛けてきた。

しかし結果は同じで、またニーナは床に叩きつけられた。

ニーナは信じられないように首を振りシャーニッドも驚いていた。

「まさか会長の言っつ通りとは……」

「ーナは眩くとレイフォン達に向かってこう言った。

「野戦グラウンドに行くぞ、そこで実力をもう一回見せてもらう」

## 入隊試験（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

### 三人のバトルロワイヤル（前書き）

バトルまでたどり着きました。

### 三人のバトルロワイヤル

ニーナの言葉を受けてレイフォン達は野戦グラウンドに来ていた。

そこには……

「やあ、待っていたよ」

カリアンがいた。

「どうして会長がこちらに？」

「武芸長がつるさいのですねヴァンゼ、君もこれでいいかな？」

ニーナが尋ねると会長は後ろにいる男を示しながら返事をした。

「ああ、これでいい……が、こいつらは本当に強いのか？」

「あら、試してみます？」

ヴァンゼがそう言うと真っ先にクラリーベルが反応した。

「ふん、いいだろう、だがいちいち一人づつ 相手をするのも面倒だ、三人まとめて模擬戦をするか」

ヴァンゼがそんな提案をした。

「それでいいか？」

「はい」

「ええ」

「構いません」

三人は承諾の返事をした

「よし、じゃあ、そちらの先輩意外は下がって下さい」

「なに？」

審判をするつもりだったニーナは下がれと言われて不審に思ったが  
カリアンに言われ渋々離れていった。

「ルールは勝ち残りのバトルロワイヤル、負けを認めさせたら勝ち  
だ」

それでいいな？とヴァンゼが 確認する。

「構いません」

カズマの返事が最後となった。

「よし、それでは試合開始！」

カリアンの声が響く。

「ふっ！」

次の瞬間、レイフォンとカズマの姿が消えた。

内力系活剷の変化 千里

内力系活剷の変化 水鏡渡り

互いに超スピードで移動した結果、  
武者であるニーナ達にも二人は見えなくなった。

一方、クラリーベルはウァンゼに真っ正直から突っ込んでいった、  
ウァンゼがそれを向かえつつ、が、しかし、そのクラリーベルは幻  
で本物は後ろにいた。

首に刃を突き付けられ降参するウァンゼ。

クラリーベルが使った技は 化鍊剷が変化 虚影

自分の幻をつくり相手を騙す。彼女オリジナルの技である。

あっさりと武芸科長のウァンゼを倒したクラリーベルに驚くニーナ  
達。

一方レイフォンとカズマの戦いは一進一退だった

「ハアアッ！」

外力系衝剷が変化 斬雨

カズマが放った衝剄は一度上に打ち上がると無数の斬撃となって降ってきた。

「甘いよカズマ！」

外力系衝剄の変化 円轢

レイフォンを中心に衝剄が吹き荒れ、斬撃を吹き飛ばす。

しかしカズマは次の動作に入っていた。

大和流抜刀術、瞬斬

しかしレイフォンもすかさず体を捻って斬撃を繰り出す。

サイハーデン刀争術、焰斬り。

互いの斬撃がぶつかり合う、

焰返し。

レイフォンが返す刀で上段からの斬りを放つ。

しかしカズマはそれに対応する。

活剄衝剄混合変化 三月閃

一の太刀で焰返しを防ぎ、二の太刀で刀を弾き、三の太刀でレイフォンに剣を突き付けた。

ルッケンス、他流派を混ぜた技をカズマが使ったことにレイフォンが驚き隙を見せたことで勝負は決した。

結成！第十七小隊（前書き）

どうぞー！

## 結成！第十七小隊

カズマとレイフォンの戦いは、カズマの勝利となった。これにはカリアンも驚いたようだ。

「レイフォン、お前ホントになまってるな」

「う……いや、一年してないだけだよ」

「その一年がでかいんだよ、まあ、錬金鋼と場所の問題もあるけどな」

「どづいつことだい？」

武芸のことはよく解らないカリアンが尋ねた。

「レイフォンは頸の量が半端じゃないんですよ、多分陛下を除けば天剣一でした。だからこいつの頸を普通のダイトじゃ受けられないんです。だから頸の量を抑えるしかないし全力をだしたら辺りが壊れてしまうから実力を十分に発揮できないんです」

その言葉にニーナ達は驚いていた。

ただの学生がそこまでの頸量を持っているとは信じられなかったからだ

「さてと、次はクララ、やるか？」

「ええ、是非」

「よっしゃ、じゃあレイフォン相手しろ」

「ええ！？僕なの？」

「当たり前だろ、お前には早く錆を落として貰わないとな」

「う……分かったよ……」

「よし、なら始め！」

「ちょっと、いきなり！？」

慌ててダイトを構えるレイフォンを尻目にカズマはニーナと話し始めた。

「それで俺らは合格ですか？」

「は？ああ、いや勿論合格だが……いいのか？」

「何がですか？」

「いや、実力は君達の方が私より遥かに上だ、そんな私に指揮されるのは不満じゃないのか？」

「いえ、特には」

「本当にか？」

「ええ、それに俺達に指揮をしろと言われてもできませんし、上手

「くできる人に従うのは当然でしょう？」

「む、正論だが……しかし」

「ええい、それなら条件を出します、それならいいですか？」

「ああ、出来ればそうしてくれるとありがたい」

「仲間を俺達を信じてください」

「……はっ？」

「いや、ですから今のが条件です、信頼、これが一番大事だと思うんで……」

「……分かった、それでいいならそうしよう」

「二ーナが承諾の返事をしたところでレイフォンとクラリーベルの勝負がついたようだ。」

「おう、レイフォンどちらが勝ったんだ？」

「一応僕だけど……」

「流石にそこまでなまってなかったか」

「そうですね、やっぱり貴方は最高です」

「ははっ、おっとそうだ入隊が決まったぞ、明日から練武館に来い」  
「や」

「分かった、よろしく願いします隊長」

「うん、こちらこそよろしく頼む」

こうして、新生第十七小隊が結成された。

「さて、上手くいけば最強の部隊になるだろうが……どうなるかな  
」？」

「知らん、があのは本物だぞ」

「そうか……ウァンゼ君もつかつかしてられないようだね」

「ふんっ、余計なお世話だ」

小隊対抗戦開始！（前書き）

バトルシーン、下手ですがどうぞ

## 小隊対抗戦開始！

あの後十七小隊に入ったカズマやレイフォン、それにクラリーベルだが連携の訓練に意外とてこずっていた。三人共単独で戦える強さがあるため集団戦の練習は余りしてこなかったからだ。

それでも何とかレイフォンとニーナ、カズマの連携がましになった頃、(クラリーベルは対戦するほうに熱心だった)小隊対抗戦が始まった。

「いいか、私達の相手は第三小隊だ」

放課後、練武館で訓練を終えた後のミーティングでニーナが皆に告げた。

珍しいことにフェリを含めて全員が最近訓練に取り組むようになったので(フェリについては別の話して)ニーナもかなり機嫌はよく切羽詰まっていなかった。

「私達は攻撃側だ。基本はシャーニッドにフラッグを撃ってもらう、クラリーベルは遊撃、私とカズマとレイフォンで相手を陣地から引きずりだす。それでも残っている場合はクララ、お前が倒せ、その際にシャーニッドが狙撃する、以上だ、何か質問は？」

三人が手を挙げた。

しかし、どうやら質問は同じようなのでカズマが代表して尋ねた。

「どのくらいでやればいいんだ？」

それは規格外の力を持つ者のみができる質問だった。

「ああ、それに関しては会長が、本気でやられて周りに自信を失われても困るから周りが奮起する程度で頼むそうだ」

「……難しいですよ」

レイフォンが思わずといった感じで呟いた。

「だな」

「まあ、怪我をさせなければよいのでしょ？」

「そうだな、とりあえず一人で最低二人倒せば勝ちだからな」

「そうだね、まあとりあえず気楽に行こうぜ、負けたらいけないのは武芸大会なんだから」

「カズマの言う通りだ、しかし明日は勝ちにいくぞ！」

「了解!!」「」

こうして、僕らは小隊対抗戦を迎えた。

「さあ、遂に新生第十七小隊の登場です。隊員の半分を一年が占める、真正正銘のルーキーです！さあ、安定した強さに定番のある第三小隊にどう対抗するのか！？注目です！！」

「なんか、完全に格下扱いだな」

「仕方ないよ、僕らが一年なのは事実なんだから」

「まあ、それなら実力を見せてあげましょう」

「よし！いくぞ皆！」

「了解！！」

「試合開始いいい！」

アナウンサーの絶叫と共に試合が開始された。

しかし、それは大方の予想を裏切る結果となった

まず、始めの変化はレイフォンが起こした。

「先輩、敵が二人向かってきます」

「むっ、予定外だな……三人で迎撃するか」

「いえ、僕が止めるのでカズマとフラッグに向かってください」

「しかし……」

「分かった、先輩行きましょう」

「くっ、分かった無理するなよ」

そう言い残すとニーナはカズマの後を追った。

「さてと、やるか……」

第三小隊の隊員二人が迫っていた。それに向かってレイフォンは衝  
頸を放つ

外力系衝頸が変化 針頸

刀身から放たれた頸は針のように凝縮して飛び二人のうち一人を吹  
き飛ばす。それにもう一人が呆然としてる間にレイフォンは距離を  
つめる。

旋頸を超える超移動を行い相手の背後に回ったレイフォンは峰で相手の首筋を殴り気絶させる。

これで相手二人は戦闘不能になった。

「おおつと！？十七小隊のルーキー、レイフォン・アルセイフ、何と第三小隊の二人を撃破、これで人数差は逆転したぞ！」

司会者の興奮した声が聞こえる。どうやらレイフォンは役目を果たしたようだ。

「おお、隊長、向こうから三人来ます、これでフラッグに残ってるのは一人ですね」

「よし！クララ、聞こえるか？フラッグに向かってくれ、シャーニツド！隙が出来たら狙撃を頼む！」

「わかりました」

「了解！」

「よし、ではカズマいくぞ！あの三人を足止めすれば私達の勝ちだ！」

「わかりました、ですがこちらも隊長が倒れたら負けです、俺が二人相手をするんで隊長はもう一人をお願いします」

「……分かった、頼むぞカズマ」

「了解！」

返事をするはず、カズマは迫る敵を二つに別ける為に衝頸を放つ、衝頸で軽く威嚇すると二人がこちらに向かってきた。まずこちらを潰した後、三人でニーナを倒す気のようにだ

「しかし甘い！」

それはカズマが二人でどうにかなる場合だけだ

「喰らえ！」

相手二人が衝頸を使い攻撃を仕掛けてくる、

しかしそれをカズマは正面から受けてたつた。

ヤマト流抜刀術      光閃

文字通りタイトの復元する光を放ちながら攻撃し、カウンターで一人を静める。

もう一人はカズマの脇を抜けていった。

衝頸による攻撃は直線にしか動けないためだ。

相手が体制を立て直す前に攻撃を加えるカズマ

## 活頸衝頸混合変化 浸音

相手の内部に音を伝播させ聴力だけでなく体のバランスを奪う技だ。簡単に説明すれば相手の体の自由を奪う技である

そこに容赦なく一撃を加えるカズマ、

これでさっきレイフォンが倒した二人と合わせて四人が倒れたことになる

ニーナを見れば相手の攻撃を二つの鉄鞭を使って防いでいた。

「さて、あとはクララが上手くやるだけか……」

ニーナのほうももうすぐ終わりそうだ。

その頃ニーナから指示を受けたクラリーベルはフラッグに向かっていた。

途中でいくつか畏があつたが余裕で回避していく

林を抜けると念威操者と第三小隊の隊長がいた。

「では……やりますか」

既に向こうもこちらに気付き迎撃する構えをみせている。

## 化練頸が変化 屋気楼

クラリーベルは自らの幻を大量に生み出し気配をごまかす。

相手が大量の幻影に戸惑っている間に念威操者に接近する。

ドゴンッ！

耳元で大きな音がする

念威爆雷のようだ。

しかし加速したクラリーベルの速さに追い付けず念威操者はクラリーベルの一撃を受けて沈んだ。

それを残る相手が認識した瞬間、射撃音と共にフラッグが破壊された。

「おおっと！？フラッグ破壊！勝者はなんと！ルーキーの第十七小隊です！！最後はシャーニッドが決めたー！！」

第十七小隊が初勝利をあげた瞬間だった。

小隊対抗戦開始！（後書き）

ご意見感想お待ちしております

## 平和な一時（前書き）

嵐の前の静けさですね、下手くそですがどうぞ！

## 平和な一時

第三小隊との試合を終えた後、寮に帰ろうとしたレイフォンとカズマ、そしてクラリーベルは三人の女の子に捕まっていた。

「ヤッホー、その十七小隊のエース君」

「えっ？僕？」

「いや、お前以外に誰がいるか」

すかさずツツコンだカズマだが相手の女の子はそんなレイフォンを無視して話しを続けた。

「ちょっと、いい？」

「いいけど……何？」

「あ、うん、えーと、ほらメイシェン」

そう言つて栗色の髪を二つにくくつた少女は、横に避けてもう一人の女子生徒に道を開けた。

もう一人の赤毛の少女がその子の背を押して、レイフォンの前に移動させた。

肩を越えた長い髪の毛の、おとなしげな少女だった。俯き加減で、おどおどしている。今にも泣きだしそうな眉、上目づかいにこちらを見る大きな瞳の下、頬の辺りがかすかに赤らんでいた。

「あの、ありがとうございます……」

それだけを言うのが精一杯という様子で、黒髪の少女は顔を真っ赤にして赤毛の少女の背中に隠れてしまった。

「悪いね、こいつは昔から人見知りか激しいんだ」

「それでも、入学式前の乱闘騒ぎで助けてくれたからお礼をしたいつて。ねえ？」

ツインテールの子に言われて、黒髪の少女はさらに赤毛の少女の背中に顔を押し付けてしまった。

「ああ、あの時の子が」

「ああ、確かに居ましたね」

カズマとクラリーベルはそれで思い出したようだがレイフォンはまだ思い出せなかったが

「ほら、あの時助けるように言った子だよ」

「ああ、」

カズマに言われて思い出した。

「お礼なんていいのに……」

「まあ、いいじゃないか、おっと自己紹介がまだだったな、俺は力

ズマ・ミヤモト、海山都市ヤマト出身だ」

「へー、あの珍しい文化で有名な……確か温泉っていうのがあるんだよね？」

「ああ、よく知ってるな」

「まあね、で？メイシエンを助けてくれた王子様は？」

「僕はレイフォン・アルセイフ。槍殻都市グレンダン出身だ」

「わお、武芸の本場ね。だからあんなに強いんだ」

「いや、そうでもないよ」

「じゃあ次はこっちね、私はミイフィ・ロツテン。で、こっちのかくれんぼしてるのがメイシエン・トリンデン。二人とも一般教養科ね。で、あなたのクラスメート、そっちの気の強そうなのがナルキ・ゲルニ、武芸科よ」

「これはどうも、最後になりましたが私の名前はクラリーベル・ロンスマイアです。どうぞよろしく」

クラリーベルが挨拶をしたところでミイフィが提案した。

「ねえ、こんなところで立ち話もなんじゃない？お腹空いたし。どっか美味しいもの食べに行こう」

「いいね、腹減ってるしちょうどいいよ」

そんなカズマの賛成の声もあってそういうことになった。

場所は変わって近くの喫茶店

「でもさー、三人とも一年で小隊員なんて凄いやね、やっぱりグレンダンは武芸の本場なんだね」

「ああ、なんせ三日に一回くらいの割合で戦うからな」

「「「嘘っ!!」「」「」

カズマの発言にミィファイ達が驚いていた。

「ああ、やっぱり他の都市はそんなに戦ったりしないの？」

レイフォンが尋ねると

「当たり前でしょ!というか今まで戦ったことすらないよ、グレンダンは汚染獣を避けないの?」

「うーん、むしろ追いかけてるような……」

「そうですね、逃げたりはしないです」

そんなレイフォンとクラリーベルの発言に三人は声も出ないらしい

「まあ、そんな話しは置いといて、別の話しをしようぜ!」

カズマが話題を変えようとしたその時！

グラグラッ

「っ！これは！」

大きな揺れがツエルニを襲った。

「都震？」

「始めに縦に揺れたけど……」

「つつ！レイフォン！クララ！」

「うん！」

「分かってます」

「よし！二人はシエルターに急いで！」

「え……一体なんなの？」

これで伝わらないなんて！？

レイフォンやクラリーベル達は苛立ったが簡潔に事実を話した。

「汚染獣が来たんだよ」

次の瞬間、けたたましいサイレンの音が響き渡った。

平和な一時（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

## 汚染獣襲来！？（前書き）

さて、とりあえずあと老生体とのバトルを書いたら学園生活を中心に行きます。そして武芸大会といきたいと思います。

汚染獣襲来!?

あの後、ミイファイ達をナルキに任せて、カズマ達は生徒会塔に来ていた。

「状況は？」

「ツエルニは現在

陥没した地面に足の三割を取られて動けない状態です」

「脱出は？」

「ええ……通常時ならば独力での脱出は可能ですが、現在は……その、取り付かれていますので」

目の前でカリアンが状況を確認していく

「フェリ、敵は？」

「話しに聞いた通りなら幼生体が千体程ですね」

「何だ、たいした敵じゃないな……」

「そうだね」

「つまらないですね」

カズマ達がそれぞれ感想を漏らす。

それを聞いて、生徒会のメンバーが驚いていた。

「では、やれるのかい？」

カリアンが確認するように尋ねる。

「ええ、余裕ですね、レイフォン、幼生体の始末を頼む、俺が母体を始末するから、フェリ先輩、お願いしていいですか？」

「わかりました」

「待ってください、カズマ、母体の始末は私にやらせてください」とクラリーベルが異論を唱える。

「分かった、じゃあ母体の始末はクララに任せる俺は後詰めに控えとく」

するとカズマはあっさりと承諾した。

「では、今すぐいけるかい？」

「待ってくれ、今ハーレイ先輩にタイトの安全装置を外して設定して貰ってる5分待ってくれ」

「分かった、ではこのように決まった、防衛戦の生徒に指示を」

この後、軽く異論が出たがカリアンが黙殺した。

「カズマ、クラリーベル様、じゃなくてクララ、に母体を任せちゃっていいの？」

カリアンの指示がとび、ダイトの準備が出来るのを待っているとイフォンが尋ねてきた。

「ああ、実力的には問題ない、それに……嫌な予感がするからな、俺は自由に動けたほうがいい」

カズマの言葉を聞いて、レイフォンが顔をしかめる。

「カズマの予感は昔からよく当たるからね……」

十になり海山都市ヤマトに連れて行かれるまでカズマと過ごしたレイフォンだが、カズマの予感によく当たり、レイフォンが都市を追放されることまで出ていく時に感じていたくらいだ。

「そういうわけだ、レイフォン、幼生体の始末が終わったら周りを警戒してくれ」

「分かった、無駄とは思っけど一応、何も無いことを祈るよ」

幼生体とはいえ、汚染獣に襲われている中のこの会話、まさに彼らの実力を如実に示していた。

と、ハーレイがダイトを持ってくる。

「よし！じゃあ、行くか！」

こうして、長い戦いが始まった。

「これより、汚染獣駆逐の最終作戦に入ります。全武芸科の生徒諸

君。私の合図とともに防衛柵の後方に退避」

カリアンの声が響く。

戦っていたニーナはすぐにそれがレイフォン達によるものと分かった。

「レイフォン達だなこれは……」

「おいおいニーナ、なんで分かるんだ？」

シャーニッドが尋ねる。

「信頼、それがあいつらとの約束だ。召集場所にきてない時点で何かするつもりだと信じていた、それだけだ」

「かーっ！言うねえニーナ」

「とにかく下がるぞ」

話しを切り上げたニーナは生徒会長のカウントを聞きながら、防衛柵の後ろに下がった。

一方、こちらは校舎の屋上にいるフェリ、

念威を使い、空に放った探索子から情報を元に空の光景を浮かべる。ツエルニの踏む赤く汚れた大地には無数の幼生がいて、ツエルニに群がっている。

その数は982。

「少ない方だよ。グレンダンにいた時には万を数える幼生に囲まれたことがある」

こともなげに言い切ったレイフォンにフェリは驚く、いくら実力があるうとそれを扱う胆力がなければ意味がないが、このときのレイフォンはいつもと違い、外縁部の向こう、汚染された大地を見ていた。

まるで何かの確信があるかのようにまっすぐな視線を向けるレイフォンがフェリは少しうらやましくなった。

二、一、零。

カリアンのカウントが零を刻んだ時、フェリに探査子が信じられない情報を届けてきた。

9 8 2。 9 6 5    9 0 3    8 7 7    8 3 3    7 7 8    6 9 1  
.....

幼生の生体反応として使用していた赤い光点が次々と驚異的なスピードで消失していく。

レイフォンに目を向けると柄だけ復元された武器をレイフォンは握っていた。

レイフォンが使用しているのは鋼糸と呼ばれる武器だ。

いくつも分身した剣身に頸を走らせ、己が肉体のように操っているのだ。

あっという間に幼生体は始末された。

その間にフェリは地下の熱源反応に都市外装備を着たクラリーベルを誘導していた。

クラリーベルが母体を始末すると同時にレイフォンが幼生体を始末し終えた。

防衛戦にいた武芸者が歓声を上げる、がしかしカズマとレイフォンは厳しい顔をしていた。

「カズマ……あれ……」

「ああ、そうだな……」

「二人共、どうしました？」

フェリが尋ねる。

「フェリ先輩、会長を呼んで下さい。大至急」

カズマがフェリにお願いする

「カズマ、レイフォン、何があったのですか？」

まだ地下にいるクラリーベルが探查子を通して尋ねる。

それにカズマが答えた。

「汚染獣だよ……しかも老生体だよ」

ツェルニを襲った災難はまだまだ続きそうだった

## 汚染獣襲来！？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。評価などを入れてくれると嬉しいです。

老生六期 へびモーター!? (前書き)

バトル半端ですね……

老生六期 ヘビモト!?

「そんな……」

あの後、カリアンに頼んで、探査機を飛ばして貰い、確認した瞬間  
レイフォンが呟いた。

「レイフォン？知ってるのか？」

「うん……名付きだよ、名前はヘビモト、老生六期 五年前に戦っ  
て倒した筈なのに……」

「名付きだと？」

カズマが驚いて尋ねる。

するとレイフォンが答える前にクラリーベルが答えた。

「ヘビモト……確か五年前の夏にレイフォンが戦った名付きです、  
その時は天剣一のリントンス様とサウアリス様、そして貴方の三人  
がかりで三日かけて倒したと聞きましたが……」

「本当かレイフォン？」

「うん、確かに倒した筈なんだけど……」

レイフォンはヘビモトが現れたのが信じられないようだ。

「だそうだ、カリアン！とりあえず武芸者はどうしてるっ？」

「幼生体の死骸を片付けて貰っているよ」

「フェリ先輩、ヘビモトの位置は？」

「北に五十キロメートルですね」

「離れていつてる？」

「カズマ、多分ヘビモトが気付いたらこっちに向かってくるけど、今回は外縁部で迎えうつたほうがいいよ」

「何故だ？」

「理由は後で説明する」

「分かった、では外縁部で迎えうつ、カリアン、武芸科の生徒は作業が終わったら下げたおいてくれ」

カズマが言うと

「待て、一年だけに戦わせろというのか、俺達も戦うに決まってるだろうが」

ウアンゼが異義を唱えたしかし

「足手まといです」

レイフォンが一蹴した。

「何！？足手まといだと？」

「ええ、老生体は強力です、グレンダンでも戦えるのは天剣のみ、それを幼生体に苦戦していた貴方達が戦おうというのは蛮勇に過ぎません。それに邪魔です。おそらく全滅します、ならば他の汚染獣を警戒して貰うほうがましですからね」

レイフォンはぱっさりと切り捨てたが最後にフォローもいれたことでウアンゼは納得したようだ。

「グレンダンの時と同じならおそらく明日襲ってくる筈です。それまでに動けるようにしてください」

「分かった、では解散！各人自分の持ち場で全力を尽くしてください  
い」

カリアンの言葉でこの場解散となった。

「前に倒した時より一回り小さいね」

「そうか？なら楽なんだが……」

「どの道老生体です、覚悟したほうがいいですよ」

「多分、天剣がないぶん一週間は見たほうがいいのかも」

「分かった、じゃあ行くか！」

「うん」

「ええ」

翌日、三人は外縁部でヘビモトを迎え撃っていた。

人型をとったヘビモトはその巨大な両手を外縁部に向けた。

「まずは……」

「その汚い手を離してもらっせ」

レイフォンとカズマが二手に別れて両手を切りにかかる。

外力系衝頸が変化 閃断

外力系衝頸が変化 果断

二人の剣があっさりへビモトの手を切断する。

「おや……やっぱり前情報通り（と同じ）だな」

そこまで考えたところで二人は退避した。

次の瞬間、切った筈のへビモトの腕が爆発、拡散してさっきまで二人がいた位置を襲った。

「聞いてた通り厳しいな……レイフォン、鋼糸で都市部に侵入しないようにしてくれ、俺とクララでしばらく奴の体を削る、5時間後に交代だ！」

「分かった！一応言っとくけど切ってもあまり効果はないからね！」

「了解！クララ、なるべく細胞を壊す技で頼むぞ！」

「わかりました、先生程にはいきませんがやりますよ」

「頼むぜ、よし、行くぞ！」

レイフォンが鋼糸でへビモトの侵入を防ぎ始めたのを確認すると、カズマはへビモトに向かって跳んだ、空中でへビモトの腕を避けるとへビモトの肩に切りかかる。

ヤマト流抜刀術 鱗撫

限界まで圧縮され、見えない斬撃となった衝頸がヘビモトの体を細胞レベルから壊していく、

カズマが退いたところに熱線が襲いかかりヘビモトの体を焼く、

化練頸が変化 炎散

見れば上空に頸の塊が浮いており、周りを太陽のように照らしていた。その光を化練頸でレンズをつくり一点に収束させヘビモトの体を焼いたのだ

「へー、やるじゃないかクララ」

「いえ、あの頸の塊はレイフォンが作ったものです。私にあそこまでの頸量はありませんよ」

「さすがレイフォン、頸の量だけは化け物クラスだな……」

カズマが呆れたような声を漏らす。

「しかし……あまり効いてないな……」

「しかし、わずかですが小さくなっています、やはり前情報があるのとないのとは違いますよ」

「まあそうなんだがな……次は頭をいってみるか」

外力系衝頸が変化 虎牙

カズマの技はヘビモトの肉をえぐり取る。

そこにクラリーベルの炎散が襲いかかり焼きつくそうとする……が、

「やはり爆散されると的が絞れないな……」

「地道にいきましょう」

「さて、後もうひとつ技があった」

カズマは下がると大量の衝頸を全身から放った。

放つと同時に変化させる

八草流忍術化練頸が変化 死炎槍

あつというまに槍の形を作った炎はへびモトの上半身を焼き尽くした。

しかし表明が焼けただけのようで中は無事だった

「仕方ないとかく壊していくしかないな」

カズマは長期戦を決めた

五日五晩へビモトとの戦いが続いた。

技に技を積み上げ、破壊に破壊を重ね、力に力を注ぎ、意思に意思で化粧し、頸に頸を編み上げ、絶技と妙技を衝突させ続けた五日間だった。

「いい加減、しつこいですね」

クラリーベルの声には苛立ちがあった。

体力の衰えはない。流石次期天劍候補、生ぬるい活頸ではないようだ。

しかし精神的な疲労という面ではクラリーベルは深刻な領域にさしかかっていたのかもしれない

「さて……どうするか」

老生六期 へびモト!?! (後書き)

ご意見ご感想お待ちしております

へヒモト戦後半（前書き）

つ、次でなんとか終わらせませす

## ベヒモト戦後半

「クララの奴、そろそろ限界かな……」

そんな様子のクラリーベルを見て、カズマはそんなことを考えていた。

まあ、天剣授受者でもないのによくもったほうだと思っ。

「ミスが出始めているな……」

動く位置にミスが生じている。

レイフォンがサポートしているがそろそろ致命的なミスを侵しかねない。

「よし、退かせよう」

そうカズマが決心したところ

「どうした？もう限界ですか？」

「まさか」

レイフォンがクラリーベルに話しかけていた。

「そうでしょう、グレンダンに帰って天剣を取ればこんなの当たり前、そうなればこれからこのような戦いの中に居続けなければならぬ。甘えなど、生まれた瞬間にあなたの死に繋がり、焦りはその

きっかけを生む。あなたはそれをもう経験したはずだ」

カズマは知らないがクラリーベルは汚染獣との初陣で焦り、スタミナの配分を間違え、倒れたことがある。

「……はい」

「なら、あなたに今必要なものがなにか、わかりますね？」

「根気強く、戦い続ける」

「わかっているならそれをやってください。」

「はい」

クラリーベルの瞳から焦りの色が消え、再び深い沈黙を宿した。

(へえ)

その光景をカズマは意外な気分で見守っていた。レイフォンが他人を指導するなどもはや珍事だ。

「しかし、いい加減に終わらせたいのは僕も同じです。こいつとやるのは二回目ですからね」

「でも、どうやって？」

クラリーベルが再び尋ねる。それは確かにカズマも聞きたかった。

ベヒモトの姿は出現した時から変わらず外縁部の側にとどめている

が、外縁部そのものは元を含め天剣クラスの武芸者による衝頸と高速移動による衝撃波、そしてベヒモトの自爆による被害で舗装は剥げ、無残な爆発痕が重なり合うという様相を呈している。

三人が五日五晩かけて戦い続け、老生体の侵攻をとどめ、僅かに体を削っていることしかできていない。

クラリーベルはおらかカズマさえそう思っていたのだが……

「二人ともよく見て」

レイフォンの目がベヒモトを見るよう促した。

外縁部から上半身をのぞかせる歪な巨人は、いまなお都市の上に這い上がるうとしつつ、その一方で全身から触手を飛ばしてカズマたちに攻撃を仕掛けてきている。

その圧倒的な巨大さに、変化が起きているようには思えない。

「あまりの大きさ感覚をやられた？ 僅かだけど縮んでる。それに体中傷だらけでしょう？」

「え？」

驚きの声をあげたのはクラリーベルだがカズマもその言葉を信じられなかった。

「かなり細胞が傷ついてきてるってことだよ。始めから細胞を破壊する技を使ってきたからね、かなり体を破壊するのに成功してるみ

「ただよ」

「もしそうでも、やはり気の長い話しなると思うが？」

「倒し方は分かってる、線ではなく面で、一部ではなく全体に攻撃を与える。短時間の超重圧攻撃でベヒモト全体を圧死させる」

レイフォンの宣言は二人を啞然とさせるのに十分だった。

「それぞれ最大量の頸をもって技を撃つて。初撃を僕が、その後二人同時でお願い。……まさか準備に十秒以上かかるとは言わないよね？」

それは、あからさまな挑発だった。

そしてそれはやる気を掻き立てる挑発だった。

「わかりました。やりましょう」

「おもしれえ、レイフォン、付き合っぜ」

二人してうなづく。

「俺は十秒もいらないけど、クララは？」

「お好きに、タイミングは合わせます」

クラリーベルの平然とした言葉、そんな態度にカズマは心が踊った。

自らの限界の試し合い。

誰がより強力な頸を放つか、誰がより強力な技を放つか。天剣クラスの三人による競争だ。

「二人ともいくよ」

レイフォンの宣言とともに逆襲が始まった。外縁部に侵入していた触手たちを高速で破壊していく。自爆の大連鎖が一瞬、外縁部を砕くのではないかと思うほどに広がり、クラリーベルとカズマの姿を呑みこむ。

だが、二人とも爆発の中心にはすでにいなかった。その姿は外縁部と都市の境界線。レイフォンが守護していた最終防衛ラインにあった。

ここから先には細胞の一欠けらとて通しはしない。

今までその役はレイフォンが行っていた。だがレイフォンは今、技のために頸を練り上げている。

余計な手間をかけさせるわけにはいかない。

「さっさと……」

「戻るなさい！」

二人が同時に叫び技を放つ。

外力系衝頸の変化、  
炎風頸。

外力系衝頸の変化、海渦頸。

クラリーベルの故蝶炎し 剣から、カズマの刀から、同時に剛風が吹き荒れる。爆発によって四散したベヒモトの細胞がそれによって外に吹き飛ばされ、一瞬にして外縁部の空気を清浄化させた。

その間に、レイフォンは準備を終えていた。

膨大な頸がレイフォンの体を、鋼糸を覆っていた。その鋼糸はレイフォンの遙か頭上にあり、空を隠すほどに輝いている。

砕けた触手を再結集させようとしていたベヒモトは、その粉塵となった細胞ともども瞬時にして鋼糸によって編まれた網の中に閉じ込められることとなった。

「リテンション程上手くやれるかわからないけど」

操弦曲・崩落。

瞬間、真白き光が周囲の全てをかき消した。鋼糸に充填されていた頸が衝頸へと変化し、内向きに大規模な衝撃波を解き放ったのだ。鋼糸の網は衝撃波の反作用を外に漏らすことなく、ただ光のみが脱出に成功していた。衝頸を放ちながら、同時作業で同質同量の頸を流し込み鋼糸の網による結界を完璧なものとすることによって、衝撃波によって発生する圧力は全て内部に収束し、ベヒモトを潰しにかかる。

汚染獣の悲鳴すらもレイフォンの編み上げた結界の外に漏れることを許さなかった。

その巨大な光の塊は、都市の反対からでも確認できるだろう。

だが、その膨大な威力の技ゆえに、そして通常のダイトゆえに、継続時間としてはそれほどのものではない。

十秒。レイフォンが挑発として使った言葉だが、まさにその十秒がこの技の限界時間だった。

光が弾け、その光の中に浮かぶ線が爆発した。注ぎこまれた頸の量にダイトが堪えられなかったのだ。

爆圧から開放されたベヒモトが声にならない咆哮を上げた。その周囲に光を弾く粒子の存在がある復元することができず死滅したベヒモトの残骸か。

カズマの目にもはつきりとベヒモトの体積が減少しているのが目にとれた

「負けてられないな……」

カズマはそう呟くと刀を振るった。

すると刀から億を数えようかというほどの斬撃が放たれ、ベヒモトの三分の二を覆った。

そしてそれらが一齐にベヒモトに襲い掛かり突き刺った瞬間、衝頸を放ちベヒモトの体は衝頸嵐に包まれた。

一方クラリーベルも空中にいた。二人と比べて頸量や技量で劣るクラリーベルだが無理と言う言葉は吐かない。

いままさにカズマが技を放とうとしている。このタイミングを外すわけにはいかない。

「やるまでです」

先程まで攻撃に利用していた上空にある頸の塊、それに自分の頸を加えてベヒモトにぶつける。

その頸の塊は絶大な威力をもってベヒモトに襲い掛かった。

天剣授受者デイグリスの孫であり、レイフォンと自分の頸を合わせ超絶的な衝頸を作ったクラリーベル。自らの技量と膨大な頸量をもって破壊の嵐を招いたカズマ。

並の武芸者では到達することを夢見ることさえもできない領域に突入した絶技に、板挟みにされベヒモトはなすすべもなく、身じろぎさえ許されなかった。

半身は風に吹かれた落ち葉のように崩れていき、半身は荒れ狂う獣の群れに噛み裂かれたように粉碎された。

両面からの破壊はベヒモトを完全に押し包み、押し潰すかに見えた。

しかし、

「ぐっ、」

二人はほぼ同時にダイトを捨てた。途端にダイトが爆発する。膨大な頸を必要とする技を放ち、ダイトがそれに堪えられなくなったのだ。

## へしモト戦後半（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

ペヒモト戦終了！そして決意が生まれる（前書き）

遅くなりました。次から学園生活を書きたいと思います

ベヒモト戦終了！そして決意が生まれる

「どうなった？」

カズマは技を放ち終えた反動で動けなくなり、落ちながら、ベヒモトが居た辺りを見た。

「つつ！？」

するとそこには人一人分くらいの大きさの塊がうごめいていた。

「ちっ！やはり押し切れなかったか」

とにかく逃がすわけにはいかない。

急いで内力系活頸を走らせ体を回復させる。

徐々に体が回復していくのがわかる。

「あと、少し……」

もう少しで攻撃できるところにきた。

「よしー」

衝頸を放ち、空中を移動する、ベヒモトを射程に捉えた  
衝頸が変化、熊狩  
外力系

放たれた衝頸は見事にベヒモトを捉え、その体をレイフォンの前に飛ばすことに成功した。

「よし！これで……」

「終わりだ！」

レイフォンが剣を振り下ろす衝頸を込めた斬撃は見事にベヒモトを破壊した。

「終わりか……」

こうして老生六期ベヒモトとの戦いは、幕を閉じた。

S I D E 二 ー ナ 達、

「スゲエ……」

誰かがレイフォン達が戦っている姿を見て呟いた。

「おい、ニーナ……」

シャーニッドが話しかけてくる。

「ああ……まさかここまでとは……」

皆の視線の先ではレイフォン、カズマ、クラリーベルの三人が汚染獣と戦っている。しかしそれは別次元の戦いだった。

「これは……夢か？」

またしても誰かが呟いた、しかしそれは私も同じなので何も言えない。

「腐っても天剣授受者というわけか……」

声のしたほうを見ると、第五小隊隊長のゴルネオ、ルッケンス、だった。

「天剣……」

大袈裟な名前だがうなづけるだけの実力がレイフォン達にはあった。

「これがグレンダンか……」

私は驚いていた、しかし同時にレイフォン達の凄さに嫉妬した。

と、ここでレイフォンが何やら技を繰り出した。

操弦曲、撥ね虫

莫大な光が辺りを覆い、汚染獣の体が爆発した。

「今の見たか!？」

「信じられねえ」

「努力すりゃできるのか……?」

「無理だろ」

そこかしこから声上がる、しかしそれらは始めと違い安心感に包まれていた。

「……あいつらは凄いな……」

たった三人で汚染獣と戦うレイフォン達を見ながらニーナは呟いた。

「しかし、諦めんぞ」

そしてニーナは強くなりレイフォン達の隣に立つことを誓った。

へヒモト戦終了！そして決意が生まれる（後書き）

ご意見感想お待ちしています

強さとは……………（前書き）

皆さんお久しぶりです。いろいろあつて更新が遅れました。ただ今週も遅れるかと思いますがご容赦ください。それではどうぞ

強さとは……………

カズマ、レイフォン、クラリーベル、あの三人は強い、それはわかっていた。

しかし、あそこまでとはな……………

今私の目の前ではレイフォン達に教えて貰いたいと武芸科の生徒が列をつくっていた。

他にも一般生徒の姿がある。

「週刊ルックンです」

「サインください!」

「稽古をつけてくれ」

様々な声が飛ぶ

「わ、わかったからとりあえず落ち着いてくれ、今本人達を確認をとってる」

武芸者がいる手前、列をつくってはいるがそれもいつ崩れるかわからない

「皆、とにかく5分程待ってくれ」

私はそう言って練武館に入った。

「……というわけだ、どうする？」

「そうですねえ……」

私が事情を説明するとレイフォン達は唸り声を上げた。

「何人くらいいるんですか？」

「ざっと武芸者だけでも五十人近くはいたぞ」

「多いですね……」

「残りは？」

「一般生徒だがかなりいたな、ただ取材が1番多かったな」

「じゃあ、とりあえず、武芸者には名前を書いて帰って貰いましょう」

「どうするんだ？」

「訓練場所は追って連絡すると伝えてください」

「わかった」

「一般生徒に関しては質問には文章で答えると言っておいてください」

「いいのか？」

「そうでも言わないと帰りませんよ」

「そうだな」

手慣れた様子で対処する二人を見て私は彼らがこころした事態に慣れているのに気付いた。

「まあ、グレンダンでも老生体が出た時は天剣のだけが出たとかで騒ぎますから」

「よくあることですよ」

その事を聞くと返ってきた返事がこれだった。

「さて、今日はどうする？」

「とりあえずは頸技を」

「基礎が先じゃない？」

「技を覚えたほうがテンション上がるだろ？」

「そんな理由で……」

三日後、混乱をなんとかおさめたあと三人は稽古をつけようにもどつするか話していた。

「なあ、やっぱり50人は多いと思わないか？」

三人で稽古の付け方について話しているとカズマがそう提案した。

「確かにそうだけど」

「そこでだ、入門試験を行うと思う」

「「ですか入門試験？」」

レイフォンとクラリーベルが声を揃えて尋ね返してくる。

「ああ、これなら教える人数を減らせるし、あわよくば有能な奴を小隊にスカウトできる」

「あー、確かにいいかもね」

「だろ？クララはどうなんだ？」

「私もいいと思います」

「じゃ、決まりだな」

こうしてカズマの提案により後にツエルニの乱とも呼ばれる入門試験が行われる事となった。

強さとは……………（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

## ツェルニの乱(前書き)

遅くなつてすいません、今日から更新ペース戻ります

## ツェルニの乱

カズマが提案した入門試験はカリアンの知るところとなり、大規模なものになった。

「これは？」

カズマが詰め寄るとカリアンは涼しい顔をして答えた。

「ああ、それはそのままだよ」

「それについては聞いてない、俺が聞きたいのはどうして俺達がターゲットなのかってことだ」

上級生であるカリアンに対してカズマはきつい口調で問い掛ける。

「それは簡単だ、君達の實力はこの間の戦いで認知されてしまった。それにより君達に鍛えて貰いたい者が殺到してきたそうじゃないか」

「だからこそその入門試験じゃないか」

「そうだね、しかし武芸者は闘う性を持っている者も多い、圧倒的強さを持つ君達と戦いたい者もまた、大勢いるのだよ」

「つまり、そいつらに闘う機会を与えて大人しくさせたいわけだね？」

「話しが早くて助かるね、その通りだ」

「ちつ、わかったよ、代わりにこれは貸しだぜ？」

「承知したよ、しかし君も砕ければ結構口が悪いんだね」

「そりゃ、いきなりこんなことされりゃ、敬語を使う気なんておきねえよ……」

「では、頼んだよ？」

「了解だ、会長さん」

そう言つてカズマは会長室を後にした。

「それにしても……」

カズマが去つた後、机にある書類を眺めながらカリアンが呟いた。

「武者とは本当に戦いが好きなのだねえ」

それは十七小隊を除いた、全小隊からのカズマ達と戦いたいという嘆願書だった。

「……………本番は荒れるだろうね……………」

カリアンはそう呟やくと静かにコーヒーを啜った

「と、いう訳で、開催は三日後、期間は丸二日、参加は自由、だが俺達は強制参加、以上だ、何か質問は？」

カズマはレイフォンとクラリーベルにカリアンとの話しの内容を報告していた。

「強制参加って、僕らは何をすればいいの？」

レイフォンが尋ねてくる

「なんか、プレートを奪われたら負けだそうだ」

「成る程つまり適当に相手をするようにということですね」

「話しが早くて助かるな、じゃ、ルールはこの紙にあるから当日はよろしくな」

そう言ってお開きになった。

ルール1 時間は朝8時から夕方6時まで間以外では戦闘を行ってはならない。

ルール2 プレートを奪われたら即、失格である

ルール3 参加は自由である。

ルール4 節度をもった行動を行うように

ルール5 レイフォン・アルセイフ、カズマ・ミヤモト、クラリ  
ーベル・ロンスマイア、を倒せば褒章がある。

ルール6 集団を組んでもよい

ルール7 一般生徒を巻き込まないように

生徒会長 カリアン、ロス

## バトルスタート！（前書き）

遅くなりました。テストが終われば五日に一回のペースでいけると  
思います。

それでは、どうぞー！

バトルスタート！

開始と同時にレイフォンは殺頸を使って隠れた。

「うーん、終わったら機関掃除のアルバイトもあるし、適当に隠れてようかな」

そう言ってレイフォンの姿は消えてしまった。

カズマSIDE

「あゝ怠い、なんか視線を感じるしさ……」

20人近くの武者に囲まれた状態ではやっていた。

「とりあえず、さっさと終わらせて寝るか……」

こちらにも戦う気がまるでなかった。

クラリーベルSIDE

「うーん、悪くはないのですが……」彼女は襲い掛かってきた第十六小隊を振り返り討ちにした後、何やら考えこんでいた。

「やはりこうなりますか……」

決心がついたようで顔をあげると

「やはり、レイフォンを捜しましょう」

そう言っつて彼女も消えた。

入門試験兼大会途中経過

レイフォン・アルセイフ

開始と同時に隠れ戦線離脱。

カズマ・ミヤモト

20人ほど倒したあとこちらも戦線離脱。

クラリーベル・ロンスマイア

十六小隊を倒した後、レイフォンを捜し周っており戦線離脱。

参加 180名 脱落 32名

「やはりこうなるのだね……」

フェリから報告を受け取ったカリアンは、頭を抱えていた。

「これでは不完全燃焼だね……」

戦わせてスッキリさせるつもりがこれでは逆効果だろう。

「さて、どうやって彼らを戦わせるか……」

カリアンはそう呟いて頭を抱えた。

ヴァンゼSIDE

「ええい！あの三人はまだ見つからんのか！？」

「はい、どうやら殺頸を使って隠れているようですね……」

ヴァンゼの怒りの叫びに隊員の一人が答える。

「隠れんぼじゃないんだぞ!！」

その答えを聞いたヴァンゼの怒りの叫びが辺りに響いた。

ゴルネオSIDE

「レイフォン・アルセイフは見つかったか？」

「いえ、まだです。どうやら殺頸を使って隠れているようで」

「何だ！臆病な奴だな！さっさと出て来て鬪えよ!！」

ゴルネオの肩にいたシャンテがそれを聞いて叫ぶ

「落ちつけシャンテ、それが天剣授受者というものだ、弱者には目を向けん」

「何だよそれ！ムカつくなあ、戦ってみてからそんなことしろよ!！」

「落ちつけ、……とにかく見つけなければいかな……」

S I D E ニーナ

「しかしこれは……」

周りを見て状況を把握したニーナは呆れていた。

「武芸大会の筈なんだが……」

周りを見ると皆、戦わずにカズマやクラリーベル、レイフォンを探して飛び回っている。

「まるでかくれんぼだな……」

そう言って、ニーナもレイフォン達搜索の輪に加わった。

S I D E カリアン

「やはり……こうするしかないか……フェリ！」

「何ですか？」

カリアンが呼びかけると近くの念威端子から返事があった。

「レイフォン君達の居場所は判るかい？」

「わかりますが何か？」

「ならそれを各隊の隊長に伝えてくれないかな」

「……いいですけど、約束は守って下さいね」

「わかっている善処するよ」

端子はそれを聞くと窓から出ていった。おそらく隊長達に報告に行つたのだろう。

「さて、嫌でも戦つて貰うよカズマ、レイフォン君」

そういつてカリアンは腹黒い笑みを浮かべた。

バトルスタート！（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

さて……天剣ってチートじゃね？（前書き）

遅くなりました。おそらくこれから不定期の更新になるかと思われ  
ます。駄文ですがどうぞ！

さて……天剣ってチートじゃね？

レイフォンSIDE

「うーん、まだ半日かぁ……」

「フォンフォン」

「うわっ！フェリ先輩？」

「……………」

「じゃなくてフェリ」

「皆さんが貴方のいる所に向かっています」

「なんで!?!」

「私が教えたからです、では頑張ってくださいね」

「ちょ！ちょっと!?!」

「……………」

慌てて呼びかけたが端子は返事をせずに行ってしまった。

カズマSIDE

「あーあ、怠いなあ……」

「カズマさん」

「あれ？フェリ先輩？何かご用ですか？」

「用というより連絡です。そちらに武芸者の皆さんが向かっているのを伝えようと」

「カリアンの奴ですか……」

「はい、兄です」

「わかりました、この貸しはデカイと伝えてください」

「わかりました」

クラリーベルSIDE

「クラリーベルさん」

「あら、フェリさん何か？」

「他の皆さんがそちらに向かっと思っつので警告をと思ひまして」

「ありがとうございます、ところでレイフォンは何処にいますか？」

「レイフォンならBの5にいますよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「いえ、それでは」

「ふふ、楽しくなりそうです」

こうして……それぞれの思惑は絡み合い……

『『『ハアアアアア!!』』』

「くっ、きりがないよ」

外力系衝頸が変化 円轢

『『『グワアアアア!!』』』

レイフォンを中心に衝頸が吹き荒れ、旋頸を仕掛けてきた三人を吹き飛ばす。

「これで50人くらいかな……」

あの後場所を変えて隠れたレイフォンだったが、どうやらフェリが

教えているらしく、ことごとく見つかってしまった。

「カズマはどうなったのかな……」

ひと息ついたレイフオンは都市の反対にいる友達に思いを馳せた。

カズマSIDE

「ああもう、鬱陶しいな全く」

しかし、そんなカズマのぼやきをよそに周りは次々と技を放つてくる。

しかたない……か。

外力系衝系が変化 乱嵐

カズマを中心として突如風が渦巻きはじめ、周りの武者を吹き飛ばしていく。

その隙に移動をしようとするが……

『させるか!』

「ちい!」

ガッキイイン！！

襲ってきた相手の武器を弾き返す。

「何人、いるんだよ！！」

カズマは叫ぶが、ざっと見てもまだ後60人近くいた。

「くそっ！カリ안의奴、後で覚えてろよ」

カズマがカリアンへの復讐を誓っていると

『『『行くぞ！！』』』

『『『『『『『『『』』』』』』』』

周りが一斉に襲い掛かってきた。

「あーもう、こうなったらしかたねえ……」

次の瞬間、その場所にいた武芸者は皆、目を疑うことになる、何故なら……

「これで終わってくれ」

カズマが構えた瞬間……消えたからだ……

そして、彼等はその現象を理解できずに終わった、何故なら……

「これでおしまいっ」と

次の瞬間彼等の意識は闇に落ちたからだ。

クラリーベルSIDE

「確かこの辺りにいると聞いたのですが……」

「……………」

「おかしいですねえ……………」

「……………（そろそろ）」

「レイフォン！何処ですかー？」

……………レイフォンとのかくれんぼが続いていた。

さて……天剣ってチートじゃね？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

怠い……そしてなぜかバトルは過熱する（前書き）

遅くなりました……、しかしそろそろ話を動かしたいです。というかバトルシーンの描写が……あっ、剽に関しては友達に頼んでメーリングして貰ったので剽になってます。

怠い……そしてなぜかバトルは過熱する

「鬱陶しいな……」

カズマは時折襲ってくる相手を適当にあしらいながら呟いた。本来なら自分のはんびり自室で寝ている予定だったのだ……。しかし自分は今戦っている。そのことに怒りが湧いてくる。

「つまりカリアンが全ての元凶か……」

そしてその怒りは、現在どこに行こうと襲い掛かって来る生徒達の誘導を指示したカリアンへと容易に向かい、一瞬で殺意に変化したあとに周りに対して猛烈な怒りを感じた。ただの八つ当たりなのだが、カリアンや周りへの怒りにとりつかれたカズマは冷静な判断力を失っていた。

「……面倒だが早く終わらせるにはこれしかないか……」

そしてカズマの出した結論はレイフォンとクラリーベルを除いた者全てを倒すというものだった。

「……じゃあ、やるか……」

そう呟くとカズマは人が多い場所を探しに向かった。

クラリーベルSIDE

「見つかりませんね」

クラリーベルは悩んでいた。レイフォンを探し初めて約半日、フェリに言われた通りの場所に向かうのだが肝心のレイフォンが気配を絶って逃げ回っている為見つかっていなかった。

「どうでしょうか……このまま探すのも良いのですが……カズマと戦っても良いですね……」

そのまま30秒程悩んでいたが、すぐに決断するとその場から飛び出した。

元々あまり考えこまない質なのだ。

「さて……カズマに相手して貰いますか……」

そう言ってクラリーベルは楽しそうに笑った。

レイフォンSIDE

「ふーっ、やっと諦めてくれたかな？」

クラリーベルが去って、ようやく息を着いたレイフォンだったが神はそして陰険メガネ（カリアン）はそう甘くなかった。

「フォンフォン伝言です」

「あれ？フェリ先輩……じゃなくてフェリ、誰からですか？」

「兄からです、内容は戦いに参加するようにでなければ（中略）……以上です」

カリアンからの伝言を聞いたレイフォンはしばらく固まっていたがやがて怒りを隠すかのように返事をした。

「……わかりました」

そしてレイフォンが出した結論は……陰険メガネ（カリアン）に何か意趣返しをしようというものでよほど頭に來たようであった。

そして最後に出した結論は……本気を出してさっさと終わらせるというものだった。

……こうして、三人が戦いを決意してツエルニの乱と呼ばれたバトルロワイヤル（自分以外は全て敵）がスタートした。

外力系衝剄が変化 旋風

旋剄の変化旋風

それは高速移動を行う過程で衝剄を飛ばし周りのものを全て吹き飛ばす。

カズマが通り過ぎたあとにはそうして吹き飛ばされた無数の武芸者が倒れていた。

「……………これで30人つてとこか……………」

無感動にカズマは倒した敵を数えていた。

「ん？ありゃあ……………」

外力系衝剄の化練変化・舞散花

突如、大量に出現した大量の赤い光玉は爆発を起こし近くにいた武芸者達を巻き込んでいた。

「クララか……………」

カズマは厄介なのが来たと感じた。

外力系衝剄の変化 疾風迅雷

と、そこで背後に気配を感じ振り向くとレイフォンが容赦なく生徒を倒しているのが見えた。

「おいおい……………容赦ねえな……………」

そんなことを呟きながらカズマは冷静に計算していた。

「俺が倒したのとレイフォンが倒したの、そして今倒してるのを合わせれば、大体参加者全員倒した計算か？」

と、なればもうここに用はない。

「カリアンの奴の所に……ってあぶなー！？」

慌てて攻撃を避けるとそこにはクラリーベルがいた。

「何だクララ、何か用か？」

「そうですね……端的に言えば戦って欲しいのですが「断るっ！」

そう言ってカズマは逃げ出した。

外力系衝剄の変化 千里

一瞬で超移動を行ったカズマは逃げようとしたが……

「カズマ、どこに行くの？」

レイフォンに逃げ道を塞がれてしまった。

カズマは逃げ出した。しかし周りを囲まれてしまった。

「ってドラクエかよ！」

叫びながらカズマは技を放つ。

外力系衝剄の変化 霧雨

刀身から放たれた極小の剄は霧のように周囲へ広がった。

しかし本能的にマズイと感じた二人に避けられるが逃がさない。

外力系化練変化・風流

ただの風に見えるがそれらは先程散らせた剄を二人のもとに吹き飛ばす。

しかし、流石はレイフォン、うまく壁を使って体勢を立て直すとカウンターを放って来た。

天剣技 霞桜

同じく凝縮された剄はカズマの技とぶつかり合って消えた。

「ちっ、やはりレイフォンは厄介だな本当！」

今度はレイフォンから仕掛けてきた。

小細工はせずに活剄で高めた身体能力のみで戦い剣を合わせる。

「何だか楽しくなつて来たなあ！」

活剽衝剽混合変化 千人衝

同時にレイフォンも使ってくる。

無数に増えたカズマとレイフォンが切り合う。そこにクラリーベルが乱入してきた。

外力系化練変化・円焰

周りを囲むかのように出現した炎は一斉に襲い掛かってきた。

外力系化練変化・水竜乱舞

「甘い！」

しかしそれはカズマによって阻まれる。

「こっちから行くよ！」

サイハーデン刀争術 水鏡渡り

超移動を行ったレイフォンはクラリーベルの背後にまわり続けざまに技を放つ。

サイハーデン刀争術 焰切り

しかし、それを予想していたクラリーベルにあっさりとかわされてしまう。

「成長したねクララ」

「まだまだこれからです」

「おっと、俺を忘れるなよ」

こうして三人はいつ終わるのかもわからない戦いに身を投じた。

そして、このバトルは1週間続き、莫大な被害を出して終わったが後にツエルニの乱と呼ばれた。

SIDE??????

「もう、二人とも何をしてるのかしら」

一方ツエルニには新たな人物が到着した。

怠い……そしてなぜかバトルは過熱する（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

あれ？予告では確か………すみません許してください。(前書き)

早めの投稿です。………すみません、自分調子こいてもう出してしま  
うとは………そろそろオリキャラだそうかな

あれ？予告では確か……すみません許してください。

戦いを終えた三人はとりあえず自分達が壊した物を片付けたり、謝り回ったりしていたが三日もして全て片付くと、未だ怒りのおさまらないカズマとレイフォンはカリアンの元に向かった。

（あの陰険メガネ……………クロスー！）

と互いに同じ思いを持った二人は周囲に殺気をばらまきながら生徒会室へと向かった。

二人がドアを開けるとすでにカリアンは来ていて、まるで来るのがわかっていたかのように二人を迎えいれた。

「やあ、二人共そろそろ来ると思っていたよ」

「いい訳を聞こうか（きましようか）」

早速話しかけるが二人に遮られてしまう。

「まあ、落ち着きたまえ、お茶でもどうだい？」

「いらない（りません）から早く返事をしろ（してください）」  
「カリアンは何とか二人を落ち着かせようとさせるがここしばらく怒りを溜めてきた二人を落ち着かせるのはさしものカリアンにも難しそうだった。」

「わかった、わかった、それで言い訳とは何のことか教えてくれな  
いかな？こちらにも二人に伝えることがある」

あくまで白々しいカリアンの態度に怒りをました二人はかえって冷静になったようです。まずはカリアンの話を聞くことにした。

「わかった、しかしまずはそちらの用件を済ませようか」

「そうか……では伝えよう、レイフォン・アルセイフ、カズマ・ミヤモト、君達は中間試験の結果赤点だったため、追試を受けるように！以上！学園都市ツエルニ、会長、カリアン・ロス」

そしてそれを聞かされた二人は……

「ああ……」

「そういえばあったねそんなの」

冷静に聞いていた。いや、本来なら慌てて勉強するところなのだが怒りに取り付かれた二人はそんなことは気にしない、そして、故に、二人の背後に迫っているプレッシャーに気付かない。

「……遺言はそれだけか？」

ポキポキと指を鳴らしながらカズマ

「……他に言うことはありますか？」

錬金鋼ダイトに手を掛けながらレイフオン

しかし、老成体すら倒す實力をもった實力者に囲まれながら殺氣を受けてもなお、カリアンは余裕の笑みを浮かべていた。

「いや……言い忘れていたが二人には指導者をつけることにした。仮にも武芸科の看板が追試に落ちたらマズイのですね。」

実に楽しげに笑いながら二人の後ろを眺めているカリアン。まさに真性のどSである。

しかし今なおそれに気付かない二人が実力行使に出ようとした瞬間！

「「がしっ」「

「「痛あ！」「

二人は耳を掴まれていた。

「誰だ！一体なにを……」

突然の乱入者に怒りの声を上げたカズマだったが声はそこにいた人

を見てに消えてしまった。

それを見たレイフォンも自分達を掴んだ人物に気がついた。

「……………リーリン」

そう、そこ居たのは三ヶ月前に別れ、二度と会えない筈の幼なじみの姿であった。

あれ？予告では確か………すみません許してください。(後書き)

感想・意見お待ちしております。

幼なじみにして勉強の鬼(前書き)

三連休は毎日投稿します。明日は今までで一番長いですよではございませぬ！

## 幼なじみにして勉強の鬼

「リーリン！？本当にリーリンなの？」

いきなり幼なじみに会ったカズマとレイフォンは混乱の極みに会った。

「カリアン！一体どういうことだ？」

とりあえず側にいたカリアンを問い詰める。

「どういう事と言われても……リーリン・マーフェス、Sランク奨学生、三ヶ月遅れでツエルニに編入ということしか知らないよ」

あくまでカリアンは知らなかったと言い張るつもりのような。しかしレイフォンとカズマを止めるのにリーリンを使った時点で嘘だといふのはモロバレなのだ……

「三ヶ月遅れってありえねーだろ！ていうかSランクって何？聞いたことねえよ」

カズマは混乱している。

「そ、そうだよ、わざわざ来なくても……」

リーリンは怖い顔をした

レイフォンは竦み上がった。

「と、とりあえず、外に出ようか」

「そ、そうだな」

こうして思わぬ人物の登場にカズマとレイフォンは当初の目的を忘れてリーリンを連れて出ていこうとしたのだが……

「二人共待つて！会長さん、さっきの話は……」

「ああ、それについてはもういいよ、それよりもさっきの件を頼むよ」

「判りました、それでは失礼します」

こうして生徒会室を去った二人だったが扉を閉める瞬間にカリアン顔を見たカズマは嫌な予感に襲われていた。

「そ、それでリーリンはどうしてツエルニに来たの？」

とりあえず近くの喫茶店に移動したあと早速レイフォンが切り出した。

「ああ……確かにそれは気になるな」

レイフォンの言葉にカズマも同意する。二人から質問を受けたリーリンは小さく「この鈍感ども」と呟いた後答えた。

「それがレイフォン達を見送ったあとグレンダんにツエルニから生徒募集のチラシが届いてね、その中にSランク奨学生というのがあってね、それで来たのよ」

「Sランク奨学生？そっぴゃさつきカリアンもそんなこと言ってたな……それって何だ？」

「うーん、何でも会長さんが言うには武芸大会に向けてグレンダンの武芸者の人が欲しいから特別に設けた枠だそっぴゃ、確か内容は学費免除にプラスして報奨金が貰えたかしら」

「成る程リーリンらしい理由だな、しかし何で三ヶ月も遅れたんだ？」

「それが受験書類と合格書類のやり取りに二ヶ月もかかってね、それにこっちに来るのにも一月かかったのよ」

「ああ……確かに僕らも来るのに一月かかったよ」

「それはわかった、しかしそれだけじゃないだろう？さつきキャリアに例の件だなんて言われていたけど、ありや何だ？」

「まあ、それに関しては後で、それより二人の話を聞かせて頂戴」

「わかった、じゃあまずレイフォンが女の子を待らせている件について」

「うわっ！人聞きの悪いことを言わないでよカズマ！」

レイフォンの悲鳴が響いた。

こうして話しているとあっという間に夕方になっていた。とりあえず、リーリンは泊まる場所が決まっていなかったのでカズマとレイフォンの部屋に泊まることになった。

そして三人で談笑しながら夕食をとっていたが最後に放ったリーリンの一言により、全ては破壊された。

「あっ、二人共、勉強道具を出さない」

「え？どうして？」

「いきなりなんだ？」

夕食終了後リーリンにそんな事を言われた二人は揃って疑問の声をあげた

「言つてたでしょ、二人共赤点だったから補習だって、それで私が指導員をするよう頼まれたの」

「ああ、そういうことかって！レイフォンどうした顔が青いぞ！」

「カズマ、僕練武館に忘れ物したから取りに行ってくるね」

レイフォンは引き攣った笑みをカズマに向けると取って付けた様な言い訳を口にして、カズマが何か言う暇も与えず去っていった。

「何だっつてんだ一体……？」

事情を知らないカズマは疑問符を浮かべていたが

「逃げたか……まあいいわ、とりあえずカズマから始めましょう」

リーリンのスパルタ教育を受けてレイフォンの行動を理解すること  
となつた。

3時間後

「レイフォンを連れてきたらもう今日はいいわよ」

「本当か!？」

3時間後にはこうした飴を目の前に出されたカズマの働きによりレイフォンも捕まり朝まで勉強させられることになる。

幼なじみにして勉強の鬼（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

**追試をクリアー！そして家探しとバトルって多いわ！（前書き）**

さて、まずはオリキャラの登場&バトルとなっております。

ではじりじり

追試をクリアー！そして家探しとバトルって多いわ！

「レイフォン！」

「カズマ！」

「「よくやった（ね）俺（僕）達！！」」

追試を乗り越えたレイフォンとカズマは喜びを爆発させていた。

「ここまでの二週間、どれほど苦労したことが……」

「勉強して、勉強して、勉強したりしたよね」

ほぼ毎日徹夜して課題を片付けて、勉強し、………よく生きてるな  
………」

「うん、僕も信じられないよ……」

と苦労を分かち合った戦友と語りあっていると。

「レイフォン、カズマ」

悪魔の声が出た。

「「な、何だいリーリン」「」

「買い物に行くわよ」

「わかった、」

「了解、助かった」

今の返事に既に二人の心境が現れていた。

「ねえリーリン、買い物ってどこに行くの？」

5分後、寮を出た三人はリーリンに先導されながら歩いていた。

「うーん、実は部屋を探そうと思って」

「「部屋？」」

「そう、始めはニーナさんの所でもよさそうだったんだけど、レイフォンとカズマを見たら気が変わっちゃって」

それを聞いたカズマとレイフォンが凍りついたように立ち止まった。

「そ、それってまさか……………」

「そうよ、そのまさか……………」

聞きたくなかった言葉が冷酷にも放たれる。

「二人の勉強を毎日見てあげる為よ」

「ギャアアアア!!」

瞬間二人は奇声をあげて逃げ出そうとした、が

「どこに行くのですか」

「逃げてても無駄ですよ」

いつの間にか現れたクラリーベルとフェリに捕まってしまった。

「とりあえずじゃあ部屋を探しに行きましょうか」

「そうね、クララ、カズマをお願い」

「判りました」

「グアッ!」

余りの出来事に呆然としてしていると関節を決められてしまった。

視線でレイフォンに助けを求めるとリーリンに拘束されたレイフォンの姿があった。

（馬鹿な!一般人のリーリンがレイフォンを拘束しているだど!）

元天剣授受者を拘束するリーリンにカズマは恐怖した。

（レイフォン!どうにかならないのか!?!）

(無理だよ！カズマはどうなの？)

(腕一本を棄てるなら行けるが……お前は見捨てるしかないな)

(そんな！酷いよカズマ)

(さらばだレイフォン！お前の尊い犠牲を無駄にはしない)

(カズマの人でなしー！)

(何とでも言え！じゃあな)

とカズマが脱出しようとした瞬間、

「カズマ……逃げたら……分かるわね？」

リーリンに機先を制されてしまった。

(ば、馬鹿な！気付いたというのか！)

(カズマ……もう無理だよリーリンを出し抜く何て僕らには無理だよ)

(馬鹿野郎！諦めるなレイフォン！必ず何か手がある筈だ……)

しかしその後カズマとレイフォンの抵抗は全てリーリンによって押さえられた。

(リーリンには勝てない……)

リーリン最強伝説の誕生であった。

「うーん、どこがいいかしら……」

レイフォンとカズマの前ではリーリンとクラリーベルがカタログを見て唸っていた。隣ではフェリが本を読んでいる。

「なあ、レイフォン、何とかならないか？」

「カズマ……無理だよ……」

「馬鹿！諦めるな！諦めたらそこで試合終了だぞ！？」

「カズマ、さっきから同じことを何回繰り返せば気が済むのさ？」

「ぐっ！……」

「諦めるしかないよ、昔からリーリンに勝てたことなんてあった？」

「そんなこと一回くらい……ないな」

「でしょ？もう諦めて楽になろうよ」

不毛な会話を繰り返す二人、しかしカズマは諦めきれない

（俺は自由を求めてツエルニに来たんだ！こんなことで諦めきれるか！）

カズマの中に反逆精神は未だ健在であった。

（この三人の目的はレイフォンただ一人と言っても過言じゃないはず……ということはレイフォンを使えば何とかなるのか？……）

友人を犠牲にするという最低の考えを浮かべていると決まったらしくリーリン達が席を立った。

「とりあえず、ここを見に行きましょう、レイフォン、カズマ、行くわよ」

「……はい」

「了解」

男二人は力無く返事をしてついていった。

結局、クラリーベルも住むつもりだということなので商店街より少し離れたアパートに住むことになった。

とりあえず来週引越すことにして五人は解散した。

フェリとクラリーベルは家に帰り、リーリンはレイフォンを連れて買い物に行った為、カズマは一人で家への道を歩いていた。

(あー、マジで何とかしないとマジイなあ……)

リーリンの勉強地獄からどうやって逃げ出そうか考えていると。

「ん？」

妙な気配を感じた。

「おかしいな今確かに気配を感じただけどなっ！」

『ガキンッ！』

背後から突き出された剣を刀で受け止める

「誰だかしらねえが！」

外力系衝剄が変化 竜旋剄

カズマを中心に衝剄の渦が発生して襲撃者を吹き飛ばす。

その瞬間ちらりとだが襲撃者の姿が見えた。

(女か……)

襲撃者は高速移動を行っておりカズマでさえ目で追うのが困難であった。

(こいつは本気でやらないとマズイな……)

その動きに対応する為カズマも無言で活剷を高めていく。

(早さは向こうが上か……ならば！)

カズマは刀を脇に構えて居合の構えをとる

大和流 抜刀術奥義 神斬

一方、襲撃者は壁や地面を蹴りつつカズマに迫りつつあったが気配が別れていた。

(これは疾影系統の技か……それにしてもこのスピード、たいした物だな……)

襲撃者が使っているのは内力系活剷が変化 瞬旋

外力系活剷が変化 分影

肉体の大幅な強化に加えと衝剷の反動を利用した高速移動である。ただし自身の視界も奪われる為誰にでも扱える訳ではない。さらに分影を加えることにより武者すら反応できない高速攻撃を可能にしていた。

(……………来るっ！)

襲撃者は様子を見ていたが背後から襲い掛かった。

(貰った！)

しかし…………

攻撃はカズマを擦り抜けた。

「何！」

「残念、俺はこっちだ」

「つつっ！」

外力系衝剄が変化 針剄

凝縮された剄が襲撃者の首を捉え昏倒させる。

カズマの勝利であった。

(ふう、賭けだったが何とか勝てたか……………)

カズマが勝利した技は

外力系化練変化 虚影

元々はクラリーベルの技である。

カズマは相手が高速移動をしている為こちらがはつきりと見えていないと踏んで化練剣を使って身代わりを創ると隠れていたのだ。

（それにしても抜刀術の弱点を一瞬で見抜くとは……やるな）

そう、居合とは正面の相手に有効な構えであり他方向からの攻撃には無力なのだ。

（しかし何物だ……？）

ここでカズマは改めて襲撃者を観察した。

歳はカズマと同じであろう金髪の長髪で整った顔立ち、十分美人と言えるだろう、思ったよりも華奢な身体つきであったがスタイルは抜群であった。

（おいおい、こんな美人から恨みを買った覚えはねえぞ）

とにかく放って置く訳にも往かずカズマは自宅に連れていった。

幸いにも自宅に着くと同時に少女も目を覚ました。

「ジュンは……」

「俺の部屋だ」

「そうか……私は負けたのか……」

「質問させて貰うぞ、何故俺を襲った？」

「それが決まりだからだ」

「決まりだと？」

「そつだ、貴様も宮本家の人間なら分かるだらう」

「宮本家……まさかお前篠崎家の人間か？」

「まさか本当とは……あの爺、黙ってやがったな」

「決まりに従つてお前を測つた訳だ」

「成る程ねえ……まあいい名前は？」

「レイ、シノザキ・レイだ、こちらの言い方だとレイ・シノザキだ  
な」

「そつか……では、まさかとは思つが……」

「そつだ、貴様は合格だカズマ・ミヤモト」

「それはつまり……」

「ああ、私は貴様の嫁となったのだ」

「やはりか……」

カズマはがっくりとうなだれた。

(倒さなきゃよかったな……)

美人とはいえ出合いが出会いだけに素直に喜べないカズマであった。

#### 補足説明

宮本家と篠崎家にはある掟があり同じ歳の娘、息子がいる場合、宮本家に嫁入りするという決まりがある。

ただし、宮本家の男が負けた場合、その話しは無しとなる。

追試をクリアー！そして家探しとバトルって多いわ！（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

婚約者……あれ？あまりうれしくないな（前書き）

連続投稿です。ただ話しがグダグダです、どうぞ

婚約者……あれ？あまりうれしくないな

「ここ、婚約者……！」

あのあと、帰ってきたレイフォンとリーリンに事情を話しレイを紹介したら二人は揃って叫んだ。

分かる、わかるぜその気持ち

「初めまして、私はレイ・シノザキです。もうすぐレイ・ミヤモトになります」

「えっ？えっ？まさかもう結婚するの？」

「は「待てコラ」……何か？」

「さっきも聞いたがお前はいいのか？」

「いいも何もさっき言った通りです」

「マジかよ……」

ちなみにさっき言った通りとはレイフォン達が帰って来る前の会話のことだ、以下再現

「おまえ……本当に俺なんかが相手でいいの？」

「ええ、私は自分より強い相手でなければお断りでしたがあなたは強い、それに気に入りました」

「マジかよ……」

以上、再現終了。

「という訳ですのでよろしく願いします」

「そうかだが断……」「これを……」「何！」

そ、そんな馬鹿な、何故このことが……

「どうします？」

笑顔で聞いてくる。

「わ、わかったいいだろう」

どうせ好きな人もいないしな……

こうしてカズマ・ミヤモトは（脅されたりした結果）若干十六にして嫁を貰うこととなった。

「なあ、結婚って、出来るの？」

「ツエルニでは本人同士の同意があれば学生でも結婚可能です」

「マジで？」

「マジです、子供を産んでもいいみたいですよ？」

「辞めてくれ……」

「ま、まあとりあえずカズマ、結婚おめでとう？」

気まずい空気の中レイフォンが話し出した。

（お前はいいやつだよ……本当）

「えーと、じゃあ式はいつ挙げるの？」

（リーリン、お前はもう少し動揺しろ）

「とにかく、しばらく一人にさせてくれ飯はいらねえ」

「そつですか……私は一旦帰ります」

「ああ……」

こうして、カズマの長い一日が終わった。

以下その後の会話

「リーリン、カズマ、本当に結婚するの？」

「するんじゃない？」

「リーリン……よく冷静でいられるね」

「レイフォン、こう見えても結構私驚いてるわよ」

「どこが？」

「腰が抜けちゃった」

「ええ！？本当？」

「本当よ、それよりカズマ大丈夫かしら？」

「うん………確かにかなり来てたよね」

「まあ、今はそつとしておきましょう」

「だね」

「それにしても結婚かあ………」

「まだ十代なのにな」

「ヤマトってやっぱりいろんな風習があるのね」

「うん、そうだね」

「レイさんも綺麗だったわね」

「うん、凄い美人だったね」

「まあ、いいわ、ご飯にしましょう」

「わかった、手伝うよ」

「ありがとう、そうだレイフォン言っておくけど」

「？ 何？」

「レイさんばかり見ないように……」

「はっ、はい！」

婚約者……あれ？あまりうれしくないな（後書き）

ご意見感想お待ちしております

さて……カズマ？元気がないね（前書き）

更新ですがお知らせです。作者は現在、夏を制する者は受験を制するらしいっすよという言葉通り課外を受けております。

具体的には朝8時から夕方6時半まで、とまあ小説を書く余裕もなく……加えて、フェリ編に入り、レイフォンメインのイベントを書く為、8月まで更新は1、2回しかできませんのでご容赦ください。

それではどうぞっ！

さて……カズマ？元氣ないね

第十七小隊ルーキー、カズマ・ミヤモトが結婚！

この大ニュースはツエル二中に伝わった。

また結婚相手であるレイについても大々的に伝わった。

今やツエル二は武芸大会を控えているというのにその話題で持ち切りだった。

それは彼の周りも例外ではない訳で……

とある部屋ではレイフォンを追い出した女性陣がカズマとレイについて熱心に話していた。

「それにしても、まさかカズマが結婚するとはねー」

「あら？そんなに意外なんですか？」

「んー、まあ昔から他人の色恋沙汰には興味津々だったけど、自分のことは無関心だったからね」

「へー、カズマって意外と自分の事は無頓着なんですね」

「そうね、でも意外と細かい所に気がつくし、いい夫になるかもしれませんね」

「んー、まあ友人として上手くやっていくことを願ってますよ」

「そうね、それよりレイフォンを何とかしないと」

「ああ、それは確かに」

「あんな事があつたから周りに目を向けるようになるかと思えば…  
…」

「不治の病ですね」

「ニーナはどう思います？」

「わ、私か？」

「ええ、レイフォンのあの鈍さ、犯罪だと思わない？」

「ええと……よく分からのだが」

「……………」

「隊長もどっこいどっこいですから」

「ニーナもかあ……………」

話しが途中からレイフォンの話しになっているが、とにかくカズマの結婚についてあちこちで話題になっているのは確かだ。

一方のカズマといえば

「……………」

「えーと、カズマ？」

部屋の片隅で膝を抱えて丸くなっていた。

「……………レイフォン、一人にしてくれ」

(マズイ、何だかカズマが黒いオーラを纏ってるよ)

「えーと、カズマ、元気ないね？僕でよかったら相談に乗るよ」

そんなレイフォンの声を聞くと、カズマはゆらり、と顔を向けた。

(……………マズイ、意識があるかも怪しい)

レイフォンが病院に連れていくべきか検討していると。

「……………レイフォン、なら俺の愚痴を聞いてくれ」

唐突にカズマが話し始めた。

「……………俺はさ、自由をそして過去と決別するために学園都市に来た訳だ、それが結婚？どうなってると思うよな？思うだろ？俺まだ十六だぜ、大体恋愛結婚ならともかく見合いでもない政略結婚って、ありえねーよ、大体……………(中略)それであるメガネの策略としか

……（後略）だろ？どう思うよレイフォン？、結婚？この歳で？どうなってんだよ、俺はもっと自由に生きたいんだよ」

こうしてカズマは愚痴を一时间ほどレイフォンにしゃべっていた。

一方、カズマに愚痴を聞かされていたレイフォンは……

（うあー疲れた、というかカズマ同じこと何回もしゃべってたよね、酔っ払いぐらい質が悪いよ、それにしても自由か……僕も欲しいよ）

「まつ、まあカズマも納得はしてなくても、一応了承したんだし、いいんじゃないの？」

「……………まあな、確かにまだましなほうだ、けどなレイフォン（脅されて）がある時点で良くないんだよ」

（ん〜、まあ確かに強制された感じだからしょうがないのかなあ……）

「か、カズマ落ち着いて考えれば、結婚しても一緒に住まないといけない決まりはないんだから、ある程度の自由はあるんじゃない？」

レイフォンは結構いい所を突いていると思ったのだが……

「ああ……そうだな、二年だけ……」

「え？二年？どういうこと？」

「十八になったらガキを産まないといけないんだよ、早死にされて後継者がいない、なんて状況にならないためにな」

「え、……………それってつまり……………」

「そうだ十八にして父親だファザーだ、親父だ、何で周りが学園生活を送る中でこんな事を……………」

「断れないの？」

「無理だな、レイ自体強力な使い手だが、レイの親父、篠崎 源二は後に強い、断つたらまずこっちに来るな……………」

「勝てないの？」

「お前は！あの人のやばさがわかってない！やばいんだよあの《苦行鋼帝》は！」

「《苦行鋼帝》？」

「そうだ、あのとことん、自分に苦行を課して鍛えた鋼のような身体を使った内力系活剋は半端じゃない、勝てるのはグレンダンの陛下くらいだぜ、それに由来して《苦行鋼帝》と言われているんだ、三分もたねえよ、金剛剋を使うこともできなかった」

「ふーん、グレンダンの外にもそんな人がいるんだ、」

「ああ、というかヤマトは武芸者が少ないからな、強くねえとやってられないんだ」

「そうなんだ」

「しかし……レイフォン、助かったぜ」

「へ？何が？」

「源二さんのことすっかり忘れてたぜ！あの人のことだ、このまま腐ってたら間違いなく来ていたな」

「来てたらどうなったの？」

「俺が車椅子で生活する嵌めになってた」

カズマは真剣な表情で言った。

後日、実際篠崎 源二がツエルニにやって来たさいに相手をしたレイフォンだったが、カズマの言葉を身をもって体験することになり、カズマの苦勞の一端を知ることになる。

そして二週間後、カズマ・ミヤモトとレイ・シノザキは結婚して夫婦となった。

さて……カズマ？元氣ないね（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

番外編 銀の少女の理由 (前書き)

番外編です、ただ急いで書いたものでいざれ訂正するかと、とりあえずフェリ編です。なんかレイフォンが違うけど主人公補正です。どうぞ！

## 番外編 銀の少女の理由

少女、フェリは不機嫌だった。

「何故、あの人は兄の提案をあもあつさり受け入れたのでしよう」

そう彼女が不機嫌なのは今日、自分と同様に半ば強制的に武芸科に転科させられた二人がそれほど反発しないことにあった。

特にそうレイフォン・アルセイフといっただろうか、彼に対してフェリはいらいらしていた。

「明らかに嫌そうなのに流されるなんて……優柔不断ですね」

実際、同じ境遇の仲間が出来たと思っていたフェリとしては、かなり気になる存在ではあるのだが……

「話すきっかけもないですしね……」

どうしたものかと考えていると

「フェリ、ちょっといいか」

二ーナに声を掛けられた

「何ですか隊長？」

「隊員が見つかったな、悪いが練武館まで連れてきてくれないか？」  
面倒くさい、そう思ったフェリだったが、レイフォン達だと聞いて考え直した。

(同じ隊に入るのなら、話す機会もあるはずですね……)

「わかりました、引き受けましょう」

「ああ、ありがとう、放課後にも呼んでくれ」

「わかりました、では」

そう言って別れた後、フェリはどうやって話しかけるか考え始めた。

「あの………すみません」

放課後フェリはレイフォンを含めた三人に声をかけていた。

結構時間がかかると思っていたのだが、三人ともわりかし簡単に着いて来てくれた。

練武館に着くとニーナが少隊について説明を始めた。長くなりそうなので、壁際で本を読みながら待つことにする。

「わかったか？」

「あ、はい」

しばらくするとニーナの説明が終わったのか、レイフォンが返事をするのが聞こえた。

それを聞くとフェリは本を閉じた。

「どつするのでしょうか」

フェリが気になるのはその一点に戻る。

自分と同じように、手を抜くのか、それとも本気でやるのか……

ダアンツ！

ニーナが床に叩きつこられていた。どうやら後者だったらしい。

（何故？）

フェリには何故、やりたくもない武芸をやるのか納得がいかなかった。

（まるで私一人が駄々をこねているようではないですか……）

移動する皆に着いていきながらフェリの心は揺れっぱなしだった。

(聞きたい)

何故やりたくもない強制された武芸を続けるのか、何故別の生き方をしたくて入った一般教養科を辞させられたばかりだというのに、ああして本気をだすのか……

(本気を出したら戻れなくなるかもしれないのに……)

カリアン(兄)は今年で卒業するが、実力を知られたのなら次の生徒会長が一般教養科に戻ることを容認するとは思えなかった。だからこそフェリは絶大な念威を持ちながらも、それを危惧する気持ちと兄への反発心から実力を隠してきたのだ。

(直接聞く、それしかありませんね)

フェリはチャンスを伺うことにした。

しかし意外と早くにチャンスが訪れる、レイフォンがカズマとの模擬戦で気絶して保健室に運ばれたのだ。

(これはチャンスです)

思いがけないチャンスに喜びながらも、フェリは平静を装いながら自分が見ていると申し出た。

「……………起きませんね」

首尾よくレイフォンを引き取り保健室で二人きりになったのはよいのだがなかなかレイフォンが目を覚まさない。

(これでは話しを聞くなんて無理でしょうね……………)

半ば諦めていると……………

「うわっ、ありえねえ」

レイフォンが目を覚ました。

しかしなぜか頭を抱えて身悶えしている

フェリはそれを呆然として眺めていたが、レイフォンがベッドから落ち床でみっともないと呟き始めるのに及んで、遂に声を掛けることにした。

「なにをしているのですか？」

「自分のみっともなさに叩きのめされているんです」

そう返事を返すとレイフォンは呻くのをやめた。しかし身を起こそ

うとはしない

「できれば立ち上がって欲しいんですけど」

「無理です」

「どうしても?」

「どうしても」

「そうですね?」

しばらく黙って眺めているとやっとレイフォンは顔を上げてくれた。

「そういえば名前をまだ教えて貰ってませんでした」

「ああ、そうですね。フェリ・ロス。武芸科の二年生です」

「ロス……まさか」

「はい、そのまさかです、生徒会長カリアン・ロスは私の兄です」

「生徒会長の妹さん?」

「だからそう言いました」

「そうですね……」

「そうですね」

気まずい沈黙が流れる。

「タイミングが悪かったようですね」

フェリがそう言うとレイフォンの顔が赤くなった、どうやら悶絶していた姿を見られたことを思い出したらしい。

（聞いてみますか……）

「単刀直入に聞きます、兄を恨んでいますか？」

「……恨んでいるって言葉は、ちょっと意味が深すぎる気がするけど」

レイフォンが言い淀んでいるのでフェリは先を続けた。

「私は恨んでいます」

「へ？」

「私は一般教養科に入る予定でしたがしかし兄は無理矢理私を武芸科に転科させました」

「どうして？」

「勝ちたいからです」

フェリは断定した。

「自分の目的の為ならどんなことだってするのが兄です、こうなっ

たら私達の意味は関係ないんです」

「いや、ちょっと……」

レイフォンが言葉を挟んでくるがフェリは構わず続ける。

「勝つためならどんな卑怯なことだってします。そんな人のためにわたしたちがなにかをしなければならいなんて馬鹿げています、だからこそあなたに聞きます」

「何ですか？」

レイフォンが戸惑いながら返事をする。

「貴方は何故、本気を出したのですか？何故戦ったのですか？」

フェリは疑問をストレートにぶつけた。

レイフォンは驚いていたが、詰まりながらも答えてくれた。

「何というのか……僕は武芸で失敗してここに来ました。だから武芸以外の生き方を見つける為に一般教養科を選んだんです。でも……」

レイフォンはそこで一瞬考え込んだがすぐに続けた。

「幼なじみがいて、そいつが肯定してくれたんです、武芸をしてい  
る僕がいいと言ってくれる人が、正直理由なんて僕にもよくわかり  
ません、ただ信じてみようと思っただんです。僕が本気を出したのは  
会長の、ツエルニの事情を聞いたからではないです。ただ僕が本気

で戦うことを望んでくれる人がいる、だから本気をだしたんです」

フェリは、優柔不断な態度を見せていたレイフォンがここまで話すことに圧倒された。そして同時羨ましいと思った、自分にはそんな人はいない。期待されてはいるが、周りが自分の事を考えてくれただろうか、崩れそうな心を守る為にフェリは質問した。

「では、もう諦めるということですか？」

武芸以外の生き方をそんなに簡単に諦めるのか？

しかしレイフォンの答えは違った。

「諦めた訳じゃないですよ、ただ自分を必要としてくれる人がいるのなら少し遠回りしてもいいんじゃないか、そう思ったんです」

「そうですか……」

それでも自分は兄の期待に答えたくない。

「では、私はどうすればいいのでしょうか」

フェリが呟くように問い掛けると、レイフォンは、急にオロオロして悩みだした。

だからフェリは問わずにはいられなかった。

「どうして、会ったばかりの私の為なんかに、そんなに悩むのですか？」

「それは仲間だからですよ」

「仲間？」

「同じ少隊の仲間、そして何より同じ悩みを抱える仲間じゃないですか」

「仲間……ですか」

「あつ、すみません、馴れ馴れしかったですね」

「いえ……」

考えていると不快に感じたと思ったのが、レイフォンが謝ってきた。

(仲間……悪くないですね)

「では、貴方は私に仲間として、どうして欲しいですか？」

「今は何もありません、でも、僕はフェリ先輩の夢、念威操者以外の生き方を見つけたという夢を応援しますよ」

「……そうですか」

仲間として自分の事を考えてくれるレイフォンを見て、フェリは初めて誰かに認められた気がした

念威操者ではなくフェリ・ロス個人を

「なら……私も約束しましょう、」

フェリは思った。

「貴方が武芸以外の生き方を見てけられるように、手伝いましょう、そして貴方が望むのなら私は念威を誰でもない貴方の為に使いますよ」

この不器用な少年の為なら自分の力を使ってもいいと。

レイフォンは驚いていたが、やがて笑うと約束してくれた。

「僕も約束しますよ」

この日、フェリは一つの悩みを振り切り仲間という存在を得た。そして一人の不器用な少年に恋することとなった。

私が念威を使う理由は誰の為でもでもない、貴方の為です。

番外編 銀の少女の理由 (後書き)

ご意見感想お待ちしております。

## カズマレポート(前書き)

短くそして無理矢理ですが投稿です。どうぞ！

## カズマレポート

状況は絶望的、しかしだからこそ価値がある、これをくぐり抜ければ！未来が……

「さて、ではまずは組み手からしましょうか」

………ない！

やあ、みんなカズマ・ミヤモトだよ、え？キャラが変わってる、まあそれには理由があるんだ、とりあえずそれを聞いてくれ……

以下回想

俺カズマ・ミヤモトは色々あつて既に結婚している、まあ、脅されたり、脅されたり、色々あつたんだよ………本当、

それでだ、結婚相手はレイ・ミヤモト旧姓レイ・シノザキなんだが………武芸一筋とは言わないが、とにかく家の決まりに従って、毎朝訓練を俺に課してくるんだ。

え？それくらいならいいじゃないか？

今言った奴………ちょっと面貸せやこら！

毎朝だぞ！朝の3時から毎日！

3時間と寝られねーよ、という訳で、今俺は逃亡しようとしているんだが……

正直逃げ切れる気がしない！

なにせレイの活判は半端じゃない、スピードだけなら天剣をも凌ぐ程だ、

そんな奴から逃げられるか？

答えは否だ！

だからこそ、俺はこうして逃亡する為に策を……策を……

「……………俺は、無力だ……………」

結局そのまま、逃げ出すことはできなかった。

……………へたれ？

馬鹿言つな！逃げたら首が青い空を飛んでいたぞ！？それくらいやばい状態だぞ？

現に……「ヒュッ！」

「戯れ事は終わりましたか？」

「……………はい、俺が悪かったです」

こうなる、な？俺の言った通りだろう？とにかく、こうして俺が拘束されている間にレイフォンを巡る動きがあったのさ、それでは特別編、レイフォンと恋する乙女をどうぞ！

作者……………なんか前フリ長くねえ？

## レイフォンSIDE

「（ブルルッ）？なんか寒気が……………」

「どうしたの？」

「うーん、なんか急に寒気がして」

「寒い？結構暖かいと思うけど」

「うーん、そういう訳じゃないんだけど……」

「まあ、いいわ、それなら早く済ませましょう」

「わかった、それでどれにするの？」

「そうねえ……自分で選んでもいいけど……ここはレイフォンに選んで貰おうかしら」

「ええ！？無理だよリーリン！服のことなんてわからな……」「選びなさい」「……はい」

「うっ……どれがいいんだろう」

リーリンの迫力に負けて素直に服を物色し始めるがどれがいいのかわからない

「リーリン、何かリクエストはないの？」

「ない！とにかくレイフォンが選びなさい！」

「……はい」

どうやら、何が何でもレイフォンに選ばせるつもりらしい。

「うーん、これがいかなあ……?」

迷った末にレイフォンが選んだ物は!

「……………帽子?」

そう、レイフォンは悩みに悩んだ末に選んだのは白いいかにもお嬢様がかぶるような帽子だった。

「私は服を選ぶように言ったはずなんだけど……」

じと目で見えてくるリーリン

「これで勘弁してください」

頭を下げるレイフォン、

どこの夫婦だおまえらは!といった風景が生まれていた。

結局リーリンが折れて帽子を買うことで納得した

その時に「まあ、レイフォンだし、選んただけましか……」

と呟いたのはレイフォンには聞こえなかった。

ちなみに、その帽子をその後リーリンが被りだし、それを見たフェリ達がレイフォンに選んで貰ったことを知るや否や、レイフォンがさらに服や帽子を選ばされたのは当然の結果であろう。

以上カズマレポート、レイフォン観察日記リーリン編より

著者 カズマ・ミヤモト、

## カズマレポート（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

## カズマレポート2（前書き）

何か書こうと思って書きました。伏線を含むので一応読んで頂いたほうがよいかと。

## カズマレポート2

今日はレイフォンの一日をこの俺カズマ・ミヤモトが紹介しよう。

朝 6時起床

6時半 リーリンと朝食の準備。

7時 クラリーベル、フェリ起床

7時半 俺とレイが朝の訓練を終えて合流。

8時 全員で登校。

9～12時 授業

1時 昼食、リーリンは弁当屋でアルバイトの為不在。

2～5時 授業

5時～7時 練武館で訓練

8時 全員で夕食

9時～10時 リーリンとフェリによる特別授業

10時～12時 談笑、風呂等

1時 就寝

が主な流れとなる。

記録者カズマ・ミヤモト

追記 レイフォンの一日で彼の側に女性がいないのはトイレや風呂のみであり、常に二人は女を侍らせている。

また、小隊対抗戦や汚染獣戦の活躍によりファン多数。現在ファンクラブが結成されており、会員546名

これはツエルニの女子の二割を占める。

年上にも大人気で「抱きしめたい！」といった意見が多い。

ラブレターは既に三百を越えたが本人が鈍感なためとリーリンら女性陣の暗躍により本人にはあまり届いていない。

打倒レイフォン・アルセイフ、通称DRAが存在する。男子生徒からの妬みの声はあるがそのような発言、行動をした場合は全女子から総スカンを喰らうことになるため、表立った行動はない。

またひそかに賭けの対象にされており 誰と結ばれるかが賭けられている。

ちなみに1番倍率の低いのは卒業まで気付かないの1・1倍である。

ハーレムルート一直線であり最終的にファンは千人を越えると見られている。

最近のあだ名は鈍感王である。

カズマレポート2 レイフォンの生態と彼を取り巻く環境について

後日3000部売れました

## カズマレポート2（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

お酒は二十歳になってから、でも二十歳でも呑んだらイケナイ人もいるんだよね

久しぶりの投稿ですが……スルーしていただけるとありがたいです。

はっきり言ってヒドイ内容です。酒のんで書いた作品だからでしょうが……またレイフオンの台詞は一部原作からパクりました……最低だ……死のう

お酒は二十歳になってから、でも二十歳でも呑んだらイケナイ人もいるんだよ

「うーん……疲れた」

訓練を終えて着替えている時にレイフォンがそう呟くとその場で一気に話が始まった。

「何だレイフォン、もう疲れたのか？それなら俺はどうなる？」

「カズマの言う通りだぜレイフォン、俺なんて今からデートだったのに」

「いや、カズマはともかく、シャーニッド先輩は自分で決めたからいいでしょうけど……僕は今から地獄の勉強が待ってるんですよ？」

「それは俺も受けてるし機関掃除がなけりゃ、俺は3時から朝まで訓練だぞ！？」

「カズマの言う通りだぜレイフォン、……それにしても……俺もレイちゃん朝まで過ごしたいぜ」

「シャーニッド先輩、なんなら代わってみます？」

「いんや、遠慮しとくよ」

「なら言わないでください！」

「荒れてるねえ、」

「荒れちゃ悪いですか？」

荒々しく返事をするカズマ

「まあ、落ち着け、こういう時は飲みに行こうぜ」

「シャーニツド先輩？まだ未成年じゃ？」

「酒を飲みに行くとは言ってねえだろ？レイフォンもどうだ？」

「行きませんよ、というかカズマが行くのは決定ですか？」

「男には行かなければならない時があるのさ」

「……行きます」

「よし来た！じゃ、そういう訳でレイフォン、俺達は飲みに行くから後よろしく」

「ええ！？本当に行くの？」

「まじもマジ、本気と書いてマジだ」

「けどシャーニツド先輩はデートじゃー」「浮気は男の甲斐性さ」

「じゃ、レイフォン頼んだぞ」

「え、ちよつと本当に……」

『ばたんっ！』

戸惑うレイフォンを尻目に扉が閉じた。

「それで？どこに行くんです？」

「ミーシャのそこかな、前に行つたる？」

「あー、確か対抗戦の初戦の勝利の祝杯をあげた」

「そう、そこだ！もうそろそろ都市対抗戦も始まりそうだしな、景気づけに行こうぜ」

「はあ、……けどシャーニッド先輩、本当に大丈夫ですか？都市警にでも見つかつたら……」

「大丈夫、大丈夫、そんなときはオレが何とかしてやるよ」

「そうですね……それじゃ！よろしく願いします！」  
言った瞬間カズマが消えた。

「ん？カズマの奴どこに……」

驚いてシャーニッドが周りを見渡すと都市警のパトロールから声をかけられた。

「あー君、十七小隊のシャーニッド・エリプトン君だね？」

「そうですね？」

「君はまだ未成年だろ？」

「まあ、十九ですね」

「なら何でこんなバーの辺りを歩いているんだい？」

「そりゃあ……（以下略）で」

「そうか、わかったよそれじゃあ、いい夜を」

5分後には相手はご機嫌で去って行った。

「何をしたんですか？」

都市警察の上級生が去るといきなり背後に現れたカズマがシャーニ

ツドに尋ねる。

「うおっ！カズマ、お前どこに行ったた」

シャーニツドが驚いて尋ねる。

「その屋上にいました、ところでさっきの説明は？」

「ああ、ありゃつまり相手も堅物な男ってことよ、」

「？どつじいじいことですか？」

「まあつまり、かくかくシカジカなわけよ」

「成る程……参考にします」

「さてとそれじゃ、飲みに行くか」

「……はい」

何故かテンションの低いカズマを不審に思いながらもシャーニツドは店に入った。

（30分後）

「……………」ついでに「よかよか」

あれから機嫌よく飲んでしているとレイがレイフォンとフェリ、リーリン、クラリーベルを連れて入ってきた。

「俺達は尾行されていたって訳ね」

ジロリとレイフォンを見る。

「すみません、先輩、なんかレイさんが怖くて」

ちなみにカズマは現在レイちゃんにどこかに連れて逝かれている。

「それにしても……………なんでフェリちゃんやリーリンちゃんまで来るわけ？」

「さあ……………わかりません」

ちなみに彼女達は現在歓談中だ、

「それにしても……………先輩それ飲んでいいんですか？」

女性陣を見ているとレイフォンが尋ねて来た。

「ばれなきや問題ないって、レイフォンも飲むか？」

「飲みませんよ」

「……さつきも似たような会話をした気がするが、酒を呑んで酔ったら本音が話せるぜ？」

「別に隠してることも我慢してることもありませんけど……」

「甘い！お前の本心を知りたい奴は沢山いる！」

「そんなことありません……うわっ！リーリン？って、フェリ先輩何を？ちよっ！クララ？それお酒じゃ……ちよっと止めて……ガボガボッ」

レイフォンに話を振った5秒後にはリーリン達に襲われていた。

それにしても……レイフォンの本音ねえ……どうなることやら

「やれやれ、青春だねえ……」

「……平和ですね」

「ああ、って！カズマ！無事だったのか？」

揉みくちやにされているレイフォンを眺めているといつの間にかカズマが傍に来ていた。

「レイちゃんは？」

「向こうで酒呑んでます、というかなんか酒の臭いだけで酔ったみたいで……おかげで助かりましたが……」

「へえ！レイちゃんは酒に弱いわけ？」

「みたいですね、そついや酒と言えば嫌な思い出が……」

「ん？ 何かあったのか？」

「はい、確かあればレイフォンが天剣を授かった事を記念するパーティーでのことでした……」

言いつつカズマが遠い目をする。

「当時レイフォンは十になったばかりでしたが女王陛下がふざけてレイフォンに酒を飲ませたんです……そつしたら」

「そつしたら？」

「そつしたら、宮殿が吹き飛びかけました、リントンスさんが鋼糸で威力をころさなかつたら宮殿は無くなってましたね」

「……………は？」

呆然としたシャーニッドを置いてカズマは話を続けた。

「レイフォンの奴、酒を呑んで酔うと暴走するみたいなんですよね、剋量も倍以上になるし、まさに化け物でしたよ。陛下並の剋量でし

たね、そのときは衝動を全身から放つただけでしたけど……以来陛下が面白がって飲ませたりしたらしくて、他にもいろいろあったみたいですね」

話を聞き終えたシャーニッドは呆然としていたがはっ！と気付いてレイフォンを見た。

するとそこには……

「リーリン、毎日君の朝ごはんが食べたいな」

リーリン達を口説いているレイフォンがいた。

「……………」

信じられない光景に呆然とする二人……

「ふふっ」

「……………」

さらにフェリまで笑っているのを見てさらに二人は戦慄した。

「フェ、フェリちゃんが笑ってる……………」

「始めて見ました」

フェリの笑顔という超絶希少価値を持つ光景を見ていた二人だったが……

「……カズマ」

「げっ！レイ！」

後ろから絡んできたレイの対応に終われることになった……しかし

「ね、カズマ、

＝

酔っている為、要領を得ない会話となった。

そして10分後……

「そろそろ子供が欲しい……」

「待つ、待て！早まるな！よせレ

ギャアアアア！」

カズマはレイに連れていかれ……

「早く帰ろうか……そして……」

口説きモードに入ったレイフォンがリーリンやフェリ達を連れて店を出て行った。

そして、一人残ったシャーニッドは……

「……………今度から酒は自粛するか……………」

そう言って深くふか〜く、反省したらしく

その後シャーニッドはツエルニを卒業後、ツエルニを中心に学園都市の都市警察として未成年の飲酒撲滅に力を尽くすこととなる。その後その活動が評価され、学園都市連盟より雇われ世界一有名な都市警察として名前を残すこととなるが、シャーニッド本人はそんなことは露知らず、自責の念に駆られていた。

そして翌日 十七小隊はニーナ以外全員が体調不良で休むこととなった。

そんな中、学園都市対抗戦が始まるうとしていた。

お酒は二十歳になってから、でも二十歳でも呑んだらイケナイ人もいるんだよね

ご意見感想お待ちしております

都市対抗戦の前にレイフォン争奪戦！？（前書き）

お久しぶりです

## 都市対抗戦の前にレイフォン争奪戦!?

「…………えっと」

何だ…………この気まずい雰囲気は…………この俺が動けない…………だと!

ふ、ふふ、やるじゃないかレイフォン、所詮 俺は奪われる側だったというわけ…………か、しかし間違えるなよ、第二、第三の俺が必ず…………っ!

と、突然中二設定に入ってたカズマ・ミヤモトだぜ!え?それもうあきた? そうですか、しかしそういう訳には…………辞める訳にはいかなのだよ…………

ちよっ、そこの君、そこそこに座りんさい…………ん?どうしてって?…………はよせなもたんばい…………

「そう…………あれは三日前のことじゃった…………」

以下、カズマの回想

「えっ?映画?」

「そうよ、ほら 最近デイ・マスケインの主演映画が流れてきたじゃない、それを見に行くのよ」

「映画…………かあ…………」

気乗りしない様子で呟いたのはレイフォン・アルセイフ、十七小隊

のルーキーだ、

「何よ、何か不満でもあるの?」

そう尋ねているのはリーリン・マーフェス レイフォンの幼なじみだ。

「いや………不満って訳じゃないけど、その日は一日寝たいと思ってたから……」

「何よ、情けないわね、そのくらい気合いでなんとかしなさい!何をしたらそんなに疲れるの?」

「いや………武芸だけど」

「レイフォン!貴方がそれくらいで疲れる訳がないでしょ」

「いや、それが聞いてよりーリン、実はカズマが最近武芸の訓練に僕を巻き込むようになって………それに機関掃除もあるしからあまり眠れなかったんだよ」

それを聞くとリーリンは呆れたような溜め息を漏らした。

「カズマ………そこまで追い詰められてるの?」

「うん………実際レイさんの訓練は凄いよ………多分リテンスさんに稽古をつけて貰った時の数倍は疲れたから………」

そう言うとレイフォンは遠い目をした。

それをリーリンはしばらく呆れたように眺めていたが……

「とにかく！今週の土曜の昼に映画を見に行くから予定を空けておくように！いいわね？」

「分かったよ……」

結局、レイフォンはリーリンからのデートの誘いを承諾したのだ。た。

## カズマSIDE

さて、普通はこれくらいならただデートの約束をしただけで何も問題にはならなかったであろう……しかし相手はレイフォン！このくらいで済む筈がなかったのじゃよ……（遠い目）

さてそれでは事件発生についてじゃが……

## SIDE OUT

「レイフォン、お前は今週の週末は空いているか？」

きっかけは些細な事だった。よくあり二ーナの隊員への問い掛け……しかしこの問い掛けこそが……先の事件の始まりであった。

「えーと…………… あ！すいません隊長、日曜日はちょっと予定が……………」

「何だ、レイフォンお前さんが何か予定があるなんて珍しいな」

「シャーニッド先輩…………… 僕だって予定の一つや二つくらいありますよ……………」

「分かった、確かカズマも予定があると言っていたな？」

「ええ、レイの奴が五月蠅くてですね」

溜め息を付きながら言うカズマ

「ふむ、レイフォンにカズマも駄目か…………… となると週末は訓練は休みにするか……………」

「！？おい、ニーナ！それってマジか？」

「ああ、たまには体を休ませるのもいいだろう」

「よっしゃ！そんなじゃ週末は遊ばせて貰うとするかな」

「いや、先輩は訓練があっても遊んでるじゃないですか……………」

「何を言ってるんだレイフォン！ニーナも言ってるだろうが、体を休ませるのも大事なんだぜ」

「遊ぶのとは違うと思いますけど……………」

「んな、固いこと言うなって、そついやレイフォン、お前日曜は何があるんだ？」

「あ、はい 確かリーリンと映画を見に行く予定ですけど……」

「「「！！？？」」」

この一言に隊員の女性陣（フェリとニーナ、クラリーベル）が著しい反応を見せた。

「おお！？それってデートか？」

「まさか、違いますよ、ただ映画を見に行かないかって言われただけ」

「それがデートというんだがな」

「そうなの？でも幼なじみだし一緒に出かけるくらいしょっちゅうあるし……そんな気はしないんですけどね」

「ふーん、まあいいさレイフォン、いろいろと頑張れよ、いろいろとな」

そう言うとシャーニッドは手をひらひら振りながら更衣室に消えた。

「それじゃ俺もお先……ぐえ」

「今から貴方は特訓です」

「くそっ！放せレイ！もうそこに縛られ続けるのは嫌だ！」

「……無駄です、いきますよ」

「レイフォンンン！」

SIDEカズマ

とここで俺の意識は途絶えたのじゃが……

あさって、つまり先ほどの状況になってしまったわけじゃが……

ここから先はレイフォンに語って貰うかの……

では最後に………すいませんでした。

SIDEレイフォン

「えーと………フェリ先輩？」

「何ですか？」

「どっしょにっつちに？」

「少しクラリーベルさんと話すことがあるんです」

「クララと？珍しいですね」

「悪いですか？」

「いえ、悪くはないですけど……」

いつもと違い微妙に言葉に刺があるフェリに戸惑うレイフォン、まさか自分の先ほどの発言がフェリの不機嫌の原因とは考えつかないようだった。

「ただいま」

「お帰り、さっさとシャワー浴びてきて」

「分かったよ、それじゃあ先輩、失礼します」

そう言ってレイフォンがシャワーを浴びに行くと同時に乙女による会議が始まった。

## カズマSIDE

こうして始めの状況に至るわけじゃが理由は簡単、あの時の酒を飲んだレイフォンを見て以来ますます恋の罅ぜり合いは激しくなっ

いたんだが……ついにリーリンが動いたわけだ……

まだまだ続くぜ……

学園都市対抗戦……開始！って、レイフオン争奪戦も開始？（前書き）

遅くなりました、短いですが一応終了です前々話と前話とセットと  
考えて下さい。

学園都市対抗戦……開始！つて、レイフォン争奪戦も開始？

あれから数日……レイフォン含め小隊メンバーが回復して、間に都市対抗戦本番を想定した避難訓練を挟みつつも、いつもと同じ日常が戻ってきた時にそれは始まった。

「上手にエスコートするのが一流の紳士だそうですね」

「……………何ですかそれ？」

空中で気が抜ける会話を交わす二人、フェリとレイフォンだ。

フェリを抱えて飛ぶなりそんなことを言われたレイフォンは倒れそうになりながらも、なんとか着地して屋根を蹴った。

「あの……いきなり何ですか？それ？」

「別に、ただ言ってみただけです、それより急ぎますよフォンフォン」

そう言われた瞬間、本当にレイフォンは着地に失敗した

「何ですか！？その珍獣みたいな呼び方！？」

「何ですかとは失礼ですね、昨日考えたあなたの新しい呼び方です」

「いえ！？呼び方なのはわかってますけど、何故そんな呼び方になったんですか！？」

「いいじゃないですか、フォンフォン、お菓子食べます?」  
完全にペット扱いだった

「あー、どうして急にそんな呼び方を?」

「気分です」

「……………そうですか」

諦めたように返事をするレイフォン、しかしフェリが急にそんな呼び方をしたのには勿論理由がある。

それに関しては前回の話しの続きに遡ることになる。

SIDE フェリ&クラリーベル

「どうしますか?」

部屋に入るなりまずクラリーベルがフェリに問い掛ける。 対してフェリはベッドに腰掛けると考え込んでしまった。

「私としてはさりげなくリーリンさんに確認をとるべきだと思うの

ですが？」

フェリが答えないため、さらにクラリーベルが問い掛ける。

「そうですね……それは辞めましょう」

「何故です？」

日曜日のレイフォンとの約束についてリーリンを問い詰める気だったクラリーベルは氣勢を削がれてしまい、フェリに尋ね返した。

「おそらく、レイフォンがいったことは事実でしょうから問い詰めても、再確認するだけです」

「むむ……でも何もしないで見ているというのも性に合いませんね」

「しかし、これはまだ何とかあります」

「と、いつと？」

何もするべきでないと言われ煩悶していたクラリーベルだったがフェリの一言を聞くと一気に食いついた。

「リーリンさんは私達に黙ってレイフォンと映画に行くつもりだったのですからたまたま偶然、私達と映画館で出くわしても仕方ないとは思いませんか？」

フェリは淡々としかしさらっと腹黒いことを口にした。

「成る程……それなら」

「ではそういうことでよろしいですか？」

フェリが確認してくる。

「わかりました、それで行きましょう」

そしてクラリーベルも同意した。

S I D E O U T

そして当日、リーリンとレイフォンは連れ立って映画館に向かったのだが、たまたま、偶然来ていたクラリーベルとフェリに出くわし、さらにレイに事情も知らず引っ張られて来たカズマを交えてのシーンが生み出されることとなった。

その後、乙女達の間では不可侵条約が結ばれ、レイフォンをレイフォンを巡っての恋の鞘当てがますますヒートアップすることとなり、冒頭のフェリの行動に繋がったりした。

余談だが、カズマはリーリンから八つ当たりを受けたうえに冒頭の修羅場の空気にあてられて胃潰瘍となり三日程入院する嵌めとなった。

ちなみにレイフォンはメイシェンから弁当を貰うようになったりと確実にフラグを回収していた。

カズマの災難&レイトン争奪戦

）END（

学園都市対抗戦……開始！つて、レイフォン争奪戦も開始？（後書き）

そろそろ、バトルパートに入ろうと思います。

では簡単に次回予告でも

都市対抗戦開始！レイフォンにカズマ、クラリーベルにレイといった超絶実力者がそろうつエルニの圧勝かと思いきや、仮面の男や狼面衆が立ちふさがる！そしてなぜか天剣すら現れて……カズマやレイフォンは勝てるのか！？

次回、狼面衆とイグナシスさんは無関係！

熱闘、激闘、恋愛パワーでおくる次回は水曜更新の予定です。

対戦相手は……超大型都市!?(前書き)

ま、間に合ったか?

対戦相手は……超大型都市!?

「都市が見えたぞー!」

内力系活剽で視力を強化していたらしい武芸者の叫びが聞こえた。

都市対抗戦開始の布告が出て三日目、ツエルニは最初の戦いを迎えるようとしていた。

「あ〜〜だるい、さっさとフラッグを折って終わらせたいな」

「それは駄目だよカズマ……」

「そうですね、まあいい鍛練の相手だと思っしかないですね」

「しゃべってないで、三人とも早く集合場所に行くぞ」

緊張感のない三人に二ーナが集合場所に行くよう促していると……

「隊長、武芸科長が呼んでいます、第十七小隊は生徒会棟に来るようとのことですよ」

フェリから連絡が入った

「何でしょうね?」

「……わからん、とにかく呼ばれたのなら行くしかあるまい、フェリ! シャーニッドとレイにも連絡を頼む!」

「了解です」

そう告げると端子は飛び去っていった。

「よし、それじゃあ急ぐぞ」

カズマ達四人は活剗を使った高速移動を開始した

「よく来てくれたね、とりあえずみんな座ってくれたまえ」

四人は生徒会棟に着くなり、生徒会の役員に案内されてカリアンの元に連れていかれた、既にシャーニッドにフェリにレイと残りのメンバーは揃っており、カズマ達が席に着くとさっそくカリアンが話し始めた。

「急に呼び立ててすまなかつたね、それというのも、相手の都市を調べてみたんだが厄介なことがわかってね」

カリアンが苦々しげな顔をして告げる、どうやら厄介な相手のよう

だ。

「相手はどこなんです?」

カリアンが黙ってしまったので二ーナが先を促す

「相手は学園都市 レイルード 今まで敗北のない学園都市でも最強クラスの都市だよ、別名王都レイルード 学園都市の王の称号をつけるならここだろう、生徒数はうちの二倍、武者の数に至っては三倍だよ」

それを聞いて二ーナやシャーニッドは声も出ないらしくア然とした様子が伝わってきた。

また滅多に表情を動かさないフェリでさえ眉を動かしていたが……

「うわゝまじかよ……だるいなあ」

「確かに厄介かもね」

「私としては敵が手ごわいのは歓迎ですね」

「腕がなりますね」

こちらの四人はまったく動じていなかった。カズマ、レイフォン、クラリーベル、レイの順に感想を漏らしたが緊張感のカケラも感じられなかった。

「まったく……頼もしい限りだね……」

「まったくだ」

それを見たカリアンとシャーニッドが苦笑いをした。

「それで？俺らを呼んだのなら何か相談があるんだろ？」

カズマが再び話しを始めるよう促す。

「ああ、その通りだよ　ヴァンゼとも話し合ったんだが、向こうの技量は高い上に数でもこちらは劣勢だ、そこで君達から二人程抜いて都市の接点を抑える役目に回しておくことになってね、君達の誰がやるのか決めて貰おうと思って呼んだんだよ」

「ふむ……つまり抑え役ですか……嫌ですね」

「俺もパ」では私とカズマが引き受けましょう」

「レイ！？」

カズマが辞退しようとする、それを遮ってレイがカズマを巻きこんで名乗りをあげた。

「ちょっと待て、俺はやるなんて一言も」では二人に任せよう」

「カリアンンンン！」

抗議の声を挙げたカズマだったが、カリアンによってそれは阻まれってしまった。

「よし、では話しは以上だ、ニーナ君　残りの詳しい部分はヴァン



サイレンの音と共に武芸大会が始まった。

「やれやれ、やはりこちらが不利ですか」

開始わずか5分でツエルニは早くも相手の数に吞まれようとしていた。

「まあ、技量は互角のようですね」

レイが見る限り技量は互角だが数が違いすぎた、一人を抑える間に二人目が来る状況で、ツエルニは既に後退し始めていた。

「……そろそろ行かないとマズイですね、カズマは左を（ボカッ）私は右の敵を蹴散らします」

「ぐふっ！はっ！」

殴られて正気に戻ったカズマと共にレイが動き出す。

「テメエらのせいで俺の平和が………！」

外力系衝剄の変化 破山

完全に八つ当たりなカズマの技はレイルードの武芸者を吹き飛ばした。

「うわぁー！」

「な、何だ？」

「敵だー！」

「いったい何処から」

敵が混乱したところへ更にレイの追い撃ちが決まる。

外力系衝剄が変化 鎌鼬

超スピードで動いたレイから風の刃が放たれて敵の武者をさらに吹き飛ばす。

たった二撃で敵は完全に浮足だっていた。

「な、何だってんだ」

「おい！あれを見る」

そして彼らが見たのは……

「ヒヤッハー！ちょうどいいストレス解消相手にあつたなー！生まれてきたことを後悔させてやるぜえええええ！」

完全に八つ当たりで所構わず技を放ちまくるカズマと

「……………」

無言で技を放つレイの姿だった。

「な、何だよあいつら!?!」

「い、いかれてやがる!」

「か、勝てる訳がねえ」

それを見たレイルードの武芸者は完全に戦意を喪失し、

「いいぞー、やれー」

「行けー!ミヤモト夫妻」

「ヒヤッハー!最強夫婦のお通りだぜえええ!」

ツエルニの武芸者に士気は最高潮に達しようとしていた。

「敵は怯んだぞ!かかれー!」

「」「」うおおおっ!」「」「」

そこにヴァンゼの号令がかかりツエルニは数を物ともせず反撃を開始した。

S i d e レイフォン

「隊長！ここは僕が引き受けます！行ってください！」

「ぐっ、しかし……」

「僕なら大丈夫です！それより早く旗を！」

「ニーナ、レイフォンに任せて行くぞ」

「………わかった、気をつけるよレイフォン」

「………判りました」

「話しは終わったかさ？」

「ああ、もう済んだよ」

「なら………いかせてもらおうさ」

「っ……」

そう言うと相手の姿が消えた。

同時に左右、そして正面から、攻撃的な気配のみがレイフォンに迫る。

内力系活剽の変化、 疾影だ。

「っな！」

驚きながら、レイフォンは右の気配に刀を振るった。 金属同士のぶつかる澄んだ音と、重い衝撃が腕を打つ。

いきなり予想外の技をつけたレイフォンは、完全には受け止めきれずに後方に飛ばされた。

「さすが、読まれる」

赤髪の少年が楽しそうに声をかけてくる。

そのまま連続で襲ってくる刀を、レイフォンは剣で弾き返す。互いに鏝ぜり合いながら、レイフォンと少年は何合も武器をぶつけ合う。

(……………思ったよりやる、一撃一撃が重いな)

レイフォンが敵の少年の腕に舌を巻いていると

「はっ！」

「っ！」

下段からの斬撃。レイフォンの体が上空に飛ばされる。

上昇の限界点に辿り着いて、勢いがようやく死んだ。

空中で、レイフォンは現在地を確認する。場所は、まだ都市郊外。戦いながらレイルドの外周をなぞるように移動したようだ、周りからいくつか気配が迫ってきている。

(ならば)

体内に走る活剱の密度を上げる。

下から追撃してくる少年に、レイフォンは剣を振り下ろした。

外力系衝剱の変化　　渦剱。

剱弾を含んだ大気の渦が少年を飲み込む。

しかし、少年の刀が素早く閃き、大気の流れに沿って飛び交う剱弾を破壊していく。

爆発が連続で轟く中、レイフォンは衝剱の反動を利用してその中に飛び込んだ。

「甘いさっ…!」

爆発を潜り抜けた少年が、レイフォンの一撃を受け止める。

剱がぶつかり合い弾けた。

「ヴォルフシュティン……この程度かさ?」

囁くようにそう言われた。

同時に剣に違和感が走る。

「ちっ！」

内力系活剄の変化 疾影

少年を蹴飛ばして高速移動すると同時に、気配を凝縮させた剄を分散して飛ばす。

一気に距離をとったレイフォンは右手の刀を確かめた。

剄の走りが僅かに鈍い。

見れば、刀身に少しひびが入っていた。

外力系衝剄の変化、触壊

武器破壊だ。

咄嗟に剄を放って対抗したのだが、少し遅れたためやられてしまった。

（これは厳しい……か）

僅かだがうまく剄が走らない。

「本気？ ……でやってるわけないよな。まさか、元とはいえ天劍授受者がこんなもんで済むはずがないさ。」

囿の気配には惑わされなかったようだ。

「……………グレンダンの武芸者か？」

相手の少年をレイフォンは見た。

少年がバンダナをとる。

「おれっちの名前は……………ハイア・サリンバン・ライアさ。」

その少年の顔には刺青が刻まれていた。

「……………サリンバン教導傭兵団！」

レイフォンが驚きの声を挙げた。

対戦相手は……超大型都市!?(後書き)

ご意見感想お待ちしております。

待ち受けるは……サリンバン傭兵団からの刺客！（前書き）

戦闘シーンが……

待ち受けるは……サリンバン傭兵団からの刺客！

「クララ！正面は任せたぞ！シャーニッドは私の援護だ！一気にいくぞ！」

「判りました、後ろは任せて下さい」

そう言うとクラリーベルは正面から向かってきた相手に向かって、技を放った。

外力系衝剄の化鍊変化、舞散花

クラリーベルの鍊金鋼から大量の小さな紅い光が放たれた。

それはまさに風に舞う花びらのように相手に向かってと突然爆発した。

爆発が収まると、そこには倒れ付した武芸者の姿しかなかった。

「うーん、やっぱりこんなものですか……っ!？」

倒した敵を眺めているといきなり攻撃を受けた。

「これは……弓ですか!？」

転がりながらもクラリーベルは相手の武器を正しく見分けた。

外力系衝剄の変化、梓弓

クラリーベルを襲っている技の正体だ、弓はあまり連射はできず予備動作は大きいが銃と違い撃つ時も殺剄を維持できるというメリツトがある。

それなのにクラリーベルが見破れたのは祖父であるティグリスが弓使いであったからだ。

「これは厄介ですね」

さらに弓の特性はもうひとつある、それは 曲射である。

銃であれば真っ直ぐ、直線にしか攻撃出来ないが、弓は曲げて撃つことが可能なので障害物の影や壁の向こうなどから越えて攻撃できるのだ。

「これはマズイですね……………来る！」

クラリーベルが辺りの気配を窺っていると壁の向こうから攻撃的な気配がした。

外力系衝剄の変化、流星群

弓の曲射を用いた大規模な技で、殺剄が維持できなく成る程の膨大な剄を必要とする、それらは技の名前通り、無数の矢となってクラリーベルに襲い掛かった。

「っ！避けられない！それなら」

外力系衝剄の化鍊変化、透空盾

クラリーベルの真上で大気が凝縮して盾を形作る

「……………っ！」

見事に防いだクラリーベルに相手が驚く、それをクラリーベルは見逃さなかった。

殺到が甘くなっている相手の位置を確認すると技を放った。

「先生、技をお借りします」

外力系衝剄の化鍊変化、陽光球

天剣授受者、トロイアットの技だ、彼は気分で技名を変えるので正確な名前は知らないが

小規模な小型太陽を創りだし、その光を大気を圧縮したレンズで目標に当て炎上させる技だ。

ただし人間相手なので周りを燃やすに止める、すると相手が煙に巻かれながら飛び出してきた。

「かかりましたね」

「……………っ！」

すかさず距離を詰めて当て身を喰らわせる、接近戦は苦手なようで、あっさりと相手は倒れた。

「まあまあでしたね」

相手をよく見ると女性だった、まあだからといって何も思わないが

「次に行きますか」

相手の女性 ミュンファ・ルフアを倒したクラリーベルは次の相手を求めて跳んだ。

S i d e レイフォン

「そうさ、三代目さ」

刺青が入っていない顔の右半分が挑戦的に笑っていた。

サリンバン教導傭兵団。グレンダン出身の武者者によって構成された傭兵団だ。専用の放浪バスで都市間を移動する彼らは、行く先々の都市で雇われて汚染獣と戦い、また都市同士の戦争に参加する。時にはその都市の武者者達を鍛える役割も担う。天剣授受者はあくまでも都市の中でのものだ。その力は外には流れていかない。対外的に槍殻都市グレンダンの名をもっとも有名にしたのが、このサリンバン教導傭兵団だ。

「まさかレイルードにいれとは思わなかった」

「それはあんと戦つたためさ」

「……………何故？」

「俺っちの師匠はリュホウ・ガジユ、っていうんだけどさ」

「それは……………」

レイフォンにはその名前に聞き覚えがあった。

「確か……………養父さんと同じサイハーデンの……………」

「そうさ、つまり俺とあんたは同じ部門の弟子ってわけさ」

「だけど何故？」

「同じサイハーデン、その片方の弟子から天剣授受者が出たと聞いて親父が随分気にしてたから前から気にはしていたさ、でもグレンドンに戻る予定なんてなかったんで諦めてただけど……………あんたがツェルニに居ると聞いて近くのこの都市で待ち構えてたってわけさ」

「……………つまりどちらが強いか比べてみたかったと？」

「端的に言えばそうさ、という訳で……………そろそろ行かせて貰うさ」

「…」

目の前に現れたハイアの斬撃を跳躍してかわす。

「こんな機会めつたにないから一気に行かせて貰うさ！」

猛然と襲い掛かるハイアの刀を受けないように、かわしながらレイフォンはどうするか考えていた

(……刀は持たないそれなら)

「はあっ！」

レイフォンは襲い掛かって来たハイアの目の前で刀を折る。

「……なにつ！」

自ら武器を破壊したレイフォンにハイアが驚愕して動きを止めた。

そこにさらに攻撃を加える。

「かああっ！」

内力系活剽の変化、戦声

威嚇術だ。空気を振動させる剽のこもった大声が大気を突き動かし、宙に散る錬金鋼のカケラをハイアに飛ばした。

「ぬあっ！」

不意打ちにハイアがのけ反る。

その隙にレイフォンは距離を詰めて拳打を叩き込む。

ぎりぎり防がれたが、ハイアはそのまま倒れた。

「な、何をしたさ？」

「透し剷だよ」

「透し剷？馬鹿なあれは……」

言葉を吐き出す前にハイアは気絶した。

レイフォンがハイアに勝利した技は

外力系衝剷の変化 浸透針

文字通り獄小の針を相手の体の内部に打ち込む技で封心突の手技バ  
ージョンのようなものだ。

「……………疲れた」

久しぶりにカズマ以外の強敵を相手にしたレイフォンは思わず座り  
こんだ

**都市戦終結！（前書き）**

短いですが投稿です。

## 都市戦終結！

「くたばれやああああ！」

「うわああああ！」

外力系衝剽の変化 大津浪

もはや八つ当たりもここまでくれば一方的な殺戮現場と化していた。

「だ、誰か！あいつをとめろおお！」

「む、無理だ止まらねえ！」

「なんだってんだあいつはよおお！」

「貴様らのせいで……っ！ 死ねやぼけえ！」

身に覚えのない八つ当たりを受けるレイルードの武者達は今もはや全滅に等しい状態だった。事前情報で600人は居たはずの武者の内、500人近くがここに現れ、カズマに粉碎されていた。

「フハハッ！粉碎、玉砕、大喝采！行けえ！」

外力系衝剽の変化 爆裂疾風弾

「何だよ、あの某社長は！」

「あんなの在りかよ！」

「つて！来たあああ！」

「「「どわあああ！」「」」

そんなレイルドの武者達を眺める者がいた。

「ふむ、今ので百人はいったようだね」

カリアンだ。

「そろそろ、ニーナ君達が旗を奪う頃だが……」

戦場ではない場所にいるカリアンは念威操者が送ってくる映像を冷静に眺めていた。

ちなみに、ヴァンゼ達はカズマがあまりに暴れ廻るために進めずいた。

S i d e  
ニーナ

「もう少しだ！」

ニーナが今走っているのは生徒会棟の屋根の上だ

「行かせるか！」

目の前から武芸者が二人迫ってくる。

「どけえ！」

ニーナは都市に侵入してから練り続けていた剄を解放した。

外力系剄の変化 雷迅

「ぐわああ！」

ニーナの技は二人を吹き飛ばすことに成功した。

しかし、

「ぐっ、体が重い」

初めて一気に剄を解放したニーナは体にだるさを感じていた。

「くそっ、ここまで来て！」

「待てえ！」

「ここだ！」

「行かせん！」

そこにさらに武芸者が三人現れた。かなり周囲には重点的に配置されていたようだ。

「ここまでか……」

皆から背中を押されてここまで来た。それがこんな所で？

しかし次の瞬間！

「……がっはあああ！」「……」

迫っていた三人が吹き飛んで、フラッグが落ちてきた。

「……何が？」

疑問に思いながらもニーナはしっかりとフラッグを掴んだ。

サイレンが鳴り響き、ここに都市戦闘の終了を知らせた。

「ふう、なんとか間に合ったようだな」

「ええ、」

「よかったです」

「ですね」

最後にニーナを援護したのはこの四人だ。

シャーニッドがフラッグを

レイフォンとクラリーベル、レイが武芸者を倒したのだ。

「ま、勝ててなによりだ さっさと戻るうぜ、」

「ですね」

こうして初戦はツェルニの勝利に終わったのだった。

祝賀会そしてカズマは真理に気付く！（前書き）

テスト中なのに更新です

……数学オワタ（＾Ｏ＾）／

祝賀会そしてカズマは真理に気付く！

「初戦は私達の勝利だ！皆、今日はご苦労だったな」

ニーナが労いの言葉をかける。

「おいニーナ、堅苦しいこと言っていないで騒ごうぜ！今日は楽しまなきゃ負けだ！」

シャーニッドがそれに割り込んで先を促す。

「そうだな……それじゃあツエルニの勝利を祝って」

「乾杯！！」

ニーナの音頭に合わせて全員がグラスを合わせる

「よし！今日は朝まで騒ぐぜ！」

「おー！！」

「よし！じゃあカラオケ誰から行く？」

「はい！一番ミフィ！歌いまーす！」

「イエイー！！」

それを合図に一斉に皆が騒ぎ出す。

今ツエルニでは同じ光景があちこちで繰り広げられていた。

最強の学園都市レイルード

無敗を誇る都市を倒したことでツエルニのテンションは嫌でも高い。

何せ一昨年の惨敗が嘘のような大勝、しかも最強の都市を破ったのである、残りも楽勝と考えて皆が騒ぐのも無理はない。

何より上級生にとっては無事卒業できるかが掛かっていたので喜びも一塩のようだ。

今、ツエルニはお祭り騒ぎで静かなところは何処にもなかった。

未成年の飲酒など、咎められる所もあったが、取り締まるべき都市警が一緒に騒いでいたので何もなかった。

「レイフォン、飲め」

「……………どうしたのカズマ？」

そんな中カズマはレイフォンに絡んで愚痴をこぼしていた。

「いいか？大体俺は……………前略……………なのにどうしこうなる!？」

酒を飲みながら愚痴をこぼすカズマ、周りが明るく騒ぐ中、カズマの周りには暗いオーラが漂っていた。

しかし、レイフォンを恋する乙女達が放っておくはずがなく。

「ま、まあカズマ、元気出しなよ、いいことだって!?!」

苦笑いしながらカズマを宥めていたレイフォンだったが突然襟を掴まれて引きずられた。

「……………」

「フェリ先輩?」

レイフォンが振り返ると、そこには無言でレイフォンを引っ張るフェリの姿があった。

「一体どうし…………!?!」

引きずられながらレイフォンが尋ねると今度は両腕を掴まれた。

「…………リーリン」

そちらを見れば幼なじみが、

左を見ると

「……………クララ?」

クラリーベルの姿があった。

「えーと、……………三人共何?」

「「「……………」」」

問い掛けると無言の視線が返ってきた。

駄目だ、怖い

「と、とにかく放してくれないか……………な？」

説得を試みるものの、今度は両足を掴まれた。

視線を向けるとそこにはニーナとメイシエンの姿があった。

「二人まで！？一体どうしたの！？」

レイフォンが驚いて叫ぶがそれも無理はない。

何せ普段は大人しく、引っ込み思案なメイシエンが足を掴むなど考えられないし。

ニーナがこのようなことをするとは考えがたい。

（原因は？）

それに違和感を覚えたレイフォンは元凶を探して視線を巡らせた、すると……………

（あれは？）

怪しげな液体を見つけた

側ではシャーニッドとセリナが話している。

（確か隊長の寮の……）

そこで、ニーナが語った彼女についての言葉を思い出す。

「セリナさんは……いい人なんだが……怪しげな薬を作っては実験したりする人なんだ、全くあれさえなければ」

ニーナの嘆きが聞こえてくるようだった。

（……まさか！）

彼女が薬を？ 思っで見つめると手を振られた。

彼女が犯人で間違いないだろう。

（何の薬だろう？）

問題はどんな薬で効果がいつまで続くのかである

何とかしないと……っ！

「痛い、痛い！」

いつの間にか五人から引っ張られていた。

「ちょっと！本当に止めてよ！」

叫ぶが効果はなく、むしろ引っ張る力が強くなった。

(く、首が……)

フェリが首を引っ張るため呼吸ができない。

女の子に奪い合われるという幸せ？な状況にありながらレイフォンは気絶した。

ちなみに……彼女らが飲んだのは真実薬。

セリナ曰く「自分の正直な本当の気持ちを全面的に引き出す薬だよ

」

だそうだが……

レイフォンにとっては恐ろしい薬であった。

カズマSIDE

「フェリ先輩？」

何やらレイフォンが引きずられていった。

何だか今日は記憶がはつきりしないな、

……物凄く不満を感じるんだが

まあいいか、俺は気分を切り替えて酒場を出た。

「ちょっとやめ……」

出る時にレイフォンの悲鳴が聞こえたがスルーした。

リア充爆し（ry

「あーだりい」

俺は酒場から持ち出した酒を飲みながら外縁部で月を見ていた。

え？何でそんな所にいるのかだって？

……男には気取りたい時があるのさ。

そんなことはさておき、俺はこれからのことを考えて憂鬱になっていた。

「……自由を求めて学園都市に来たのにな」

実際、悪いことばかりではない、レイフォンには会えたし、学園生

活は新鮮で楽しい、だが……

「きついよな……」

リーリンの地獄の勉強、レイによる鍛練、  
機関掃除、レイによる  
e t c )

「あれ？殆どレイじゃねえ？」

そうだ、あいつが来るまで平和だったのだ。

結婚、それにより人生を奪われ、訓練、青春を奪われた。

つまり……

「レイを何とかすればいいのか!？」

目から鱗が落ちた気分だった。

レイはカズマがいたからここに来たのであって、既に留まる理由はカズマ以外ないと言える。

「俺は……自由を取り戻せる!？」

思えばカズマは酔っていたのだろう。

故にそんな事を考えられた。しかしカズマは気付かない、自分が

レイフォン並のジゴロ持ちであり、尚且つレイはまだ大人しいほうだということに

「ツツシャアアア！」

しかしそんな事は知らずにカズマは真理を得たと思い雄叫びをあげていた

「……………ここがツエルニ」

そして三日後に波乱が訪れる。

祝賀会そしてカズマは真理に気付く！（後書き）

さて、またまたオリキャラですが……男と女どちらが良いですか？

カズマの幼なじみでヤマトの出身です。

ちなみに要望がない限りオリキャラは敵を除けばラストです。

何もなければ女になるかなあ……

感想待ってます。

……再びの再開！平和な時間は波乱を迎える（前書き）

オリキャラ登場です、どうぞ

……再びの再開！平和な時間は波乱を迎える

それは、爽やかな朝だった。

ツエルニの勝利を祝った祝賀会が終わり、生徒会がその記念として授業を休みにしたためさらに休み、レイによる鍛練もない、素晴らしく晴れた空が広がり、外には爽やかな風が吹き、木々が葉を揺らして優しい音を奏でる、その木漏れ日が顔を照らしてカズマは目を覚ました。

「久しぶりだ、こんな朝は」

レイに起こされず、8時間という小学生並の睡眠時間をとることに成功したカズマは猛烈に感動していた。

「何かいいことがありそうだ」

そう呟くとカズマは着替えて部屋を出た。

昼休み カズマはレイフォン達と昼食を食べていた、未だに勝利の余韻が残っており、いろいろな店がバーゲンを行っており昼食はかなりたくさん食べることが出来た。

「……いい日だな」

午後 たいした波乱もなく一日が過ぎた。

「……………平和だ」

そしてついに放課後、カズマはレイフォンと練武館に向かっていた。

「……………でき、今日は凄く平和でき、もう一生分の幸運を使い果たした気分だな」

「カズマ、それは大袈裟じゃない？」

「何を言ってるんだレイフォン！3時間以上眠れ、勉強もなく、衝動の嵐にも会わず、こうして平和に一日が過ぎてるんだぞ！」

「わ、わかったから落ち着いてよカズマ！というかいつもそんな目に合ってるの!？」

あまりのカズマの境遇の酷さにレイフォンが同情していると

「カズマさん、兄が呼んでますよ」

いつの間にかフェリの念威端子が来て話しかけてきた。

「わかりました、わざわざすみません、フェリ先輩 お礼にレイフォンをどうぞ」

「どうも、それと兄は宿泊施設に来て欲しいと」

「ちよっ!?!二人と」判りました、それじゃあ」

レイフォンの言葉を遮って返事をする。カズマは外縁部に向かった。

「それではフォンフォンとりあえずは買い物に行きましょう」

「ちよつとフェリ先輩！？カズマの言葉を本気にしないで下さいよ！？」

後にはいつの間にか現れたフェリ引きずられたレイフォンの姿が残った。

「カズマの人で無し〜！」

レイフォンの悲鳴が虚しく響いた。

宿泊施設に着いたカズマは早速カリアンに話しかけた。

「いきなり呼び出して何だ？」

いろいろ合ったため、カズマのカリアンに対する感情は非常によりしくない、それをわかっているのかカリアンは余計なことを言わずに本題に入った。

「やあ、よく来てくれたねカズマ君、今日はちよつと君に会って欲しい人が居てね」

「会って欲しい人？」

「そうだよ、入ってくれたまえ」

カリアンがそう言うのと後ろのドアが開いて一人の女性が入って来た。

「久しぶりね、カズマ」

「な、なな、なななな」

カズマが壊れたラジオのように同じ音を繰り返す

「何故ここに来たのかって？それはカズマ、貴方が1番わかってるんじゃないの？」

相手の少女が言葉の先を読み取って喋りかけてくる。

それを聞くとカズマはとりあえず落ち着こうとした。懐からタバコを取り出し、火を付けようとしたところでやっと現実に戻った。

「何で、何でお前がここにいるんだ……」

そして、まるでお化けでも見るかのような視線をその少女に向ける。

「失礼ね、居ちや悪いっての？」

カズマがそう言うのと拗ねた様子で言葉を返してくる。

だがそれでも、それでもカズマは叫ばずにはいらなかった。

何故なら彼女は……幼なじみであり戦友であった彼女は……

「何で………どうして生きてるんだよサクラ！」

死んだ筈だから

そんなカズマの叫びを聞いた彼女、武田桜は微笑んだ。

……再びの再開！平和な時間は波乱を迎える（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

**感動の再会！そしてカズマ暁に死す！（前書き）**

来週投稿できないので連続です。

## 感動の再会！そしてカズマ暁に死す！

「それについては此処で話すには長くなるかな、とりあえず会長さん、ありがとうございました、おかげで楽にカズマに会えました」

そんなカズマ叫びを受けてなお、サクラは平然としていた。

「カズマ、貴方の疑問には答えてあげるけど、とりあえずお茶にするわよ」

「ああサクラ君、後で書類を取りに来てくれないかい？」

サクラがカズマを連れて出ようとするとカリアンがサクラに話しかけていた。

「判りました、それでは失礼します」

そう言ってサクラはカズマを連れて宿泊施設を出た。

「……………とりあえず、俺の部屋に來い」

宿泊施設を出たカズマはとりあえずサクラを自分の部屋に連れて行くことにした。

「いいけど……………何をする気？」

サクラが若干胸を押さえながら聞いてくる。

「何もしねえよ、つーか面倒臭いことになりそうだから、ふざけな  
いでさっさと話せ」

「つまんないわね」

「……お前の軽口も懐かしいな」

そうこうしている間に部屋に着いたのでカズマはサクラに話すよう  
促した。

「で？何故お前が生きてるんだ？」

改めてカズマが尋ねる。

「あの時、確かに私は腕を失って都市から落ちたわ、けど、あの時  
戦った場所を覚えてる？」

「確かに覚えてる、確かヤマトの保有するセルニウム鉱山の近くだ  
つたる？ちょうど補給しようとしてたんだっけか？」

「そうね、けど私が言いたいの都市のどこで戦ったかよ」

「ああ、確か外縁部と外の境目だったけ」

「そう、そこで私は腕を……」

「……………」

今でも覚えている。都市を襲った汚染獣は五体、雄性二期が四体

に老生三期、ヤマトではグレンダンのように名前をつけないが仮称  
ドルアー

この汚染獣は他の雄性三期の汚染獣達を操って襲ってきたのだが、  
ちょうどセルニウムを補充していて動けなかったヤマトは外縁部と  
外で迎え撃ったのであった。

その際、その老生体ドルアーは後ろで雄性体の指揮を取っていたが、  
一度都市に突っ込んで来たのだ、その際にサクラとカズマの二人が  
かりで止めたのだが、サクラはその際に右腕を斬られ、そのまま外  
に飛ばされたのだった

「あの時お前は汚染物質遮断スーツを一応着てはいたが、右腕を斬  
られた時に駄目になった筈、一体どうやって生き残ったんだ？」

カズマが真剣な目をして尋ねると、サクラはゆっくりと話し出した。

「確かにあの時私は外に飛ばされたけど、運よくスーツが綺麗に右  
腕の部分だけ破けててね、応急処置が間に合ったおかげで汚染物質  
にやられなかったのよ」

確かに戦闘衣にはスプレー式の応急処置用の物も用意してあった。  
スーツが破れたら5分と持たない為だ。

「それで？ヤマトには回収されなかった筈だろ？どこに拾われたん  
だ？」

「ええ、それで何とかなっただけで、斬られた時のあまりの出血  
量に気絶しちゃったのよ、目を覚ましたら誰もいないし、都市もな  
い、正直死んだと思っただわ」

「そこまで言うなら腕の出血も相当なもんだろ？どうなったんだ？」

「さあ、そのあとははっきりとは覚えてないけど、私は再生都市メデイアルに拾われたの」

「メデイアルに？」

「そう」

「だけどメデイアルは確かに側の都市だが何故？」

「それは場所がセルニウム鉱山だったからよ」

「??？ どういうことだ？」

「つまり、メデイアルがセルニウム鉱山に来たのよ」

「なに!？」

それが事実なら由々しき事態だ、しかし電子精霊は何をしていたのだろうか？

カズマの疑問に答えるようにサクラの話しは続いた。

「私も驚いたわ、けどおかげで再生治療も受けれたし僅かに入り込んでいた汚染物質を除去できたのよ、何故入りこんだのかはメデイアルの暴走ね、補給に向かう途中で汚染獣を避けているうちに離れ過ぎてしまって、我慢出来なくなってこっちの鉱山に来てしまったみたいね」

「飢えた都市の暴走か」

「以上！これで助かった私はヤマトに戻ったんだけどカズマが学園都市に向かったと聞いて追い掛けてきたのよ」

「成る程……納得がいった」

話しを聞いたカズマはやつと落ち着いたようだった。

「何よ、せつかく死んだと思っていた幼なじみに久しぶりに会えたんだから、もつと喜びなさいよ」

「ん？ああ悪い、まだ現実味が無くてな、それにしてもよく生きてたな」

カズマはそう言うとサクラの頭に手を置いてくしゃくしゃに撫でた。

「何よ……子供扱いして」

サクラは、拗ねたような顔をしながらもどこかうれしそうな顔をしていた。

「まあいいさ、再会を祝ってパーティー！といこうぜ」

「そうね、そうする？」

とまさに感動の再会が果たされた所で……

「……………」

レイが来た。

「おおレイ、早かったなどうした？」

カズマが気楽に声をかけるがレイは聞いてはいなかった。

「「貴女は誰？」」

サクラとレイの声が重なる。二人ともカズマを無視して睨み合っていた。

「貴女は？」

まずサクラから尋ねた。

「私か？私はレイ・ミヤモト、カズマの妻です」

「っ、っつ、妻あ！？」

それを聞いたサクラが狼狽した声を漏らす。

「それで貴女は？」

今度はレイが尋ねる。

「私？私はタケダ・サクラ、そこにいるカズマの幼なじみよ」

互いに火花を散らす二人

一方カズマは事態についていけずに呆然としていたが、

「カズマ？この娘は一体どういう事かなあ？」

二人の矛先が自分に向くにつれて慌てて弁解したのだが……

「落ち着け二人とも、別に何かあるわけじゃ……」

「問答無用！」

「……浮気は許さない！」

「ちよつと、まて……ギャアアアア！」

焼石に水だった。

外力系衝剄の変化 月払い

外力系衝剄の変化 風渦剄

二人の技を受けて吹き飛ばカズマ、その日カズマは二人の怒りが収まるまで逃げ続けたが、何発も良いのを貰った結果、次の朝日が昇ると同時に外縁部で果てた。

カズマ暁に死す！

ちなみにレيفونに助けられて病院で目を覚ましました。

サクラの実力！そしてカズマは闇に堕ちる！？（前書き）

今までで最長です、駄文ですがどうぞ

サクラの実力！そしてカズマは闇に堕ちる！？

サクラがやって来てから三日経った。

その間カズマは（病院の）ベッドに倒れていたが、いつの間にかサクラはすっかりツエルニに馴染んでいた。

「カズマ、私も十七小队に入ることにしたから」

「何！？」

なんとか回復したカズマが家に戻る途中、ばったりサクラと出会った所できなりそう告げられた

「何よ、そんなに驚かなくても良いじゃない」

「いや、そりゃ驚くだろ、武芸科長がよく許したな……」

「ああ、ヴァンゼとかいう人ね、確かにバランスが崩れるとか言ってたけど……ちょっとお話ししたら納得してくれたわよ」

「お話？OHANASI の間違いだろうがっ！」

そこまで言った所でカズマは慌ててしゃがんだ。すると先ほどまでカズマの頭があった場所を刀が通りすぎた。

「何かいいまして？」

「いえいえまさか、不肖このカズマ、サクラ様に失礼な事を言うな

ど、滅相もない」

「ならよろしい」

心にもない事を言っただけで生き延びたカズマはさらに話しを振る。

「そういえばサクラ、お前どこに住むんだ？」

「うーん、それが今考えてる所なのよ」

「そうか、まあ焦らずゆっくり決めるんだな」

「そうね、それより練武館に行くわよ」

「ああ、了解」

二人は練武館に向かった

「ーという訳で、サクラも十七小隊に入るつもりらしいんですけど……隊長は了承したんですか？」

「ああ、会長から話は聞いている　サクラ宜しく頼む」

「判りました　全力を尽くします」

「うん、頼んだぞ　それでサクラの入隊と同時に決まったことがあるんだが……それは後で言おう、　とりあえずカズマ　サクラと模擬戦を試してみてくれ」

「えー、俺ですか？　それよりレイフォンとかのほうがいいんじゃないんですか？」

いきなり戦うよう言われたカズマが愚痴を零す。

「そうは言っても、やはりお前とがサクラも一番やり慣れてるだろうからな」

「けど……」カズマ、行くわよ！」「ーうおっ！」

尚もカズマが食い下がろうとしたところにサクラが襲い掛かった。

「っ！あぶねえ……」

ギリギリの所でかわすカズマ。

「よく避けたわね」

「まあ、見慣れた動きだしな」

「……言うわね 隊長、野戦グラウンドに移動させて貰ってもいいですか？ここじゃあ狭すぎます」

サクラが場所を変えるよう提案した。

「そうだな、そう言うと思って使用許可は貰ってある 行くぞ」

するとニーナはあっさりと了承した、やはり練武館で戦って壊されるのを避けたかったようだ。

場所は変わって野戦グラウンド

「よし、それじゃあ二人とも始めていいぞ 私が合図するまで戦ってくれ それでは……始め！」

ニーナの合図と共に二人が動く、カズマは後ろにサクラは前に出た。

「やっぱりそうきたか……ならこいつだ！」

外力系衝剄の変化 爆音波

カズマの目の前の空間が一瞬歪むとすぐに元に戻り、迫っていたサクラに向けて超音波が放たれた

「甘いわよカズマ！」

しかし、それにサクラは旋廻を行ってカズマにせまりながらも止まることなく対応する。

内力系活剽の変化   咆撃

サクラの口から振動波が放たれてカズマの爆音波を相殺する。

そしてそのままサクラは切り掛かった。

キインツ！ ガキンツ！

金属同士のぶつかる音が野戦グランドに響く。

カズマとサクラは互いに切り合いながらも蹴りや衝剽を放って牽制しあっていた。

「はっ！」

先に動いたのはカズマだった。

外力系衝剽の化鍊変化   輝陽

カズマの体が光を放ちサクラの眼を潰す。

「くっ！」

サクラは咄嗟に眼を庇いつつ後ろに下がる。

「ッ！」

そこにカズマが迫って来た。

外力系衝系の変化 流星突

流れ星のように凄まじい速さでサクラに迫るカズマ、体勢を崩したサクラには避けようがなく、ニーナ達はカズマの勝利を確信したが……

「……………動かざること山の如し」

外力系衝剽の変化 不動山

内力系活剽の変化 衝反射

ニーナ達の予想を裏切り逆にカズマが吹き飛ばされた。

「……………くっ！」

突進に使ったエネルギーを返されたカズマは壁に叩きつけられて一瞬視界が暗転する。

しかし、一瞬で持ち直すとサクラの姿を探したが……………

「……いない？」

サクラの姿はなかった。

「殺戮か？」

そう思い辺りの気配を探るがまったく気配を感じられない。

「……静かなること林の如く」

内力系活剽の変化 静歩

殺剽の変化 陰樹林

この二つを組み合わせさせて使っているサクラは完全にカズマから認識出来なくなっていた。

「くそっ！どこ行った!？」

一方カズマは気配を探るが反応がない為、迎撃することにした。

大和流抜刀術 瞬斬

外力系衝剽の化鍊変化 電光石火

体に電気を流して反応速度をあげて大和流最速の瞬斬で迎撃する。

カズマの必勝パターンである。

しかし……………

「……………侵略すること火の如し」

外力系衝剄の化鍊変化　流紋炎

活剄衝剄混合変化　双頭火ー火龍

体に炎を渦卷かせながら焰を宿した刀を持った二人のサクラが飛び出してくる。

「っな！」

炎は斬撃では防ぎきれない

カズマは慌てて構えを解いて技を放つ

外力系衝剄の変化　風烈斬

カズマが振り抜いた刀から風が巻き起こりサクラの纏う炎を吹き飛ばす。

しかしその間に二人サクラが迫っていた。

「ぐっ！」

キインッ！ ガキンッ！

何とかその斬撃を弾くカズマ

そこにさらなるサクラの追撃が入る。

外力系衝剄の変化 火渦旋

炎の混じった竜巻がカズマに襲い掛かる。

「うおっ！」

身体を捻って跳んだカズマはそれをまともに喰らった。

「よしっ！」

サクラが勝利を確信した瞬間！

パンッ！

一際大きい音が野戦グラウンドに響いた、そしてそこには……カズマの姿があった。

「……………何が！？」

見物していたレイフォンが驚きの声をあげる、レイフォンですら捉えきれなかった早業であった。

「あちち……、おいサクラ！殺す気かよ」

「いや……そういつつもりはなかったけど……今のなに？」

サクラが驚きながら尋ねる。

それにカズマは「ふっ」と笑うと

「奥義を隠してるのはお前だけじゃないということぞ」

そう言って笑った。

「そこまで……」

同時に二ーナによって終了の合図が出された。

「いやー、凄かったな二人とも」

試合が終わると皆が寄って来てカズマとサクラを讃えた。

「カズマ、サクラさんが使ってた技って何なの？」

レイフォンが尋ねる。

「ああ、あれはあいつの部門の奥義、風林火山だ」

「風林火山？」

「ああ、あいつの部門の技で四種類の技があるんだ」

「それが風林火山？」

「そつだ、確か……速きこと風の如し 静かなること木の如し  
侵略すること火の如し 動かざること山の如し……だったかな」

「へー、つまりそれで技が幾つもあったんだ、化鍊剽を使うなんて  
珍しいね」

「まあな、けどこれらは対人戦闘用の技が多くてな他にも奥義はあ  
るぜ」

「へー、そうなんだ」

「まあ、久々に奥義は喰らったけどな 相変わらずチートな技だ  
ぜ」

「ははっ、カズマ防戦一方だったよな けど本当に最後の技はど  
うしたの？」

「そりゃ内緒だ、簡単には教えられねえよ」

カズマはそう言って口を割ろうとはしなかった。

「そうだ、皆聞いてくれ」

会話が一段落した所でニーナが切り出した。

「練武館でも言いかけたが……我々十七小隊は対汚染獣対応部隊と  
なった」

「え？」

カズマが声をあげた

「つまり、前回のよう汚染獣が襲って来た場合は私達で対処する  
ことになる」

「そりゃまた何で？」

シャーニッドが尋ねる

「……単純に武芸者が強いからだ、他の小隊は武芸大会で忙しいが  
我々ならばたいして訓練をせすともよいという結果になつてな」

「……………それで？次の戦闘はいつですか？」

尋ねたのはクラリーベルだ

「明日の朝だが……よくわかったなクララ？」

「ニーナの口ぶりからおそらくそうだろうと思いました、それで？  
相手は何ですか？」

「…………… 老生体です」

今まで黙っていたフェリが答えた。

「そうですか……腕が鳴りますね」

「いや、鳴らないから」

カズマとレイフォンの突っ込みが被った。

「ああ、クララ それ何だが幼生体と雄性体も確認されててな、二つに別れて迎撃することになるんだが……………」

「そうですね、それじゃあ俺とレイフォンで幼生体を始末するんで、  
クララ達は老生体を頼む」

カズマが速攻で返事をする。

しかし……………

「カズマ、何言ってるの老生体に決まってるでしょ」

「そうだぞカズマ 老生体相手に決まってるだらう」

「そうですね、私はレイフォンと幼生体を始末しておきますから」

サクラ、レイ、クラリーベルの三人から否決された。

しかしそれで諦めるカズマではない

「何を言ってるんだよ三人とも、ここは男女で別れたほうが数的にも調度いいだろ？」

「何を言ってるの、貴方と私が組まなくてどうするの」

「それを言うから夫婦である私とお前が組まないのもおかしいだらう」

「そうですね、それに私とレイフォンは大量の敵を相手するのに適してますから」

ことごとく反撃されて撃沈するカズマ。

しかし、それでもまだカズマは諦めていなかった

「ふっ、ならここはくじ引きで決めようじゃないか」

そこで最終手段を発動した。

「くじ引き……懐かしいなあ、前戦争の時に天剣でくじ引きをして誰が出るか決めたりしたよ」

それにレイフォンが懐かしそうに言いながら賛成し、クラリーベルも賛成したため、くじ引きが行われることとなった。

そして……

「さあ来い！当たり前くじよ！……ばかなー！」

「えーとY、幼生体だね」

「私は雄性体ですね」

「私は老生体だ」

「おっ、私も老生体だ」

大まかにわかったであろうが表にまとめると……

老生体 カズマ レイ サクラ

雄性体 クラリーベル

幼生体 レイフォン

ニーナ、シャーニッドは待機。

こうして明日誰が何を迎撃するか決まったのだった。

カズマに合唱。

くおまけく

余談だがこの後カズマはダークサイドに落ちてしまい、なかなか戻って来なかった。

「……………何故だ？何故私がまたこんな目に……………神よ！何が不満なのだ！」

『……………おまえが素直に戦わないからだ』

「……………ふっふっ、面白いことを言うね、俺が素直に戦わないから……………だと？」

「えーと、……………どうしたのカズマ？」

「そうかそうか……………武芸者こそ邪悪の権化だ！」

「ちよっ！本当に大丈夫？」

『練武館に行き、武芸者を皆殺しにするのだ』

「……はい、マスター」

ザッ ザッ ザッ ザッ

「ちょっとカズマ！どこに行くの!？」

「カズマ、早く帰るわよ」

「うるさい黙れ」

「ほほう……いい度胸じゃない」

「キサマもジャマをすルカ」

「面白いわね、なら相手してあげるわ!」

「ちょっと、二人とも落ち着いて……」

「シネ!」

外力系衝剄の変化 手裏剣

カズマの両手から凝縮された剄が放たれる。

「くだらない技ね」

しかしそれはあっさりとサクラに弾かれる。

「今度はこっちから行くわ!」

外力系衝剄の変化 気斬

大気ごとサクラの斬撃によって切り裂かれる。

「…………ムダだ」

しかしそれはカズマの刀によって防がれる。

「…………喰らエ」

外力系衝剄の化錬変化 雷手撃

カズマの指先から雷がほとばしりサクラを襲う

「…………っ!」

慌ててよけるサクラ

「……………」

そこに無言で追い撃ちをかけるカズマ。

「しつこいわね! ……速きこと風の如く」

内力系活剄の変化 烈風

瞬間風を巻き起こしながら凄まじい勢いでサクラがカズマに迫る、同時に鎌鼬が発生してカズマに襲い掛かる。

「……………ぬっ！」

受けとめ切れないと見たカズマが後ろに下がる……………が

「長い！」

「がはっ！」

レイに思いっきり頭を殴られて昏倒した。

「さあ、行くぞカズマ」

そのままカズマは啞然とした周りを残してずるずるとレイに引きずられて行った。

## バトルスタート！（前書き）

ひじょく（に久しぶりの更新です。多分センターまで更新はないかと、ご容赦下さい。

バトルスタート！

「さてと……どうしようかな」

レイフォンの目の前には万に近い幼生体が、地響きを起こしながらツエルニに迫っている。

「数が多すぎる……」

レイフォンの懸念はそこだった。むろん、倒せない訳ではない。しかしあまりに広範囲に広がっている為に一部を都市に近づけてしまうかもしれないのだ。

「リントンスなら纏めて倒せるんだらうけど……」

生憎、レイフォンの鋼系はそこまで万能ではない

「それなら……集めるか」

そう言っつて、レイフォンは釣りではなく汚染獣相手に漁を始めた。

操弦曲――爆壊

レイフォンは鋼系に莫大な剄を込めるとそれを幼生体の群れの両脇で爆発させる。

まだ子供とは言え、汚染獣が宙を舞う。

爆発に吹き飛ばされた幼生体が中央に落ちる。

動きが鈍くなる。

そして再び爆壊。

両脇にいた汚染獣が吹き飛ぶ。中央に落ちる。上から降ってくる汚染獣のせいで幼生体の進行速度が鈍る。

それを繰り返す。

いつの間にか、広範囲に広がっていた幼生体はかなり纏められていた。

あまりに中央に詰めた為に幼生体は身動きがとれないでいる。

「それじゃあ、ナイトがもたないし、さっさと終わらせよう」

操弦曲――崩落

レイフォンの剄をぎりぎり限界まで詰めた鋼糸が身動きがとれないでいる幼生体に襲いかかる。

加えて――連撃

再び鋼糸に剄を通して放つ。

一度に込めることのできる剄が限られている為、連続で技、もしくは剄を籠めることにより、威力を底上げする。

凄まじい音が響いた。

もはや錬金鋼が限界に近いため、高速で少量の剄を通して放つを繰り返したために、カメラのフラッシュのように光りが瞬く。

光りがおさまると、そこにはばらばらになった幼生体の足などが散乱していた。

「終わり……かな」

これでレイフォンの戦闘は終了した。

一方、その頃……

「だあああああ！死ぬううううう！？」

カズマは走っていた。

「カズマ、もう少しおびき寄せろ」

「鬼さんこちら 手の鳴るほうへ」

「鬼はお前らだあああ！」

離れた岩山の上にいる、レイとサクラに叫び返すとカズマは走る。

何故なら跳ぼうとすると衝剄が飛んでくるから。

離れ過ぎても衝剄が飛んでくるから。

「俺は魚の餌かよ!?!」

叫びながらもカズマは必死に老生体をおびき寄せる。

「ん、ご苦労」

「後は任せなさい」

外力系衝剄の変化 流撃

外力系衝剄の変化 烈風

レイとサクラの技が老生体を切り裂く。

両足を斬られた老生体が倒れる。

カズマに向かって。

「え?は?ちよまっ」

カズマの声は途中で途切れた。

「作戦通り」

薄れゆく意識の中、カズマはそう言っレイの声を確かに聞いた。

まずは原作イベントをこなそうか、カズマ？だれそれ？（前書き）

投稿です

まずは原作イベントをこなそうか、カズマ？だれそれ？

「殺す気か！？」

あの後……なんとか咄嗟にレイフォン直伝の金剛剱を発動したおかげで助かったカズマはレイに向かって怒鳴っていた。

「ああ」

「ああ、じゃねえええええええ！？」

自分は死にかけてたというのにまったく反省した様子の無いレイに向かって無駄だと思いつつも叫ぶカズマ。

「浮気者は剣で切り捨てる、篠崎家の教えだ」

「俺がいつ浮気した！？」

そう言うとレイはサクラを指差して

「あの女と会話した」

「それだけで！？」

なんといかすごい理由だった。

「ちなみに、その浮気というのはどこまでが駄目なんだ？」

「異性と私に連絡せずに食事をしたら父様を呼ぶことになっている」

……バレたら即死だ。

「そ、そのくらいならまだ大丈夫だな。よかった、よかった」

「そうだな、貴様の首は空を舞わずに済みそうだなぞ」

にこやかに笑いながら後でサクラに口止めしとかないと、と裏では  
擬装工作の準備に余念がなかった。

カズマSideEND

Sideライフオン

「あれ？どうしたんだろ？なんか寒気が？」

「何？どうしたの？」

「うん、何だか急に寒気がしちゃって……」

「風邪でもひいた？」

「いや、大丈夫だと思うけど……」

「もう、とにかく気をつけなさいよ」

「うん、わかったよりーリン」

「まったく……それじゃあ今日は遅いのね？」

「うん、今日はカズマ達と食べてくるよ」

「はいはい、あまり遅くならないようにね」

という会話があったのが今朝

「ん？隊長、熱でもありません？」

午後、武芸科で大規模な合同演習があった後、レイフォンはリーナの顔が赤いのに気付いた。

「ん？そうか？自分じゃわからんのだが……」

「けど、赤いですよ。ね？カズマ」

「ん？ ああ、そうだな。確かに赤いな」

「カズマもそう思うかなら帰りに医者にでもかかるか」

「いや、今行ったほうがいいんじゃない……」

「何を言っている？そんな暇は……」

ないと言おうとしたのだろうが、そこでニーナは倒れた。

「うわっと……」

慌ててレイフォンが受け止める。

「おい、レイフォン」

「わかった、僕が医者に連れていくからカズマは皆に連絡よろしく」

「わかった」

こうしてニーナを医者に見せたレイフォンだったが

「風邪だな」

「はあっ……」

「熱、喉の腫れ、鼻水、どれを見ても典型的な風邪の症状だ。まあ、  
武芸者なら薬を飲んで、活剗を半日もしていれば治るだろうがな」

「はあ、」

「ほれ、薬だ。目が覚めたら飲むように言っといてくれ」

「わかりました。ありがとうございます」

そう言っつて薬を受け取るレイフォン。

「ちとと……」

薬を受けとつたレイフォンだったが、気になることがあつた。

「もしかして……」

気になつたレイフォンはニーナの劉脈を調べようとしたが……

「む？ここは何処だ？」

ニーナが目を覚ました。

仕方がないので事情を説明する。

「そつか風邪か……」

「とりあえず薬は貰いましたけど……」

「そつか、なら寄越せ」

そうやってニーナは薬を受け取ると流しに向かった。

「あの、薬を飲むなら活剏はしないほうが……」

レイフォンはそう注意したがニーナは既に薬を飲んでいた。

「何を言っている？薬を飲んで活剏をすれば相乗効果で……」

ニーナの言葉はそこまでだった。

バタツ！

見事なまでにそのままの姿勢で倒れた。

「やっぱり……」

レイフォンは無言で頭を抱えたが、悲劇はここから始まった。

幼児二十ナと嫉妬と大波乱序章（前書き）

連休で書けた分だけ投稿します。非常に遅れてすいません。受験が  
終わるまではなかなか更新できません

## 幼児ニーナと嫉妬と大波乱序章

S i d eレウ

「何をしてるの？」

その状況に、レウはとりあえず目を丸くした。その後で納得した。むしろ当然というものと、諦めな息を零したぐらいだ。

いままで倒れたことがないのがおかしいくらいのがんばり屋なのだ。三年目になってようやくガタが来始めたということなのだろうか？ だとしたら運がない。

いまがその、頑張りの見せ時だろうに。

「えーと……」

レウたちの寮の前だ。そこにニーナの後輩がいた。名前はもちろん知っている。レイフォン・アルセイフ。ここに来たこともあるし、何度かニーナと一緒にいるところを見た。

試合も見ている。

ただ、その背にニーナを負っているだけだ。

「女子寮だから、勝手に入るわけにもいかないし、チャイムを鳴らしても誰も出てこないし……」

「あー、この時間、普通なら誰もいないもんね」

そういうレウにしても、午後からの授業が自習になっていなければここにいなかった。普段なら図書館に行くのだが、寮に借りっぱなしの物があることを思い出したのだ。行けば他の物を借りたくなる。

しかし、もし、レウが早く帰らなければ、レイフォンはどうしていたんだらう？

「来て」

そんなことを思いながら、レウはレイフォンを寮に入れた。

ニーナはレイフォンの背中で眠っていた。その顔が赤い以外ではおかしなところはどこにもなかった。

レウがニーナの体調について尋ねると、風邪で倒れたと教えてくれた。

風邪…… 武芸者が風邪。

なんだか信じられない気分だ。特にニーナと風邪という組み合わせは縁遠い気がする。それでも倒れてしまったのだから、やはり頑張り屋の限界が近づいているということになるのかもしれない。

「ニーナの部屋まで運んでちょうだい」

「はい」

素直だなど、レウは思った。 気取ったところもない。 朴訥な感じもする。それは純だということなのだろう。 その癖、第十七小隊のエース。 一年なのに小隊長。 しかも話しに聞くととても強い。

ニーナがレイフォンのことを語る時、そこには羨望と悔しさが均等に混じっている。 それ以外の因子も混じっているが、おそらく話している当人もそれに気付いていないだろう。 セリナにおちよくられて、ようやく自覚の欠けらのようなものが芽生えているかもしれない程度だ。 が、あの人のおちよくりが逆にニーナの思考を硬直化させているような気もする。

そんなことを考えている間にニーナの部屋に辿り着く。

飾り気のない部屋をレイフォンは見回したりしなかった。 ベッドを見つけるとすぐにそこに移動する。 ベッドの側にある出窓だけが唯一女の子らしい小物やぬいぐるみで飾られているが、そこにも目を向けない。

慎重に、レイフォンはニーナを下ろそうとした。

が、

「ぐっ……」

レイフォンがうめいた。 なぜかはすぐにわかった。 首に回されていたニーナの腕が力を込めたのだ。

眠っていたかと思っていたニーナの目が半開きになっている。

「ニーナ、気付いた？」

「ん」

寝ぼけた声が返って来た

「隊長、とりあえずベッドで寝ましょうよ」

レイフォンが苦しげに呟く。

が、

「やー」

信じられない言葉を吐いた。

「……………は？」

「やーだー、下りない」

……………すみません、現実を返してください。

レウは反射的にそう思った。夢だと思ったのだ。

いや、夢であればいいなと思った。

「隊長……………お願いしますから」

「やーだー、ここがいい」



レウSideEND

Sideカズマ

はい、こちら現場のカズマです、気になって様子を見に来ましたが、ご覧の有様です。

隊長が幼児化、大事件ですよこれは、さて、ここからはスタジオに返しましょう。シャーニッドさん！

「おう、こちらシャーニッドだ、面白いことになってるねえ、とりあえず今のニーナを撮つとけ、儲かるぜ、後、フェリちゃんとりーリンちゃんにも教えておくぜ」

はい、という訳で修羅場が予想されます第一女子寮です。

では次回にご期待くださいーい！

加速する修羅場と第一女子寮（前書き）

何とか投稿です。

## 加速する修羅場と第一女子寮

あの後、カズマにより招聘された女子はやって来るなり一瞬で状況を把握し、現在は場所を移して応接室にいた。

いつもは暇な時に集まってお茶やお喋りをしたり借りてきたエンターテイメントデータを大型モニターで再生しているが、今はそのモニターも沈黙していた。

テーブルにはキッチンを借りてリーリンがいれてくれたお茶がある。ついでにリーリンが持ってきたクッキーが皿に載せられている。

「……………」

そのリーリンは無言。

レウも無言。

「……………」

フェリも無言。

「……………えーと」

レイフォンは居心地悪そうに。

「むー」

ニーナは部屋の空気を敏感に察知して不満げにしている。

不満げに、レイフォンの腕にしがみついている。

セリナがないことは、たぶん幸運なのだろう。

しかし、この現場をカズマとシャーニッドに知られたのは間違いなく不運だ。何故ならこの修羅場はカズマによるものだからだ。

「で、これはなに？」

湯気立つお茶を飲み、リーリンが引き継いでくれた。責める目で、底冷えのする目でレイフォンを見ている。

レイフォンは顔をしかめている。

「あれだよ。僕もあつたじゃない。風邪だと思って薬飲んだら、実は風邪じゃなかったって……」

「ああ……」

それで、リーリンは納得した。とりあえず。そうとりあえずという風で理解は示した。

だけど不機嫌を直すには至らない。

「どづいこと？」

「……私達にも分かるように説明して下さい」

フェリが心底冷えた声でレイフォンに尋ねる。

「ええと、普通の武芸者だとそうは起こらないんですけど、たまにあるみたいなんですよね」

「何が？」

「剽路の拡張っていうのかな？ 剽脈の能力増大だったかな？」

レイフオンは不確かな記憶を探って言葉を絞り出す。

しかし、武芸者の身体機能に詳しくないレウと念威操者であるフェリに理解できるはずもない。

武芸者には、一般人には存在しない臓器が一つある。 剽脈という剽というエネルギーを生み出す器官を持つ、そしてその剽を身体にはりめぐらせるものを剽路という。

「ほとんどの人は、剽の総量はあまり変化しないんだけど、時々いるんですよ。大きく変化する人が」

「つまり、ニーナがいまその状態だっていうの？」

「たぶん」

「弱きだなあ」

「いや、僕も他の人がこうなったのを見たのは初めてだし」

「……ということは貴方も？」

「レイフォンは大変だったんです」

当時を思い出したのか、リーリンが重いため息を吐いた。

「こんなものじゃなかった。六歳から一年ぐらい、ひっきりなしに高熱出して倒れてたもの」

「そんなひどかったの？ じゃあ……」

レウとフェリがニーナを見る。

赤い顔をしてレイフォンにしがみついているニーナは暇をもてあましだしたのか、レイフォンの髪の毛を引っ張り出した。

レイフォンが小さく悲鳴を上げる。

フェリとリーリンがそれを鋭く睨み、しかしすぐに手元のお茶に視線を落とした。

（おもしろすぎる）

思ったことを口にせず、レウは頬のひきつりを感じながら友人を見続けたが。

（いけない、約束があるんだっ！）

いつまで見ていても飽きない光景だが、もう行かなくてはならない。

レウは話しを纏めにかかった。

「じゃあニーナはそんなでもない？ ていうか、その話とこの状態は繋がってるの？」

「初めて倒れた時に、やっぱりレイフォンも医者に風邪だって言われて薬を出されて、それを飲んだら……」

「変なことになった？」

「こつではなかったですけどね、ずっとなんか、変なこと喋ってましたよ。気持ち悪かったら」

「ひどい」

軽く傷ついた様子で、レイフォンがひきつった顔をしていた。たぶん、髪を引つ張られているせいでもある。

「まあまあ、それで、これはどうすれば治るわけ？」

「薬が抜けるまではこんな調子だと思いますよ」

「となると、遅くとも今日中には治るってことよね？」

「そうですね」

リーリンが頷く。ニーナが遊ぶくとレイフォンの肩を揺すっている。なんだか、段々と笑えない気がしてきたので、なるべく見ないようにしようと思った。

「それにしても、なんでそんなに君に懐いてんの？」

「な、なんででしょうね」

レイフォンの声はひきつっている。ニーナの遊べ攻撃に必死の作り笑いを浮かべるのがせいっぱいの様子だった。

(やれやれ……)

レウは内心でため息を吐いた。 鈍感と鈍感の相乗効果だ。

みんながみんな、この状況を理性的に受け入れられなくて、それでも理性を保とうとしてひきつった顔をしている。

レウはぬるくなったお茶を一息に飲んで立ち上がった。

「さて、現状把握はこれで終了として……わたしこれから用事があるからニーナをお願いしていい？」

「「「なっ!」「」」

「まあ、ニーナも君に懐いてるみたいだし、夜までお願いね」

そう言ってレウは友人を気にしながらも去っていった。

## カズマSide

はい、こちら第一女子寮前のカズマです。現場に動きがありました。

レウさんが寮を出ました！ 繰り返します。レウさんが寮を出ました。

これで寮にはレイフォン、隊長、リーリン、フェリ先輩の四人になりました。レウ先輩がいなくなった事により人見知りのフェリ先輩の動きが活発になると予想されます！………と！ さらに動きがありました。クララですクラリーベルがやってきましまよつどもえのバトルになりそうです。これですます修羅場が予想されますね。スタジオのシャーニッドさん、どう思いますか？

「おう、こちらシャーニッドだ。レイフォンだからそこまでないと思うが、今のニーナなら進展も有り得るな。ところで現在誰がレイフォンを射止めるか賭けが始まつてるんだが、カズマ、お前も一口乗らないか？」

「現状維持に一万」

「俺もだ、ちなみにオツズは二倍だ。リーリンちゃんが本命かな」

わかりました。ありがとうございます。では次回もお楽しみに

修羅場到来！？ (前書き)

遅くなってすいません、今日から復活します。

そこそこのペースで投稿するのでよろしくお願いします。

ただ短いです

## 修羅場到来!?

「えーと……………」

レウが去った後、不気味な沈黙が応接間に漂っていた。

そんな沈黙に吞まれたレイフォンは声を出せず。

「……………」

「……………」

リーリンとフェリも沈黙。

「むーっ」

そしてニーナも何故か場の空気を読んだのか無言

女子寮の応接間是不気味な膠着状態に陥っていた。

しかし、それを破るものが現れた。

「こんにちはー！ ニーナさんいます?」

そう、先ほどカズマにより到着が伝えられたクラリーベルである。

彼女の出現により、場の空気は一気に動きだす。

「あっ、クララ。」

助かった実は隊長が（かくかくしかじかで…

……) 困ってるんだよ」

「へえ、そんなことになってるんですか……興味深いですね……」

それを聞くとクララは面白いオモチャを見つけた子供のような顔をした。

「幼児化しているというのなら……」

チラリとニーナを見ながらクララが続ける。

「とりあえず、それらしい格好をさせたくないですか?」

「ああ……それはたしかに」

「同感です」

その言葉にリーリンとフェリが同意を示す。

場の流れは一気に柔らかくなっていった。

「けど、どうします?」

「確かに……着替えさせようにもニーナさんがそんな服持ってるわけないだろうし……」

「レウさんに聞いてみる?」

……電話中

「あるだつて、三階に衣装部屋があつてウィッグとかもあるから好きに使つていいつて」

「……では、行きましょうか。      レイフォン」

「はっ、はい！」

「私たちが戻るまで隊長の相手をしているように、くれぐれも……」

「変な気は起こさないように！」

「はっ、はい！」

思わず背が伸びるレイフォン

そしてクララ達三人は去つていった。

「……ふうっ」

ため息をつくレイフォン

しかし、悲劇はここから始まつた。

そして、幸か不幸か、そのことに気づいているものはまだ、誰もいなかった。

sideカズマ

「はいっ！ やってきましたレポーターのカズマです。 な  
にやら女性陣が三階に上がっていきレイフォンと隊長が一階に取り  
残されたようです。しかし大変そうですね（他人事） しかし幼  
い隊長もいいものだ………おお！？ な、なななななんと！  
？ 今隊長がレイフォンにキスを！？ キスをしました！？  
一体何が起きたのでしょうか！？」  
おっと、女性陣が降りてきました。 あつとフェリ先輩が動きま  
す！つと！？ そんな！？こ、これは大変なことになってしま  
した！第一女子寮、もしかしたら今ツエルニで一番熱いのはここかも  
しれません！ おっと、ここで会場のシャーニッドさんにお返し  
します。 シャーニッドさん？」

「いやー、見てたぜ今のは、一体どうしたんだ？ しかもそのあ  
とのフェリちゃんの行動！ こいつはますます目が離せないな！  
俺も現場に向かう、カズマまってる！」

「はいっ！」

「というわけで第一女子寮前からお送りしております」

修羅場到来！？ (後書き)

ご意見感想お待ちしております

レイフオン……♪(前書き)

やっと更新ペースを戻せます。お待たせしてすみませんでした。

レイフォン……………」

リーリン達三人の女性陣が三階に着替えを取りにいってるあいだにそれは起きた！！

ここからはカズマの視点からお送りします。

「おおっと！　　どうやら隊長の着替えを取りに女性陣が三階に上がりました、レイフォン、必然的に隊長と二人きりに、さー、レイフォン選手、非常に困っております、さあ、どうするのでしょうか？　おおっと！　　隊長が何やらレイフォンに迫っております！　レイフォンなにやら必死に宥めていますか……あぁっと！　なにやら隊長が近づき……キスしたー！！！！！！！！！！

こ、これは一体なにが起きたのでしょうか！　レイフォン、呆然としております。　どう思います？　解説のシャーニッドさん？」

「うむ、なんか口調とかは幼いのに体はでかいというギャップがあるってエロいな」

「はい！　正直な感想ありがとうございます。　っと、女性陣が戻って来ました、どうやら今の場面を目撃してしまった模様です。　さあどうなるのでしょうか？」

( ; 。 ) ええと……何が起きたんだっけ、確かリーリン達が着替えを取りに行ってる間に隊長に遊んでとせがまれて必死に断つてて？確か了承の返事したら……

と、そこまでかんがえたところでレイフォンは殺気を感じた、しかし恐ろしい、なにせ天剣授受者に匹敵するのではないかという勢いだ。

しかもそれが三つ、咄嗟に戦闘態勢に入ったレイフォンだったが次の瞬間、それを後悔するほどの恐怖が生まれた。

「レイフォン？」

「り、リーリン？」

それは幼なじみの笑顔だ。顔は笑っているが笑っていない、まるでどうすればいいのかわからず笑っているような感じだ。

笑顔だ。 そうまがうことなく笑顔だ。 しかしレイフォンが感じたのは恐怖だ、ここにいればきつと怖いことが起きるに違いない、そう感じたレイフォンは先程まで混乱していたとは思えないほど俊敏にこの場を脱出すべく動こうとしたが……

「いつ!？」

いつの間にか周りを念威爆雷に囲まれていた。

「フォンフォン？」

愕然としてその犯人であろうフェリを見るが、念威操者であり感情表現が苦手であるはずのフェリが美しいといえるほどの笑顔を浮かべているのを見て、レイフォンは死を覚悟した。

そして……最後に耳にしたのは

「訂正します、これに関しては貴方は最低です」

クラリーベルの恐ろしいほど感情の抜け落ちた声をだった。

怒りゆえか外から見ていたカズマでさえ反応できない速度でくり出された手刀はあっさりとレイフォンの意識を刈り取った。

目の前で行われた凶事に幼くなったニーナは呆然と立ち尽くしていた。

sideレイフォンend

sideカズマ

さあ、美しくも冷たい笑みを浮かべた三人に包囲されたレイフォン選手、後ずさっております。しかしシャーニッドさん、フェリ先輩の笑顔とは大金星ですね。





## 迫る脅威

レイフォンが死んで三日、ようやく回復してからはいつも通りの日常が戻ってきた。　　廃貴族とやらが表れることもなくおおむね平和だったが……

「都市が暴走を？」

「ああ、なぜか汚染獣を避けようとしていない、たまたまフェリが発見したらしいんだが、なぜかツエルニは進路を変えないんだ」

カリアンに呼ばれて来てみるといきなりそんな事実を告げられた。

「仕方ない、それなら俺たちがなんとかするか……」

カズマがだるそうに呟く

「そう言ってくれると思っていたよ。　　しかし今回は不味いのでね……」

「不味い？　　今このツエルニより安全な都市なんてグレンダンを筆頭に数えるほどしかあるまいに、どういことだ？」

「老生体だ。　　しかも四体もね」

「な……」

思わず告げられた事実には絶句する。　　グレンダンですらそんな危機は訪れなかった。それが来たのだ。

「会敵はいつ？」

「三日後だ。それまでにツエルニが進路を変えなければ戦いになる」

「かなり厳しいな……」

相手が老生体でも一体なら問題ない、錬金鋼という制約があっても、こちらには天剣級の実力者が二人、準天剣級が三人いるのだ。だが四体ともなると話は別である。

「仕方ねえ、遅延戦闘を仕掛けるか？」

「だね、倒せなくても時間さえ稼げば」

「それがそつも行かなくてね……」

「なんだ、まさか四体とも集団で来てるのか？」

「その通りなんだよ」

カリアンがため息をつく

「な!？」

冗談のつもりが適中して絶句するカズマ

「そんな……汚染獣が徒党を組むなんて……」

レイフォンが呟く、それは確かに異常だ。なにせ老生体自体数が少ないのに、それが都合四体いて集団行動までとっているとなると異様を通り越して異常だ。

「なんだ、仲良し一家かよ？けど、確かにそれじゃあ足止めは難しいな」

おそらく全部を食い止めるのは都市外というハンデを背負った状態では不可能に近い。

「こいつは都市で迎え撃つか……」

「しかないね」

「ならば今回、他の生徒はどうする？」

カリアンが訊ねる。

「正直足手まといですね」

「ああ、けど流石に待機はさせとくべきですね、グレンダンでの例もあるからな」

「ああ、そうか」

「そうかって、お前の初陣だろうが」

「そうだったね」

「……何の話をしているんだい？」

話についていけなかったカリアンがたまらずに訊ねる。

「こいつの天剣授受者としての初陣の時の話だ。たしかそのとき相手は脳が二つあったからデルボネさんすら敵が二体いると勘違いしたんだっけか？そのうえ幼生体がいたらしいし」

「うん、けど尻尾で繋がってる所を斬ったけど別れただけだったよ」

「そうなのか？ けどまあ、これで思い出したろ？」

「たしかに今回もそういうタイプかもしれないね」

「……つまり、幼生体がいるかもしれないから今回は武芸科の生徒も準備させたほうがいいと？」

「ああ、そういうことだ。話が早くていいな」

「そういうことで、準備をお願いしますカズマ」

「ああ、今からフェリ先輩のところにいくか。そいつらの特徴とか詳しいことも聞いときたいしな」

二人は戦いに備えるべく動き出した。

「で？ 総括するとそいつらは今現在八体いると？」

「端子からの情報じゃそうなっています」

あのと、フェリの元を訪れた二人は驚愕の事実を告げられていた。

「そいつはついてないな」

「……………流石にまずいね」

四体と聞いていたのが八体になったのだ。二人のショックは大きかった。

「しかし、どうやら彼らは同じ体を共有しているようです」

「つまり、纏めれば一体ってことっすか？」

「そうなりますね」

「えーと、それって？」

「まんまお前の初陣と同じだな、まあ、そんなときの四倍だが」

「ねえ、カズマ。これってまずいかな？」

「かもな、しかし俺は嫌な予感がしてきたぞ」

学園都市ツエルニを災厄が襲おうとしていた。

次回予告編

「カズマ！ こいつは名付きよ！」

「ん、逝ってこいカズマ」

「ヤマタノオロチ？ 草薙の剣？ なんだそりゃ？」

「あまのむらぐも？」

「これは不味いですね……」

次回

日本神話

## レイフォン覚醒!?

レイフォンが死亡してから1週間、話を聞いた第一女子寮寮長、セリナ・ビーンは夜な夜な怪しげな実験を続けていた。

ぐつぐつと緑色の液体が煮込まれる鍋

散乱した果実? と思わしきもの達

散乱しているノート

そして何故か異様に走り回っているマウス達

「成功ね……これを使えばニーナちゃんも……うふふふ」

不気味な笑みを浮かべながら彼女は鍋から掬い上げた液体を試験管に移す。

「さて、やっぱりニーナちゃんがすぐに気づけて私も見守りやすいような状況をつくらないとねえ……」

そういつて彼女は妖しく笑った。

↳そして三日後

レイフォンとカズマはニーナに連れられて商店街に来ていた。

「で? どれくらい買えばいいんですか?」

「さあな？ 私はできんからな、とりあえず寮長から頼まれた分を買っていくしかないな」

「けど隊長。なんで俺とレイフォンが隊長の寮まで荷物持ちしなきゃならんのですか？」

「さあな？ よくわからんがセリナさん直々のご指名だ。シャーニッド辺りに頼んでも断られるだろうしちょうどよかったからな」

そういいながらも三人の手には山ほど荷物が積まれていくが武者なので問題ない

「よし、ひとまず頼まれた物は買い終えたな。じゃあ戻るか」

そういつて自身も大量に荷物を抱えたニーナが歩き出す。

それに続いてレイフォンとカズマも歩き出した。

「あらあら、ニーナちゃんご苦労様。二人もありがとうね、よかったらお茶でも飲んでいつてね」

そういつてセリナが三人分の紅茶を用意する。

その目が妖しく光ったが気づいたのはカズマのみだ。

「いえ、悪いですよそんな」

「はい、大したことじゃないですから」

そんなことをいってカズマとレイフォンはそれを断る。

片方は素で、もう一方は意図的に

しかし、それでは面白くないと考えるのがカズマだ。

「なに、レイフォン。一杯くらい頂けよ」

そういってセリナがニーナに渡そうとしていたカップをとってレイフォンに飲ませる。カップを無理矢理傾けると案の定孤児院でつちかった貧乏性が発動したらしく溢すのはもったいないとレイフォンはそれを飲んだ。

そして……倒れた。

「へ？」

「おいどうしたレイフォン!？」

カズマは間の抜けた声をもらし、ニーナは驚いたように叫んだ。が、しかしニーナはすぐ原因はセリナが渡した紅茶だと気づく。

「セリナさん……あの紅茶に一体何を入れたんですか？」

「ニーナちゃんが素直になる薬よお。この間はずいぶん活躍したそうじゃない」

「は？ なんのことですか？」

「とおっ！？ そんなことより俺はレイフォンを連れて寮に戻りますよ、隊長もそれでいいですか？」

「ああ、目が覚めたら悪かったと謝っておいてくれ」

そういつてニーナはセリナに説教をし始めた。

それを後ろ目に見ながらカズマはレイフォンを抱えて跳んだ。

「っ！？ ニーナは？」

しばらくして、部屋のベッドに寝かせているとレイフォンは目を覚ました。

「おう、眼を覚ましたかレイフォン」

「カズマ？ えつと僕は？」

「ん？ ああ、隊長のところまで飲んだ紅茶になんか入ってたらしくてな、飲んだ瞬間倒れちまったんで、俺が運んできたんだよ」

「ああ、そうだったの？」

「ああ、結構驚いたぜ」

しかしそう言いつつカズマは内心なんの変化もないなどガツカリしていた。

「そう？　　というかカズマあの紅茶に」

変なものが入ってるって気づいてたでしょ。　と続けたかったのだろうがそれは部屋への乱入した者によって遮られた。

「レイフォン！？」

「あ、リーリン」

血相を変えて飛び込んできたのは我らが幼なじみのリーリンだった。

「大丈夫！？　平気なの！？」

「え、あ、うん。　もう平気だよ」

「そう……」

そう言って安堵したため息をリーリンはついた。

「しかし早かったな、というかどこでレイフォンが倒れたって聞いたんだ？」

「え？ ああ、ニーナさんから電話があったのよ」

「そうか、ところで……いつまでそうしてる気だ？」

「へ？」

そう言われてリーリンは始めて自分の状況に気づいた。自分の顔はレイフォンの目と鼻の先、わずか数センチのところにあるということ。

「あつ……!!」

顔を真っ赤にして離れたリーリンだがここで驚くべきものを見た。

それにはリーリンをからかおうと口を開きかけていたカズマすら啞然とした。

それは、顔を真っ赤にしているレイフォンであった。

ここで皆さんは思うだろう、いやいや、普通そうなるからと

しかしそれはありえないのだレイフォンが、しかも相手が幼なじみのリーリンである以上。

「レイ……フォン？」

おもわずカズマが疑問系を使ってしまっほどの光景はありえないものだった。

普通レイフォンならここで疑問符を浮かべているはず。しかし、こ

の状況は……

「と、とにかく僕は大丈夫だから」

そういつてレイフォンは布団をかぶってしまった。それを切っ掛けにカズマとリーリンも動き出した。

「そうか、それじゃあ俺は買い物にでも行くわ」

「なら私も買い物に行こうかな」

いまだに動揺しながらも平静を保つべく二人は普段通りを装い行動をした。

そして、この間レイフォンを一人にしたことにより事態は進行した。

それは……よいことなのか……悪いことなのかそれはそれぞれ違ったがレイフォンを巡る恋模様には波乱が起きることを告げていた。

レイフォンの心は！？（前書き）

ちよつと話が変わります。時系列的には老生体襲来前だとお考え  
ください

レイフォンの心は!?

「よ、ようレイフォン。調子はどうだ?」

買い物から戻ったカズマは、おずおずと未だベッドにいるレイフォンにたずねた。

「……うん、大丈夫だよ。……リーリンは?」

「え、ああ。今日はクララ達と食べてくるってさ」

「そう」

「ああ、……飯作るか」

「そうだね」

異様に口数の少ないレイフォンに、気圧されながらカズマは不審に思っていた。他人にはわからないだろうが、リーリンは帰ってこないと聞いたと、勝手にレイフォンの放つ雰囲気、ほっとしたのを感じただのだ。

それにレイフォンの口数が少なくなっているのは、大体考え事をしているときだ。それはつまり……

カズマの中で結論が次々と導きだされていく

レイフォンが考え事をしている。そういえば、リーリンが帰ってこない、と聞いてほっとしてたな。つまり考え事は、リーリンについてか……

「っ!？」

そこまで思い至って、カズマは慄然とした。

あのレイフォンが幼なじみとはいえ、異性を意識している………  
だど？

カズマが戦慄したのはその一点に限られる。 鈍感免許皆伝、絶対鈍感、鈍感王。 あらゆる鈍感の称号を総なめにしたレイフォンが異性を、とくに異性というただ一点が彼を戦慄させたのだ。

「こりゃ明日は汚染獣が来るな」

あまりにひどい言い種だが、それだけの鈍感さを発揮してきたレイフォンのことを知る者としては当然の反応と言えた。

と、そんなこんなでカズマが混乱したり戦慄したりしている間にレイフォンは着々と料理を完成させていき、いつの間にか夕飯の準備は終わっていた。

「じゃ、じゃあ食うか」

「うん、そうだね」

未だに落ち着かないカズマを後目に、レイフォンは黙々と夕飯を片付けていく、二人の間に会話はなく、これもまた異常と言えた。

(なんとかしないとこの気まずい空気のままか……)

しかし、お喋りなカズマが沈黙にいつまでも耐えられるわけではなく、夕飯後にレイフォンから聞き出すことに決めた。

しかし……

そこで聞いた言葉は……ありえないものだった。

「なあ、レイフォン。俺の聞き間違いじゃなきゃつまり……？」

「うん、そういうことだね……」

レイフォンはリーリンのことが好きだと言ったのだ。

ツエルニの夜はまだ始まったばかりだった。

以下Kさん談

「ええ、本当に驚きましたよ。薬のせいとはいえレイフォンがあ

そこまではつきり言い切るなんて……まあ、付き合いの長さなどを考えたならそうかもしれませんが、鈍感じゃなくなっても今度は誰が好きか選べなくてくだくだになるかと思っただんですけどね。まあ、これでやっとリーリンも報われるなと思っっていたらまさかの展開がまっていましたからね」

では次回！      告白大作戦！      成功率100%じゃん？なんて  
野暮なことはいいつこなし！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0660/>

---

二人の少年～～十七小隊最強記！？

2011年11月20日05時39分発行